
とある未知の波動能力（アンノウン）

グラニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある未知の波動能力^{アンソウ}

【Nコード】

N4321Q

【作者名】

グラニ

【あらすじ】

超能力が一般科学として認知された学園都市。夏休みに入る前のテスト期間中、白井黒子は通報を受け風紀委員<ジャッジメント>として第7学区にある喫茶店に赴く。そこで出会った3人の男たちと、偶然かやってきた友人たち。

自称ナイスガイなマスター：景山由樹

寡黙なイケメンマスター：枝葉航真

上条当麻の親友：藤井晃

人と人が変わった時、物語は動き出す

昔に投稿していたのを諸事情によって削除したものを、改善して投稿したものです。主に携帯で更新します。

1話：噂の不良喫茶（らくえん）（前書き）

あらすじ通り、昔に投稿していたものを改善して改めて投稿します。主に携帯で更新を行います。

また時間軸が原作よりかなり前からスタートになります。とりあえずポルターガイスト編と絶対進化計画の時間を合わせるようにしているつもりです。

超電磁砲以降は禁書目録の方へ介入していく予定です。

そのためキャラ崩壊が予想されますので、注意されたし（優しいむぎのん、しょたきん、アクセロリータなどなど）

あわきんかわいいよあわきん

1話：噂の不良喫茶（らくえん）

都市伝説の1つに、こんなものがある。

亡霊集団 カースト

誰が発端かは知らないが、いわく能力者が裏取引で『外』へ連れて行かれ秘密工作員として再び『中』に戻ってくるという。

そして、学園都市にはそれらを撃退する専門の人間もいるというものだ。

そんな根も蓋もない都市伝説つわさが流れているのは、学園都市。

230万人という人口のうち8割が学生というものだから、当然そういった都市伝説に信憑性はない。

だが、信憑性のない都市伝説つわさを流したのが学生なのならば、それを聞いて話しの種にし盛り上がるのも同じ学生なのだ。

「だあああああつ、もう不幸だあああつ！」

まだ暑さが本格的なものになる前、人気のない裏路地を駆けまわるのは上条当麻という変哲のない少年だ。

学歴のない高校に通い、成績もいまいちといういたってどこにもいそうな彼が走り回っているのには当然わけがある。

7月4日。夏休みには本格的に突入していないというのにテスト週間のおかげで早めに帰れるこの時期、学生のカップルがわんさか街に溢れかえるのだ。

当然、そんなハッピーな相手などいるはずのない上条さんは普通に帰るはずだった。今朝どういわけか行く途中で夕飯のための下準備をしていたピーマンなどが摩訶不思議に弾けて台所が混沌と化しているという現実から目をそらさず、帰ったらまず掃除だなーと思っていた、その時だ。

たまたま中学生らしきカップルが不良に絡まれていた。

数は2人。

だからどうしたと聞かれたのなら、言葉一つで言い表すなら「止めに入った」。

不良はどこをどう見ても高校生だ。高校2年生の上条よりも年上に見えるから、おそらく3年生。私服だったから下手をしたら大学生かもしれない。

そんな良い大人が中学生に寄ってたかっている。

『フォックスワード 偽善使い』である上条には見過ごすことのできない光景だった。

相手は2人と油断したのが間違い。そろそろ奥から5、6人と仲間が現れ形成は逆転。

かくして上条さんの逃走劇は始まりを告げたのだ。

それがつい2時間前のこと。人の迷惑にならないように裏路地を選んだのは失敗であり、結果。

上条当麻は20人ほどの不良に行き止まりへと追い込まれていた。

背後には上条の身長の3倍ほどある壁、というか工事のための機材が積みまれている行き止まり。

目の前にはわらわらと群がる年上の不良さん達。

「不幸だ……………」

もはや口癖と化した言葉を上条は零す。

昔からそうだ。ついてない、不幸だ。

だが、そのおかげでさきほどのカップルは無事難を逃れたはずだ。期待は薄いが風紀委員ジャッジメントを読んでもくれると、ありがたい。すぐに通報を聞きつけ来てくれるはずだ。

だが、それはラッキーな展開であり、実際は自分一人で乗り越えなければいけない。

「なんだなんだあ？ ヒーロー気取ってよお……人助けで善人気取りか？」

不良の言葉に、上条は自嘲の笑みを浮かべる。そうだ、決して誰からも褒められる戦いではない。これは自分の自己満足からの行動だ。自分が引きつけければ、さきほどのカップルは無事なのだから。

自己満足だけど、それで誰かが笑ってられるなら『フォックスソード偽善使い』で十分。

たとえここでボコボコにされたとしても、上条は後悔しない。

「はっ、じゃあ処刑リンチと行きますか」

「楽しそうだな、おい」

突如、上条の目の前に上から落ちてきた。

言葉とともに着地したのは上条と同年くらいの少年だ。随分強い着地の音だったから、かなりの衝撃を足に受けたらしく、立ち上がるのに少しの間があった。

「……………祭りの場所は、ここか？」

「ああ？　なんだ、てめ…………え…………？」

さきほどまで強気だった不良の表情が、突然曇った。それは完全な恐れであり、畏怖の色だ。

そして、落下してきた少年は上条に振りかえると笑いかけた。

「よお、俺も混ぜてくれよ」

「ふ、藤井……………」

人懐っこい笑みを浮かべた藤井晃は、首をぐきっと鳴らしもう一度不良たちを見据える。

さきほどまでの威勢の良さはどこへ行ってしまったのか、完全に弱腰の彼らに藤井は後頭部をわしわしとかく。

「どうしたんだ、こいつら？」

「つーか、お前どっから来たんだよ？」

「んあ？　あっここから決まってるだろ」

上条の質問に一度振り向き、背後の壁を指差す。

つまり、上条の3倍はありそうな高さから飛び降りてきたのだといっ。

「よくここがわかったな」

「お前が中学生を助けるのをクラスの輩が見ていてな。慌てて追いかけてきた」

にっと笑って彼は告げる。

そう言い捨て、藤井は不良たちに向き直す。

が、上条も藤井と並び構える。

「……………小萌ちゃんに怒られるのは俺だけで十分だろ」

「お前だと逆に先生を泣かせそうだからな」

自然と笑みがこぼれるその口からこぼれる会話は、今が初めてではない。

前にも、その前にも不良に絡まれた時、同じような言葉を発した。

そして。

「んじゃ……………半分力貸せよ、相棒」

「ああ」

頷き合った二人は、前のように。

地面を強く蹴り、拳を振り上げた。

「亡霊、ねえ……」

目の前で吐きだされた単語に胡散臭げに呟くのは、20代の男性だ。後半というには親父の渋さというのは出ておらず、かといって成人成り立てのような新品さもない。実際の年齢は24歳なのだから、その中途半端な雰囲気は相応のもの。

白いワイシャツに上から青い布にネズミのイラストがプリントされたエプロンをかけ、右手に握られているコーヒーマーカーから黒い液体がカップへと注がれていく。

「そんな曖昧な存在が科学の総本山でありえるのか？」

「そりゃごもつともな意見ですけど、案外馬鹿に出来ないもんですよ？ 都市伝説ってのは……」

男性の目の前に座るのは、白いワイシャツに黒いズボン ありふれた学校の夏服 に身を包んだ少年だ。黒を基調にし右側の前髪だけが瞳を覆うほど長く、その部分だけが金色という妙な髪型の少年。

さきほどまで暴れまくっていた学生、藤井晃である。

差し出されたカップを会釈しながら受け取ると、一口飲んでテーブルに置き、

「現に『どんな能力を打ち消す右腕を持つ男』なんて、いるじゃないですか」

「煙のないところに火は立たない、だっけか？」

「だいたい、この場所だって説になってるんですから。由樹さんも航真さんも、全然宣伝とかしないんですし」

「……………まあ確かに奇特だし、伝説に数えられてもなんら不思議ではないだろうがな」

コーヒーマーカーを戻し流し場で皿洗いを開始する男性、景山由樹はちらりと奥で椅子に座り新聞を読みこんでいる枝葉航真あいはづを一瞥する。話しは聞こえているはずだが新聞に眼を落としたまま、まったく反応を見せない。

「で、上条は？」

「買い物があるからと別れましたよ」

「ふうん……………で、そんなにポロポロになったわけだと」

由樹が見る限り、藤井の顔には青い痣が出来たり腕には包帯が巻かれているなど、一見すれば喧嘩に負けましたという風に見える姿

だ。

実際、来店した時の第一声が「決して負けてません、勝ちましたよ！」である。もつとも、彼に喧嘩の仕方を仕込んだのは航真であり、彼は喧嘩で負けることを決して許さない。「俺から師事を受けておいて負けるだど？ いい度胸だ」と言つて2、3日みっちりと修業（？）に励むのだ。

「ま、まあ……………」

苦笑してコーヒーを一口飲んだ時、ふと航真の視線が入口の扉へ向いたときだった。

「ごめんくださいまし」

いつの間にか、入口に女子生徒が現れた。ピンクのツインテールに常盤台中学　なかなかのお嬢様学校　の制服を来ており、その右腕には緑の腕章が付けられている。

「風紀委員シマツジメンですの。そちらのお方、少しよろしいかしら？」

「……………なんだよ、面倒なことをした覚えはないぞ。つーか、どっから入ってきやがった？」

不躰な質問に質問で返す藤井のそれは、どう考えても挑発だ。

店の中にいる客は藤井以外は誰もいない。よって店員が視線を向ける対象はその少女しかない。

航真は心底面倒そうに顔をしかめ、再び新聞に目を落とす。由樹もとりあえず成り行きを見守るため、とりあえず何も言わずに食器洗いを続ける。

彼女はそつと笑むと、藤井の背後まで近付き彼の肩に手を置く。

「そんなもの、こうしたに決まっていますわ」

その直後、藤井の身体が地面に叩きつけられていた。

別段女子学生が何かしたというわけではない。ただ、肩に手を置いただけ。

それだけで藤井の身体は、一瞬ぶれたかと思うと次の瞬間には床に横になっていた。

「……………『テレポーター空間移動能力者』か」

視界の隅で見ていた航真がぼつりとつぶやく。『テレポート空間移動』、それは11次元の座標を演算することにより対象を移転させる”能力”だ。

能力。それは魔法のように空を飛ぶようなものではなく、スプーンを念力に曲げたり袋に入っているものを見とおしたりすることのこと。

いわゆる、超能力。

学園都市とはそれが一般化学として認知され、日夜研究開発され

ている場所なのだ。学生は決められた”時間割り”^{カリキュラム}によって脳開発をし、超能力を開花させていく。目の前の少女しかり”空間移動”^{テレポート}だったり、”発火能力”^{バイオキネシス}だったり、”電撃使い”^{エレクトロマスター}だったりと。

まったくもって摩訶不思議なこの世界は能力だけでなく、産業・工業といった科学技術も学園都市は外の世界の30年は先を行っているという。

その中の1人が、その少女ということである。

「こう見えても私、大能力者^{レベル4}でして……貴方を拘束しますの、あまり抵抗して欲しくありませんわ」

「嫌だね。理由がない」

「さきほどの一般市民からの通報によれば、スキルアウトと交戦したそうですわね？」

「交戦じゃない。喧嘩だ」

「あらあら、せっかく気遣って交戦と言ってあげたのに自ら喧嘩と認めますか」

風紀委員^{シヤッジメント}の少女は、まるで軽蔑するような表情で藤井を見下す。

風紀委員^{シヤッジメント}というのはその名の通り、学園都市の治安維持を司る学生から成り立つ自治組織だ。故に彼のような不良の相手は慣れているし、その扱いも知っている。

彼女の中で、藤井もそこらにいるのと変わらないただ喧嘩をして、

他人を困らせるのに何の罪悪感を覚えず、弱い者虐めを平然とする。

そんな男に見えるのだろうか。

「……………くっだらねえ」

倒れたまま鼻を鳴らし、藤井は腹筋で勢いを付けて立ち上がり踵を返す。

「別にどう呼ぼうが関係ねえよ。俺はあいつのために戦ったってだけだ。それなのに拘束される理由がわからんね」

「誰がのため、とか大それた言い訳をほざなくてもいいんですよ。どの道、貴方は風紀委員のブラックリストに載っているのですから連行確定ですわ」

「おい」

突然、航真が呟く。

「店内での揉め事は禁止だ。喧嘩やんなら外でやれ」

航真の口調は平然としているようだが、明らかにイラついている。もつとも、それは店員として当然の感情なのだが、おそらく彼のそれは風紀委員ジャッジメントの少女に向けられているのだろうか。

藤井がそこいらのスキルアウトのような身勝手な性格ではないことを、航真は誰よりも知っている。

不良の全員が身勝手な連中ではない。だが、風紀委員ジャッジメントでそれを認

める者は少ないはずだ。彼らは現場で直にそういった輩を相手にしているのだから。

少女に非があるわけではない。わかっているけど、航真には納得できないのだからだ。

「あらあら。では、お外に……………」

「ちいっす、スキルアウトご一行の到着ですよー」

まさしく空気をぶち壊す、というのはこのこと。

からんからん、と来客の鐘が鳴り5人のいかにもといった格好の連中が入ってきた。

「おう、いらっしやい」

「って、貴方達!?!」

「ん? げっ、この前のジャッジメント風紀委員!?!」

ジャッジメント風紀委員の少女は驚いたように彼らを見詰め、彼らも同じように驚く。

だが、さらにその後ろにも来店客が見えたので由樹は肩を竦めて言い放つ。

「ほらほら、とにかく入った入った」

「あ、はい」

スキルアウトの5人は素直に従い奥へ進み、普通に座って行く。

そんな彼らに少女は怪訝そうに眉をひそめる。

「随分と大人しいですね」

「いやあ、あの人に逆らってもなんの意味ねえからなあ」

「お邪魔しまー……………す？」

は？ と聞き返すより先に新しく入ってきた3人の来客に、少女の眼は丸くなっていた。

入ってきたのは少女と同じ常盤台中学の制服をまとった少女と、頭に華の髪飾りをつけた少女と黒髪ストレートの少女。後者の二人は同じセーラー服を着ていることから、同じ学校なのだろう。

「お、お姉さま！？ 初春に佐天さんまで……………」

「白井さん！？ どうしてここに？」

「おおーっ、白井さんも実はここの噂を聞きつけてきたんですか！？」

さきほどまでの仕事顔はどこへ行ったのかと、白井黒子は初春飾利と佐天涙子に詰め寄られ狼狽した表情になる。

入ってくる3人に目を丸くし、由樹は黒子へ眼をやった。

「知り合いか？」

「え、ええ……まあ………」

若干、黒子の表情がひきつっているように見えなくもないが、彼はそのまます人へと視線を向ける。

「とりあえずいらっしやい。好きな席に座りな」

「由樹さん。五目チャーハン3つにカルボナーラとナポリタンお願いしまーす！」

少女達に促し、由樹はがちゃがちゃと行動を起こす。カウンター越しでは何をしているかはわからないが、コンロに火がともる音やフライパンが擦れる音がする。

とりあえず言われた通りに少女達はカウンターの席に座り、黒子も指示に従う。いくら風紀委員といえど店先の店員に迷惑をかけていい権利などない。

「えっと、五目チャーハンにカルボナーラと………」

指を折りながら注文を確認すると、航真が立ち上がり新聞を折りたたみ、壁に掛けられた茶色のエプロンを付ける。

「お前はパスタ。五目チャーハンは俺に任せろ」

「あいよ」

短く返答した二人は厨房にならび、即座に腕を動かし始める。

「で、君たちはそちらの風紀委員ジャッジメントの知り合い？」

「え、あ。はい！ 第177支部の風紀委員ジャッジメント、初春飾利です！」

「なんで自己紹介しているのやら……あ、佐天涙子です」

そう述べる二人になるほど、と頷く。次に常盤台中学の少女へ目を向ける。

「私は風紀委員ジャッジメントの白井黒子、そしてこちらが……」

「御坂美琴って言います」

名乗りあげた少女達にそれぞれお冷を差し出すと、藤井が思い出したように御坂を見やる。

「御坂美琴……常盤台の超電磁砲レールガン、超能力者レベル5か」

その言葉にその場にいた全員が驚きの視線を御坂に向ける。

向けられた御坂は顔を真っ赤にし、照れたように俯いてしまう。

「君があのも有名な……」

手際のない動きで料理を進める由樹に感嘆の声を上げる初春と佐天。

ふと、黒子は隣に座った同じ常盤台の少女へ目を向ける。

「それで、お姉さま達はどうしてこんな喫茶店に？」

「お、お姉さま……………」

漫画のような呼び方を耳にし、椅子に着席したばかりの藤井が転げ落ちそうになるのを耐える。

彼女は真つ赤な顔で俯いていたはずだったが、カウンターに置かれていたゲコ太というマスコットキャラの置物に眼を輝かせていたが、はつとなつて黒子の質問に答える。

「えっ、ええ……………佐天さんがここがお勧めだって言うから……………」

「白井さん知らないんですか？ 都市伝説の1つ、不良歓迎の喫茶店！」

は、と白井は眼を丸くする。突然何を言い出すのか、と思うと藤井が嘔き出したように喋り出した。

「なるほど。確かに……………ここがそう呼ばれてもおかしくはないわな」

コーヒーを一飲みした彼は苦笑し、

「なんたって。喧嘩さえしなけりゃなんだってアリだからな、この喫茶店は。だから不良のたまり場にはもってこい、っーか……………」

ちらりと調理中の二人に眼をやる。

「不良や学生のためにこの喫茶を始めたっていうよ」

「ふ、不良のためって……………？」

「俺らが学生のころだ」

まるで語り部のような、歌うように航真が手を休めずに喋り出す。

「よく夜遊びをしてはバスの最終時刻を過ぎて廃工場を寢床にして、よく思った……………」

あの日を思い出すような、そんな表情で。

「無償で寢床を提供してくれる場所があったらな、と」

「えっ、まさかそれが理由!？」

航真の言葉に思わず佐天が突っ込み、それに構わず由樹が言葉を受け継ぐように嘯く。

「まあ、そんなわけでここは夜な夜なずっと遊べる施設を無料もしくは低価格で貸してくれる、っていう喫茶店が出来たのよな」

それがここ、『アンティック珈琲店 - カフェ -』なのだという。

ゆで上がったパスタの上にそれぞれカルボナーラとナポリタンを皿に盛り付けると、それを注文した学生の机を運んで行く。

「ほい」

「待ってました、景山さんのパスタ!」

「さあーて……………」

エプロンのポケットに手を突っ込むと、2つのサイコロを取り出す。赤と青の変哲のないサイコロを、彼は手の中で転がすと無造作にテーブル上に転がす。

すぐに回転は止まり、出てきた目は赤が5で青が6。

「はい、560円ね」

「げっ、ちょっと高くついたー」

そう唸る彼らだったが、文句を言うわけでもなく素直に財布を取り出し言われた金額を差し出す。

その光景を見た佐天は、思わず藤井を見やる。

「え、メニューがないと思ってたらもしかして……………」

「ああ。ここは基本的にフリーオーダー、注文したら麺類だろうがパンだろうがケーキだろうがビールだろうがカクテルだろうが出るんだよ」

最後のは聞き捨てなりませんの、という黒子の言葉を無視し藤井は続ける。

「んで、あの二つのサイコロでその品の値段を決めるわけよ。赤は3桁で青が2桁の数字を担当している。だから赤が5で青が6なら560円ってな具合にな」

「それでいい、経営成り立ってるの？」

御坂美琴の言葉はもっともかもしれないが、藤井は気にしたことはない。

しかし、と黒子は店の中を見回す。

スキルアウトの5人が座るテーブル以外にも3組ほどのテーブルにソファも備わっている。テラスにも客席が用意されており、カーテンレールには葉っぱをつなぎ合わせた装飾が施され、壁などにも絵画などが飾られている。入り口の左右にも大きめの観葉植物が設置されており、外には色鮮やかな花が咲いていた。

外観からこんなに洒落た店が不良の溜まり場、という印象を持つことはできない。

「それで、白井さんはどうしてここに？」

「はっ。そうでしたわ！ この男の喧嘩を取り締まるためにここまで来たのですわっ！」

びしい、と黒子に指をつきつけられた藤井は、嘆息とともにコーヒーを置き、

「わあーったわあーった。事務所なりなんなりついて行ったやつから」

一言区切った彼は、そっと彼女を見据える。

不敵に笑みを浮かべる少年に、ジヤッツメント風紀委員の少女は自然と息を詰まらせた。

彼から放たれている威圧は、そこらへんにいる不良からは決して放たれることのないもの。それこそ悪意のあるものではなく、自分に絶対の自信を持つ「強者」を想わせるものだ。

「や、やる気ですの!?!」

「お前の相手なら後でしてやるよ。今は……………」

ばん、と言葉と同時に入口のドアが開かれた。

入ってきたのはスキルアウトだ。皆そのような格好をしているが、瞳がぎらついていた。

そして放っている雰囲気は、いつも相手をしている)……………
……………(輩と同じだ。

「あいつらの相手が先だ」

「……………傷つけるなよ」

これから何かが始まるのか予想がついた航真は、五目チャーハンを皿に盛り付けながら笑みを浮かべる藤井に一瞥せずに言う。

「ま、待ちなさい! ジヤッツメント風紀委員の前で……………」

「待った」

右腕につけた腕章を強調するように立ち上がる黒子の肩を、由樹が掴む。

「何をしますの！？ 止めないと……………」

「これは藤井の喧嘩だから、手を出したらダメ」

「てめえ、藤井い……………よくもまあ俺らのダチをやってくれたなあ」

なにを、と黒子が問い掛けるより早く、入ってきた不良の一人が口を開く。その背後には同じスキルアウトの連中がわらわらと、ざっと見30人以上いるように思える。

その光景に黒子だけでなく初春も、しいては御坂も絶句してしまう。あれだけの数の不良を見たことがない。一クラス全員が不良で、その全員が他学校に攻め入っている、そういった漫画のような光景が目の前にあるのだ。

御坂が本気を出せば、『超電磁砲』^{レールガン}を放てば重傷人多数で一掃することが出来る。だが、そうすればここら一帯は焦土と化してしまうだろう。

だが、藤井は笑みをうかべたまま、さも楽しそうにガンを飛ばす。

「ああ、悪い悪い。ロリコンがペドに変わる前に止めなきゃなあって思っただよ」

「誰がロリコンだてめえ……………」

「十分ロリコンだろうが。中学生カップルをカツアゲしやがって」

絆創膏を無理やり剥がし、藤井は告げる。

「外へ出るや。全員まとめて……………」

「ごちゃごちゃうつせんだよ！」

先頭に立っていた不良が服に隠していたナイフを突き刺す。

藤井はそれを何のためらいもなく、右手で受け止める。手首を掴んで止めるのではなく、まっすぐに刃を右手に貫かせ受け止める。

「痛っ！」

思わず佐天が唸り、初春や御坂も言葉を失う。

だが、藤井は痛みに顔を歪めることもなく左腕を振り上げ、

「他人を傷つける勇気がないのに、武器んなもん持ってんじゃねーよ！」

絶句している不良の顔面を殴りつけた。

殴られた不良はそのまま入口にたむろしていた不良たちを巻き込むようにして、吹き飛んでいく。

右手からナイフを抜き取り、ぶしゅりと音をたてて血が垂れて行くのを無視して、藤井はそのまま外へ出る。

その後ろ姿に亜然としていたが、はっとなった佐天が由樹の袖を掴んだ。

「きゅ、救急車！　というか、なんで放置なんですか!？」

「大丈夫大丈夫。あいつはあの程度の連中かーく一捻りさ」

呑気にそう言う由樹だが、その傍で初春が警備員アンチスキルに携帯電話で連絡しているようだった。

そこで黒子は気付く。御坂が俯き、そして意を決したように一歩を踏み出そうとして、

「だから、大丈夫だって」

「けど、あいつら……全員武器持つてるじゃない!」

窓から見える限り、藤井を囲んでいるスキルアウト達は全員が鉄バットやらナイフやらと物騒なものを持っている。

とてもじゃないがただの学生が一人で相手出来る人数ではない。

だが、そこに御坂が加わればまだましなはずだ。少なくとも警備員アンチスキルが到着するまでの時間は稼げる。

だが、由樹は御坂の腕を掴んだまま放さない。

「放して！　あのままあいつを見殺しにする気!？　一人では……」

「一人じゃないってなあ」

いつの間にか、料理を食べ終わった5人のスキルアウト達が立ち上がり、臨戦状態で笑みを浮かべて背後に立っていた。

「俺達がいるし」

「そ、それでも！」

「怖いだろ」

にっと、スキルアウトとは思えないような人懐こそうな笑顔で言われ、御坂は黙ってしまふ。

凶星だった。御坂はあの大群と無能力者レベル0を目の前にし、怖いという感情を抱いてしまった。

こんなのは、ツンツン頭あのパカの少年だけだと思っていたのに。

「だから俺らが相手をする。どんなにボロボロになっただってな」

そこにいるのはいつもナンパをしてくる不良ではない。

その瞳にあるのは、一無能力者（レベル0）のレットルからなる嫉妬ではない。

「俺達の居場所らくえんは、俺達で守んだ！」

吠えた不良たちは入口から飛び出すと、奇声を上げながら殴りかかって行く。

その増援に藤井は笑みを浮かべ、何倍もある敵に拳を振り上げる。

どれだけの相手がいても、たった6人でも負ける気はしない。

なぜなら、その6人は不良らしくない不良の絆で結ばれているのだから。

結論から述べれば、藤井達の勝利で終わった。

あの時の光景を表すのだとしたら、大乱闘とでも言うべきか。いくら能力開発が行われている学園都市だったとしても、人間が殴られて孤を描くように吹き飛ばすなど。

よく”外”から転入してきたりする学生が能力者を万国人間ビツクリシヨ―と称したりするが、あれはまさしくそれだ。

信じられないものを見てしまった御坂達は亜然としながら、アンチスキル警備員に運ばれて行くスキルアウト達を眺めて行く。

護送車が8台も来るといふ異例な事態に、そこまで発展するまで止めなかったジャッジメント風紀委員の二人はアンチスキル警備員に深く頭を下げていた。

「すみません……ジャッジメント風紀委員がいながら……」

「面目ないですの」

「いやいや。これだけの大人数相手じゃ仕方ねえよ、お前らも学生だからな」

煙草をくわえながらアンチスキル警備員の小隊長：笠部は苦笑をうかべる。

アンチスキル警備員は比較的若い教師で構成されているが、彼はかなり年を食っている。とは言っても30代後半といったところで、体格もがっちりとしている。

どういうわけかかれだけは普通のスーツ姿で登場し、素手で抵抗してくる不良を片手で気絶させるほどの手腕の持ち主だ。

「まっ、ここはスキルアウトのたまり場だな。よく……ここ、で……くっそ、使えねーなこのライター……」

ライターを取り出して煙草に火をつけようにも火はつかず、悪戦苦闘した結果ぼつと後ろへ放り投げる。

「んで、よく俺らがここに出張るわけよ。だからそんなに責任感に追わなくていいぜ、支部おかみには黙っておくからよ」

「は、はあ……………」

「隊長、スキルアウトの収容終わりました」

豪快に笑う笠部に向かって部下である若手の警備員アンチスキルの声に、おうと頷いて二人の風紀委員ジャッジメントを見やる。

「じゃ、頑張れよ」

「は、はい」

適当に手を振って帰って行くその背中を見届け、護送車は去って行く。

喫茶店の前はそこまで広いわけではないが、そこで大乱闘が繰り広げられていたのは確かだ。

誰かが倒れ血を吐いたはずの地面は綺麗に清掃されており、何もなかったようにシーンとしている。

だが、4人の少女が振り向いて店内に目を向けると、

「っ、疲れた……………」

「さすがに、バテるわな」

息絶え絶えになっている藤井と6人。

それらを見れば、確かにここで喧嘩があったという証拠になる。

店内に戻った4人はどう反応したらいいかわからず、とりあえずさきほどの席に座った。

「貴重な体験をしたね」

「……………なんで止めなかつたんですか？」

座っていきなしおちゃらけたことを言われ、つい佐天は喧嘩口調で尋ねてしまった。

初めて見る友人の一面に3人は驚いた顔をし、対して由樹は眼を瞬かせにと笑う。

「自分でしでかしたんだから、後始末だつて自分でしないとね」

「そうじゃなくて！ 怪我人だつて出たかもしれないのに……………」

「あー、佐天さん……………だっけか。いいんだだよ、別に」

ぐったりとテーブルに身体を寄せながら、藤井が右手をぶらぶらと左右に振るう。

「あいつらは俺を狙ってきたんだ。なのに由樹さん達大人に出しゃばらせるわけにはいかない……………要するに、俺の意地が許さないつてこと」

「そうそう。俺達の勝手なのさー」

ぐてーという効果音がつきそうな光景なのに、カッコいい台詞を放つスキルアウト。

昨日までならこういった相手に佐天は内心ビクビクしながらすれ違い、黒子や初春は捕獲し、御坂においては電撃を浴びせていた。

だが、目の前にいる彼らはどうだろうか。今日会ったばかりだといつのに、彼らは無能力者（レベル0）というレッテルなど気にした様子もなく、素手だけで相手を倒した。

拳だけで、この場所を、友達を守るために立ち向かったのだ。まるで漫画で見たヤンキー達のように。

「……………楽しそうね」

「人生、楽しまなきゃ損でしょ」

ぼそりと呟いた御坂の言葉に、由樹が言う。

笑顔とサムズアップで。

綺麗事を笑顔で、しかも本気で言っている。

「お婆ちゃんが言っていた……たとえ邪道であったとしても貫き通せばそれは正道となる、ってな」

航真の言葉に皆がそうそう、と頷いて見せる。

綺麗事だけれども、それを幻想としないで現実とする。ここは、そんな人々が集う場所なのかもしれない。

誰かのために必死になれる、友達のために身体を張れる、まるで幻想まんがのような光景がそこにはあった。

「よし、頑張ったお前らに晩飯奢ってやる」

「まじで！？ やった、飯代浮いた！」

「君らもね」

わあっ、と喜ぶ彼らに由樹は笑みを浮かべ、佐天達に目を向ける。

「ようこそ、『アンティーク珈琲店 - カフェ - へ！』」

二人の不思議な店員がいて、不良たちの居場所。

それが第7学区にある不思議な喫茶店。

『アンティーク珈琲店 - カフェ - 』であった。

2話・狙われた常盤台って言うけど、ぶっちゃけ問題ないだろ？

『アンティック珈琲店 - カフェ -』というのは第7学区に存在する不良ウエルカムな喫茶店のことだ。

学生たちが授業中である午前はたいてい店を閉めており、店員達は寝ている。昼ごろに起きてその日の準備をしつつ材料の発注や買い物を済ませ、夕方頃に学生たちが賑わうのでだいたい開店。

今の時期はだいたいテスト期間前なので部活がない関係で普段より早く店を開くはずのだが、本日は一日休みの日である。

そのわけとしては、この日には発注していた食材などの大量の物資が店に届く日であり、店を開けるのは寢床を求めて止まりにくるばかども不良だけだ。

「……………」

だが、まだ夕方の時間帯では店を開けるわけにもいかず、食材の搬入を終えた航真がすることはカウンターなどの清掃であり、それが終わってしまえば椅子に座って雑誌や新聞を読むことだけである。

普段から愛用しているファッション雑誌に目を通していると、ふ

と店の入り口に人影を見かける。

入口には閉店の看板がつるされているので、一般常識がある者ならば入口を開けはしないだろう。開けてくるのは常識を知らない者が、藤井のような常連客か、もしくは。

カランカランと、ドアにつけられたベルが鳴り響き航真は雑誌から目をそらさずに言い放つ。

「悪いが今日は休業だ。表の看板見てないのか？」

「せっかく暇が出来たのに。それなら帰ろうかしら」

入ってきた来客は少女であった。夏だというのに冬服のブレザーを肩からかけており（由樹はこれを中二風装備と言っていた）、長い赤髪を2つに結わいでおりどういわけか胸元はサラシで隠し極短スカートという露出度の高い格好である。

彼女の姿を認めると、航真は雑誌を閉じると意外そうな顔で告げる。

「珍しいな……残念だが由樹は出頭中だ」

「べ、別にあいつに会いに来たわけじゃないわ。勘違いしないことね」

結標淡希はふんと鼻を鳴らし、カウンターの一番奥に座る。前からそこが彼女の所定位置だ。別に誰かがそう定めたわけではないが、

いつの間にかそういう風になっていた。

彼女が座ると同時に差し出されたのはアイステイーであり、ガムシロップを2つにミルクを1つ傍に置く。

「ガムシロはいいわ。最近、アイスを食べ過ぎて太らないか気にしてるのよ」

「乙女だな。そんな格好のクセして……襲われたりしないのか？」

「大きなお世話よ」

一言で斬り捨てて淡希はアイステイーにミルクを入れてストロ―でかき混ぜると、口を付ける。

航真はドアを開けて外を見回し、これ以上人が入ってこないように一応鍵を閉める。

「で、あいつはどこに行ってるわけ？」

「ああ、スイーツの新たなアイディアを求めに……」

学び舎の園にな。

そのワードに淡希を目を細め、店主を見やる。

学び舎の園。第7学区にある洋風の小さな街で隣接する5つのお嬢様学校がそれぞれの敷地を共用し合う形になっており、基本的に女性しかいない。学生寮などがある居住区、商店街、研究・実験施設などが存在する場所だ。

お嬢様ということとは当然男子禁制なわけで、街の境界線は大きな柵が設けられ、常時2000台を越える監視カメラが配備されているなど強固なセキュリティで守られている。さらに商品や能力開発機材も独自生産されるといって自己完結した都市の一面であり、そのためか世間知らずの箱入りお嬢様を生み出すともされる。

「あんなところにどうやって入れるわけ？」

物資の搬入のための業者でさえ女性でなければならぬ場所に、男性である由樹が入れるはずもない。

淡希の疑問は当然である。

「何……まあ、ちょっとしたコネというやつだ。安心しろ、あいつは見境なく女を襲うキャラじゃないのはお前が一番知ってるだろ？」

だが、航真は椅子に座り雑誌を再び読み始めながら、ちゃんと答える。

彼の質問に淡希は答ええないが、その様子を見る限り肯定しているようにしか見えない。

航真は苦笑して雑誌を読むことに集中する。

今日の『アンティック珈琲店 - カフェ -』は、比較的平和であった。

その頃、由樹はというと慎重に苺を切っているところであった。

果物は何度も切ったことはあるので難なくこなせるが、彼が苦手とするのは彩るための配置だ。インテリア雑貨が好きなため色彩検定やインテリアコーディネーターなどの資格は持っているも、実際のパティエには敵わない。

味は美味くても見た目が悪ければ食べる気はなくなるというもので、学生たちは気にせず食べてくれるが三流とはいえ一料理人としてそこもより良い料理を作りたいものだ。

『アンティック珈琲店 - カフェ -』のスイーツなどは全て由樹が担当しているため、こういったファンシーのような女の子向けによる売り上げは彼にかかっていると断言しても過言ではない（ほとんど

ど無償のような金額なのだが」。

そういうわけで、由樹は昔の知り合いが学び舎の園にて店を開いているので、こうして修業に来ているというわけである。

「あーダメダメ、切り口が雑になってる。もっとそつと……慎重に切らないと」

「難しいな……」

「慎重に。メスを入れるみたいにすればいよ」

「手術なんかしたことねえよ!？」

くわりと顔を上げた由樹は、テーブルの向かいで腕を組む作業服姿の女性に食ってかかった。

彼女こそが昔の知り合い（というか後輩）である毒島美祢である。学園都市の料理専門学校に通っていた彼女は、ほとんど海外の高級レストランなどが展開しているこの学び舎にて『高級ではなく誰もが楽しめる喫茶店』を目的とした店を営んでいる。高級食材は一切使っておらず、そのため価格もおそらくこの場所が一番安い。

それでも彼女の店に客足が途絶えないのは、その腕前と人懐っこい彼女の接客態度が気に入られているからであろう。

由樹も数年前にここへ足を運んだ時は、驚いたものだ。

「あの人見知りで有名だった毒島がここまでいい笑顔になれるとはなあ」

「昔のことは放っておいてよ。それに、私が笑顔になれるようにしてくれたのも貴方のおかげですよ？」

ずさんな口調であるが、その眼差しには尊敬の色がある。

昔はおどおどとしていて、何をするのに失敗を繰り返していたというのに。

人は変わるものだ、と由樹は仄かに笑う。たとえ今すぐには無理だとしても、いつかはきつと。

「なーに笑ってるんですか、キモいですよ？」

「先輩になんちゅーことを……………ん？」

自然と口元が緩んでいた由樹が苦笑をした時、どたどたと慌てた足音が響く。

この場所は普通の厨房と違い、新人のためだけの部屋だ。新しく入ってきたパティエを鍛えるためだけにこれだけの器材を揃えるというのはさすがは学び舎の園といった具合だが、店の見取り図的に一番奥に位置するのだ。

誰かがここへ来るということはクレームによる対応が出来ないから、何か問題が起こったからかであるが。

「店長！ 大変です、お客様が突然倒れて……………！」

「なんですって！？ すぐに病院に……………って、先輩！？」

素早く指示を飛ばそうとした瞬間、由樹が部屋を飛び出した。毒島も続くように飛びだし、トイレのところで人だかりに突っ込む。

ざわざわ、と騒ぐ声が大きくなったのは客が倒れたのともあるが、男子禁制であるはずの学び舎の園に男である由樹がいることも一因しているのだろう。

だが、そんなことはお構いなしに由樹は輪に入り、

「佐天!？」

「か、景山さん!？」

倒れている佐天を解放する御坂と出くわした由樹は、驚きつつも常盤台中学の制服を着た佐天を抱き上げる。

「何があつた？」

「わからない……お手洗いに行つて長い間帰つてこなかったから、心配になつて……」

心配そうに呟く御坂に、由樹はすつと佐天の口元に指をあてる。静かに呼吸をしていることを確かめると、ざつと見て外傷がないことを確かめる。

「気絶してるみたいだな。」

ジマージメント
風紀委員に連絡を……」

瞬間、由樹ははつと窓から店の外を見やる。

何も無い、野次馬ばかりで誰もこちらを見てはいない。

だが、確かに視線を感じ取った由樹は怪訝そうに目を細め、ほんの少しの間だけ外を睨み続けた。

ただわかっているのは、どうやら事件に子供たちが巻き込まれている、ということだけであった。

で、どういうわけか由樹がいるのは名門常盤台中学校の正門前である。

いかに業者用のパスがあったとしても校内に男子が入ることは教師達からも拒絶され、ちょうどよく駆けつけた黒子と初春に佐天を任せ一人こうしてここにいるということだ。

毒島には常連客の子が襲われたので、また後日に来る機会を貰いこうして正門でとりあえず4人が出てくるのを待っている。

そして、彼は携帯電話を取り出し、とある知人と連絡を取り出した。

「監視カメラに映っているのに人の目に映らない人間？」

『そうじゃんよ。今、学び舎の園で常盤台の学生が襲われる事件が多発してるんだが、皆同じケース……今回のケースもそうじゃん』

電話の相手は警備員アンチスキルの黄泉川愛穂である。旧知の仲である彼女に

今回の事件について聞きだそうとし、出てきた言葉が『映像には映っているのに、視界には入らない』ということだった。

常盤台中学校の看板に背を預け、由樹は顎に手を添える。さきほどから前を通る女子学生達那不審そうな眼を向けるが、それすらも無視だ。

「うーん……奇妙だな、それは。盲点と利用したってのは？」

『被害者は周囲を見回したそうじゃんよ。だけど誰もいなかったとさ』

「……………あ」

つい間抜けな声を漏らしたのは、わけがある。心当たりが見つかったのだ、その条件に見合う能力。

「なあ、『ダメーチエック視覚障害』っていう線はどうだ？」

何、という言葉と同時に黄泉川が電話越しに目の前のパソコンのカーソルを叩く音が聞こえる。

『なるほど、『ダメーチエック視覚障害』……対象物の見ているという意識を阻害することで見えているという意識を見えていないという意識にすり替える能力か。なるほど、これこそ盲点だったじゃん』

「わかったらならさっさと仕事しよよな」

『いや、すでに動いてるみたいじゃん』

は、と由樹が呟くと同時にがちゃりと門が開いた。

そちらへ目を向けると大きめの帽子をかぶった佐天と御坂達が出てきて、

「由樹さん、さっさと犯人を捕まえに行きましょう！」

『と、いうわけじゃん。頼んだじゃんよ』

「おい、仕事しろよ」

低く呻いて携帯を閉じると、由樹は肩を竦める。

「気分は大丈夫なのか？」

「はい！ 佐天涙子、完全復活しました！ というか犯人見つけ次第ギッタギタです！」

憤る彼女の瞳には本気と書いてマジという炎が籠っているように見える。

やる気に満ち溢れる佐天に由樹は目を瞬き、その後ろの二人に尋ねた。

「どっついうことっ？」

「えっと、あはは……………」

苦笑を浮かべる御坂と黒子と燃える佐天。

ともあれ、『レールガン超電磁砲』と『テレポート空間移動』、そして燃える少女。女子中学生3人の中に20代半ばのおっさんが入っているという奇妙なパーティーが結成された。

女性用ファッション雑誌に眼を落していた淡希は、ふと顔を上げ首をかしげる。

カウンターの奥で同じように雑誌を読みあさっていた航真がいつの間にかいない。窓から夕陽が差し込んでいるとくを見ると、随分と長い時間この店にいたようだ。

別段として予定があるわけではないのだが、いつ招集がかかるかわからない故にいつでも出れる準備をしておかなければならない。

だが、店員がいない店を開けておくわけにはいかないだろう。

どうしたものか、と唸っているとスタッフルームへの扉が開かれ、そこから航真が出てくる。

「悪いな。・仕事・が入った」

「そう、ならちようどいいわね。そろそろ行くわ」

それだけ言い放ち、雑誌を元に戻して淡希はそのまま出口へ向かって行く。

ドアノブに手を掛けたところで、航真は天を指差しながら口を開いた。

「お婆ちゃんが言っていた。人は誰かに頼らなければ絶対に生きていけないってな

「……………何が言いたいわけ？」

「悩みがあるなら早いうちに由樹に相談しておけ」

基本的に枝葉航真という男は他人に声をかけたりしない。そいつの問題は外野である他者がとやかく言ったとしても解決できるのは本人だけであり、外野が首を突っ込んだとしても出来ることは同情か憐れむことか。

助言を与えたとして、それは本当にその人のためになるのか。少なくとも航真は相談をされても力になれそうなことは言えない。

だが、相棒は違う。彼は悩んでいる人がいれば迷わず手を差し伸べ、独りよがりかもしれないが平然と人助けをする。上条や藤井もその類の人間であり、3人とも航真には出来ないことをやっている。

だから航真が淡希に言えることは、ただその一言だけ。彼女が何かに悩んでいることは明白に感じ取れるが、それを救ってやれるほどの言葉は持っていないのだ。

そんな航真の気持ちをくみ取ったのか彼女は一瞬だけ動きを停めたが、そのまま振り向かずに出て行ってしまった。

カランカランとベルが空しく響き、航真は溜息をつく。

「さて、こちらも片づけるとするか」

一人で嘯いた彼の瞳には、まるで切れそうな鋭さ 刃のような光が灯っていた。

『検索を始めましょう』

携帯電話越しに聞こえる初春の声は、普段のようなおっとりとした甘い声ではなく、芯の通ったしっかりとしたものであった。

『キーワードは『視覚』、『盲点』、『能力』』

まるで独り言のように呟く彼女だが、それらは由樹がもたらしたものだ。

「で、出たか？」

『ビンゴです。』ダミーチェック『視覚障害』、重福美穂……白井さんの携帯にデーターを送ります』

聞き返すと同時に、黒子の携帯が鳴り響く。

彼女の携帯電話は学園都市製の特殊なタイプであり、ほぼ棒状の端末に近い。部品を引っ張ると電子で出来た空間モニターが出現し、それが画面となるのだ。

それを覗きこみ、3人の少女はおお、という顔になる。

学び舎の園の通りには女子生徒達が溢れかえっており、いかに『レールガン超電磁砲』と共にいるとはいえ（むしろそのせいか）かなり由樹は注目を集めていた。が、当人は特に気にした様子はなく隣を歩く佐天に、この場所にいた経緯を聞いて驚いた顔をする。

「なるほど……学び舎の園にねえ」

曰く、初春が黒子達に学び舎の園を案内してほしいと頼み込み、あの喫茶店に入ったはいいが事件に遭遇してしまったそうだ。その時、黒子と初春は風紀委員ジャッジメントの仕事で支部に向向いていたということだ。内容は佐天と同じ『ダミーチェック視覚障害』の事件について。

しかし、と唸るように黒子は由樹を見上げる。

「どうして『ダミーチェック視覚阻害』だど？」

「知り合いに同じ能力者がいるんだ。今回の件に該当する能力はそれくらいだと思ってな……んで、星は？」

黒子はさっそく転送されてきた情報を見せ、由樹はその写真の少女に注目する。お団子のように髪をまとめた彼女は前髪がかなり長く、左目がほとんど隠れてしまっていた。着ている制服は記憶にはないが、学び舎の園の学生でないことだけはわかる。

ちなみに、佐天が常盤台の制服を着ていたのは来る途中で水たまりに転び堕ちたからだそうだ。

由樹は周囲を見回してから腰に手を当てると、少女達を見回す。

彼の言葉に3人は頷く。それぞれ耳にはジャッジメント風紀委員が使っている無線機が装着されており、リアルタイムでの会話が可能となる優れ物である。

黒子が立てた作戦というほどのものではない段取りは、「映像を通して犯人を見つける」ということだ。人間の視覚が頼りにならないのならば、機械に頼るということだ。

ただ問題なのは、監視衛星からの映像を見る役割である初春と直接会話できる端末が由樹の分まで用意していないのだ。これでは彼だけが犯人を捕らえることが難しくなってしまう。

仕方ないので御坂が佐天と一緒に行動するよう進言した黒子だが、由樹はからからと笑って首を横に振った。

「大丈夫、大丈夫。視覚を妨害するような能力者の相手は慣れてるからさ」

は、と聞き返すよりも早く由樹はにやりと笑うと街道の一角を顎で示す。

「ほら、あそこにいるし」

「えっ？」

3人がその方向を見たとしても、そこにあるのは女子学生達に楽しそうに歩く光景しかない。

不思議そうに首をかしげていると、無線機から入った初春の言葉に3人は驚くことになる。

『白井さん！ 目の前の十字路の角、犯人がいます！』

嘘、と黒子達が声を上げるよりも早く由樹が動いた。彼はただその方向へ走り出しただけなのだが、その速度は陸上部に入っているであろう学生よりも明らかに早いものだった。

映像越しでは重福が驚いた表情で駆けだすのが見えただろう。だが、その人離れたした行動に初春すらも亜然となってしまうている。

まるで風のように重福の眼前に回り込んだ男は、にっと笑う。

「さて、鬼ごっこを始まりだ」

その言葉と同時に重福は能力を発動したまま駆けだす。その姿は完全に見えることはなく、間違いなく大能力者《レベル4》の段階である。

確かに視覚では追い切れない。だが、残念ながらその音はかき消すことはできず、走り去る方向がわかるのだ。

ぺろりと舌を舐める由樹と女子中学生の3人による文字通り鬼ごっこが始まった。

はずだった。

「しまった。見失った……………」

「さっそくやらかした!? というか慣れてるって豪語したのはどこの誰よ!？」

くわりと御坂の突っ込みにからからと笑う由樹。その背後では黒子が端末で初春と連絡を取っており、佐天は近場のベンチで息を切らして座っている。

あの後人ごみやら路地裏などを走り回られ、音だけで追いかけるのにも限界があった。さらに言えば男である由樹が走り回るためにちよつとした騒ぎになり、何度か教師らしき女性に呼びとめられては許可証を見せなければならぬという事態に陥ってしまったため、結局は逃してしまったのだ。

おかしなーと首をかしげる由樹は、やがて改めて納得したように頷いた。

「うーん……………やっぱ足音だけで追いかけるなんてことが出来るのは漫画の世界だけか」

「見よう見マネでやったんかい!？」

御坂達がぎゃあぎゃあと言いつついる間に佐天はベンチから立ち上がり、近くにあった黒塗りの自販機へ向かう。

部活をしていない普通の少女にとって、1時間もの全力疾走に近いマラソンはさすがに答えるものがあり、もうすでに喉がからからであった。

小銭を取り出して銭口へ入れようとしたところで、

「……………あれ？」

少し離れたベンチに見覚えのある顔の少女が座っているのが視界に入った。

自分たちが追いかけている犯人、重福美穂その人である。何より

鏡越しとはいえ佐天自身が直接見たのだから、まず間違っはすがない。

「いたーっ！」

佐天の声にびくつと肩を震わせた重福だが、随分走り回って疲れているのか逃げようと動くも彼女に捉えられてしまった。

ほら、俺の計画通りという由樹にははいと投げやりに返事をする御坂や黒子もそろそろとやって来て、重福は観念したように肩から力を抜く。

「はい。容疑者を確保したので、アンチスキル警備員に連絡を……………」

「んで、どうしてこんなことをしたのかなあ？」

黒子が初春に連絡している横で、とても良い笑顔で骨を鳴らすような仕草をする佐天がいる。実際には音が出ているわけではないのだが、漫画に出てくるヤクザのマネなのかポケットに手を突っ込んで眼をつける。

だが、まねごとだとしてもそういったことに日常的に慣れていない重福はびくりと肩を震わせ、まるで事件の犯人とは思えないような感じの少女であった。

「……………本当にこの子？」

「間違いありません！ 私、直接この子にやられたんですから！」

尋ねてきた由樹に意気揚々と宣言する佐天は、重福に指をつきつ

きながら帽子を取りあげた。

「さあて。この眉毛の恨み……どうしてくれようか!？」

「……………太眉毛？」

一人納得したように由樹が頷くその視線の先には、どういっわけかマジックペンで眉毛を太く書かれている佐天の顔があった。帽子はその太眉毛を隠すためのものだったのだろう。

しかし、と佐天と重福を交互に見やる。この眉毛がどう関係しているのか、彼には理解できない。

「おい、常盤台中学生はみんなこんな感じにされていたというのか?」

「そうです。まったく……………非道にもほどがありますわ」

連絡をし終えた黒子が腕を組み立腹するが、由樹としては首をかしげるものがある。佐天も憤慨しているのを見ると女の子としての見解というのがあるのか、ととりあえず納得する、が。

この怯えている少女を見て、どうしてもそんな非道な行為（黒子感覚）をしているような人物には見えない。さきほど見せてもらった資料の写真の人物その人なのだけでも。

「なんで常盤台の学生を？」

「……………あれは春、私には恋人がいたの……………」

突然、重福が語りだしたので、誰も止めずに傍聴側に入る。

曰く、彼氏と楽しい日々を送っていたのだが、突然彼氏が浮気して常盤台の女と付き合い始めた。どうして別れたのか、そんなに常盤台の女がいいのか、そう問い詰めた彼女に放たれた言葉は、少女のガラスの心を傷つけた。

『だって、お前の眉毛……………へん……………』

「だから、私は常盤台を憎むの！私から全てを奪った常盤台が憎い！そして決めた。全ての眉毛を面白おかしくしてやるうと！」

「……………途中からわけがわからなくなってきたんだけど」

自身の前髪を書きあげ、わざわざ力説する重福に女子3人は飽きれ顔で呆ける。いくら女の子でも一度も恋人というのが出来たことのない彼女達では、重福の気持ちを理解できない。

だが、一人だけ納得したように頷き、彼は笑みを浮かべて腕を組む。

「なるほど、だいたいわかった」

「はいはい、適当なこと言わない」

もはや信憑性は期待することをやめたのか、御坂があしらう。

それでも由樹はしゃがみ込むと、重福に目線を合わせる。

「まっ……結論から言ってしまうえば、お前さんのやってることはただの八つ当たり。あんまし良くないぞ、そっぴいの」

「……何よ。どうせアンタだってこの眉毛を見て笑うんでしょ！
笑いなさいよ、ほら！」

眉毛を突き出してくる重福に、まるで吟味するように由樹はその眉毛と顔を見つめる。

自分で突き出しておいてなんだが、恥ずかしくなってきた彼女は顔を赤らめ、身を引こうとする。

由樹はうんと頷くと、笑みを浮かべた。

「俺は悪くないと思う。そんなのいわゆる……チャームポイントって奴か？ 悪くないじゃん、振った奴にはお前さんの魅力を理解しなかったってだけ……気にする必要ないと思うぞ？」

にっこ笑い、彼はサムズアップをし告げる。

「だから、八つ当たりはもうやめにしな。可愛いんだから、もっと自分に持ちなつて……あり？」

ふと言葉を止め、由樹はまじまじと重福を見つめる。

完全に頬を紅潮させ、彼女はじっと由樹を見詰めている。その瞳はどこかとろんとしており、まるで寝惚けているような感じだ。

もしかやと思つたところで、黒子の声がかかる。

「罪な方ですわね」

「嘘おーん」

声を上げる由樹に佐天はくすくすと笑い、予想以上にしっかりとした発言に御坂は驚いているようだ。

とりあえず、と由樹は立ち上がると黒子を見やる。

「アンチスキル警備員に通報は？」

「完了しましたの。まあ事情聴取を受けたらすぐに釈放されますわよ」

そうかい、ともう一度重福を見やり、そつと頭に手を置いた。

「良かったな。もう八つ当たりなんてやめるよ？」

「は、はいっ」

完全に恋する乙女状態になっている重福の元気な返事に頷き、とりあえずこの場所から離れようとした時。

突然、目を見開いた由樹は重福の腕を掴み引き寄せると、その場から飛びのいた。

直後、重福が座っていたベンチが粉々に砕かれ、その後ろの木々も吹き飛んだ。

何が起こったのか理解しきれない御坂と佐天の前で、黒子ははっとなって左の方を見詰める。

その視界に入ってくるのは、1つの黒い影。

「な、何が……っ！」

「お姉さま、佐天さん！ この場から離れますわ！」

黒子が二人の服を握り、『空間移動』^{テレポート}で姿を消すのを見て、由樹は重福を抱きよせながら黒い影を見詰める。

黒子の判断は正しい。あの一瞬で放たれている殺気を感じたのはわからないが、少なくとも威圧からただ者ではないと判断したのだろう。この場において勝てる相手ではないということが。

いかに『超電磁砲』^{レールガン}であったとしても、おそらくアレには勝てない。

アレはそういうものだ。

「……………カースト」

ぼそりと呟いたその言葉は、抱きしめられて顔を赤くしてしまっ

ている重福には聞こえていないようであった。というよりも頭がパンクしているのか、聞き取れていないようだ。

黒い影はゆらりと立ち上がり、ゆっくりと身体を起こす。

その姿は漫画に出てきそうな漆黒の布のようなものをまとい、かろうじて人と断定できるのは足があり、腕があり、顔があるからだ。顔面も漆黒の布で包まれており顔まではわからないが、その青い瞳が由樹と重福を捉える。

その殺気に当てられ、呆けていた重福すらも恐怖にあてられ声が出なくなるが、由樹は臆することもなく彼女を守るように前へ出た。

「重福。とりあえずここは俺が足止めするから、走って逃げろ」

「……………え、そんなっ……………貴方は!？」

驚く彼女に由樹はにっと笑い言い放つ。

「大丈夫、これでも昔は不良相手に喧嘩はしてた。足どめくらいにはなれるさ」

「……………っ、けどっ!」

「いいから、行け!」

それでも逃げない彼女は一喝され、黒い者と見比べてからその場から走り出す。それは逃げるためではなく、助けを呼ぶために。

走り去っていく彼女を音で確認し、由樹は面倒そうに溜息をつい

て黒い影と対峙する。

黒い影はもぞりと腕を出し、手甲を出す。それには研ぎ澄まされた刃があり、両腕に装着されている。それでベンチを切り裂いたと考えると、人間が受けてしまえば即死は確実だ。

だが、由樹は決して臆さない。緊張といった感情は見られず、だらっと構えすらせずに立つ。

彼の瞳にあるのは恐怖ではない。

まるで嫌なものをしなければならぬという嫌悪の色であった。

周りの景色から見る限り、どうやら近場の建物の屋上に転移したらしいが、そんなことを思案している場合ではない。

突然の事態に驚いて反応する暇はなかったが、御坂ははっとなって黒子へ怒鳴りつけた。

「黒子っ、戻りなさい！ まだ景山さんと『タミーチエック視覚阻害』が………！」
「ダメですっ！」 “アレ” は尋常じゃありませんわ………あれから放たれている殺気というか威圧感、並の不良やスキルアウトのものでは………」

「だったらなおさら！ 重福美穂はともかく、景山さんは能力者じゃないのよ!？」

「ちょ、御坂さん落ち着いてください！」

佐天の制止を聞かずに黒子の胸倉に掴みかかり、御坂は怒りをぶちまける。

「あれは私から見ても屋やばい分類の奴だった！ 学び舎の園の生徒を狙ってきたのかわからないけど、あんなのを放っておくわけにはいかない！」

重福の能力は当然ながら戦闘向きではないし、由樹はただの喫茶店の店員だ。そんな二人に御坂や黒子ほどの戦闘が出来るはずもなく、あんな存在に襲われてしまったては数秒と持たないだろう。

だからといって見捨てることなど出来ない。すでにかかわってしまったのだ。

ここで見捨てるという選択をするほど、御坂は終わっていない。

だが、黒子が首を縦に振ることはなかった。

「ダメですよ！ 私達では勝てるはずのない存在ですよ！？」

「…………… ちょっと待ってください。白井さん、あの黒い人を…………… 知っているんですか？」

佐天の言葉にびくりと黒子の肩が震える。

御坂の手が胸倉から離れ、彼女は絞り出すように嘔きだす。

「…………… 噂というか、先輩から聞いた話なのですが…………… 外で人体実験で身体能力などを強化された人間が、学園都市に侵入しているという噂があるんです。その輩は警備員アンチスキルですら太刀打ちできない殺し屋で…………… そういうのに会ったら即座に逃げるように言われています……………」

ぞくりと、一瞬だが御坂は身体の芯が震えるのを感じた。戦おうという気にはならないが警備員アンチスキルというのは所詮はただの教師の集団だ。戦闘能力ならば理論上は御坂の方が上である。

だが、それでも体術などといった人間の部分では勝ち目はない。

大人と子供。この町での安全は警備員アンチスキルという大人達が守っている。

その彼らが手を出せないというのは、つまり子供たちでは立ち向かえないということだ。

人間の部分を超えた、能力を使うしかない。だがそれは、気絶させるなどという甘い次元の話ではないのだろう。

すなわち、能力で殺すしかない。最大出力10億ボルトの電流が

出せる、自分の異名ともなっている『超電磁砲^{レールガン}』で。

殺せるのか。人を殺めるなどという世界からほど遠い、ただの中学生が。

「ま、待ってください！ それが本当に実在していたとして、警備^{アンチス}員^{キル}でも手が出せない化物をどうするんですか！？ このままじゃ学園都市は……………」

「……………彼ら専門の退治屋みたいのがいるらしいですよ」

佐天の言葉に、黒子は観念したように答える。

ほぼ同時。

彼女達がいる煉瓦造りの建物の前の道路を、黒い影が疾駆していた。

襲撃者とは違っがちりとした黒を基調としたローブにジーンパン。手元には布に包まれた長い物が握られており、その顔にはどういわけかひよつとこの仮面がつけられており素顔を見ることはできない。

「退治屋の名前は不明ですが、こう呼ばれているそうです……………
…『亡霊^{カースト}』の『黒の断罪者^{エクスキューションナー}』」

黒い断罪者は駆ける。

目の前につながる道を。

自らが犯した罪を殺すために、ひたすらと。

迫りくる凶刃を回避するのに、恐怖の念は必要ない。

はたから見れば達人の域にあるであろう斬撃も、それはただ”殺しに慣れている”だけにすぎない。ちゃんとした修業などをしたわけではない者の攻撃など、先読みをして出しているわけではないから単調になってしまふのだ。

そんな攻撃にいくら殺意を乗せたところで、一般人には通用してもまず由樹に当たるはずもない。

普段から呆けていたり、女子中学生と同じ目線で話す優男だったとしても、

彼もまた、スキルアウト達が畏れてしまうほどの男なのだ。

だが、連続して受け続けるのにも限界というのは訪れるもの。

一旦息を整えるために後ろへ飛び、間合いを取る。大きく攻撃を空振りした『亡霊』^{カースト}はゆらりと由樹を見やる。

もう一度攻撃をしようと、右腕を振り上げた時。

目の前に黒い影が舞い降りた。

『亡霊』^{カースト}はその瞬間、攻撃をやめて数瞬躊躇う仕草を見せる。そして、結論が出たのか人間とは思えない跳躍力で飛び上がり、その場から立ち去った。

その方向を由樹は見詰め、再び黒い影へと向ける。

だが、すでにそこに黒い影はどこにも見当たらない。

「……………とりあえず、あいつらは無事かな？」

そつばやきながら、由樹は歩き出した。

その数十分後、御坂達と連絡を取った由樹たちは常盤台中学の正門で合流し、重福も警備員^{アシスキル}へ身柄を受け渡した。

その際に彼女は由樹を見やり、顔を赤くしてこんなことを言っていた。

「あの、お手紙……………書いてもいいですか？」

「…………手紙じゃなくて、直接ウチの店に来い。サービスしてあげるよ」

にっとうと由樹は言葉と共に返す。笑顔とサムズアップを。

その言葉が嬉しかったのか、重福も微笑みとサムズアップをして護送されていった。

あんな事態があり少しの時間、由樹は警備員アンチスキルから取り調べを受けることになった。明らかに外部からの侵入者だったので、手引きしたのではないかと疑われたのだという。

もちろん御坂や黒子達の代弁もあったため問題なく解放され、御坂や黒子達は由樹の乗ってきた車で帰ることになった。

その帰り道の車内で、御坂は外を見詰めながら嘯く。

「……………あの重福って子。完全に能力を消していたわね」

「ええ。異能力者《レベル2》だと書庫バンクにはありましたのに」

黒子も同意見だったのか深く考え込むように顎に手を添える。かなり希少な能力なのか同じ能力者は少なく、ほぼ全員が強能力者《レベル3》止まりということだ。だが、それでも完全に姿を消すことは不可能だという。

ちなみに後部座席には御坂、黒子、初春の順で座っているが、心底疲れたのか初春は寝てしまっている。

助手席に座る佐天は寝むそうではあるが起きているようで、はあと溜息をついた。

「貴重な体験をしたな」

「あんな体験、もう嫌ですよ……………本当に怖かったですから。というか、由樹さんもよく無事に逃げられましたね」

彼女達にはなんとか命からがら逃げてきた、と説明してある。実際、命からがらではなかったにしても避けて避けて結局はあちらが勝手に撤退したのだから、強引ではあるが間違っていないだろう。

「まっ、初春へのご褒美はぜひうちの店に来な。レシピはもらったし、実際に作った場所を見たんだ。同じじゃないけど、作ってやるよ」

「た、助かります……………」

苦笑いを浮かべた佐天はそれきり、窓から外を見詰める。

曲がれていく景色を見詰めながら、ふと佐天は思い返す。

突然の襲撃者に恐怖し、何もできなかった自分。それはきつと『レールガン超電磁砲』である御坂でも、ジャツジメント風紀委員の黒子も同じだったのだろう。

だとしても、由樹さんや重福を置いて逃げてしまった。そのことに変わりはない。

(私って、凄く無力だなあ……………)

全てというわけではないしろ、大抵のことが能力によって優劣が決まってしまうこの学園都市で、無能力者《レベル0》というのは無能な上に無力だ。

過ぎて行く景色が、まるで自分がいる場所とは違うように見えて、ほんの一瞬だが自分の心がどんよりと暗くなったのを感じ取った。

2話・狙われた常盤合っって言ひげん、ぶっちゃけ問題ないだろ？(後書き)

感想、レビューどっどっ待ってますー！

3話・連続虚空爆破くのおつりよくとちからく(前書き)

今回登場するモブキャラであるはずの介旅初矢。

ぶつちやけかなり良い奴キャラになってます

しかもモブのはずなのに主役級の活躍も!?

3話・連続虚空爆破<のつりよくとちから>

まだ世間は夏休みが始まる前だが、照らしつける日差しは完全に夏の色だ。こういう日にかぎって晴天で雲ひとつない青空が広がり、柄にもなく頬を汗が伝う。

枝葉航真はハンカチで汗を拭きながら、スーツの上着に入れてある煙草を取り出しライターをつけようと指を動かすが、まったく火がつかず息をついて再び煙草をケースに戻す。

航真がいるのは第16学区の物流センター内の喫煙所である。月に1度、『アンティック珈琲店 - カフェ -』の発注の手続きのため、由樹が航真はこの場所へ訪れるのだ。

学園都市にはもちろん人口培養の食材などがあり理論上では農家の人々が作ったのと同じものだが、由樹と航真のポリシー上、食材にそれらは使わない。

理由は簡単。機械の手で作られた野菜に、農家の人たちの愛情は籠っていないからだ。味の品質は上賀茂しれないが、それでも毎日農家の人々は朝早くから育ててくれているのだ。

それを人々に極上の料理にするのはこちらの領分だ。

一料理人として、農家の人々を否定するような真似は絶対にし
てはなかつた。

「……………ちつ、帰りにライター買って行くか」

「おや、枝葉さんじゃんか」

声をかけられそちらに目を向け、航真は眉をひそめる。

そこにいたのはスーツに半袖ワイシャツというサラリーマンの男
がいた。もちろん初対面の相手ではなく、航真の知人である。

青い色のショートカットヘアであり、彼はライターを取り出す
とそれを差し出す。

「ああ、高木さんか。いつもお世話になってます」

「ははつ。別に交渉の場じゃないんだ。敬語はなしにしましょうや」

笑みを浮かべる高木からライターを受け取り、ふつと微笑を返す
航真。

高木は由樹の昔馴染みであり、『アンティック珈琲店 - カフェ
-』の発注などを担当する物流センターの職員である。同い年のた
めか航真とも打ち解け、航真にとっては数少ない友人だ。

受け取ったライターで煙草に火を付け返すと、高木も煙草に火を
付ける。

「……………相変わらず、この臭いは好きそうにはなれないな」

「ははっ。まあこれはゲテモノだからな」

高木が吸っている煙草は学園都市製であり、ジュースのように研究者達が徹夜明けにノリだけで話しあつて作ったのではないかというゲテモノ作品であり、不評な一品である。

航真も何本も煙草を吸ってきたが、どうにも好きにはなれずに「もう吸いたくない煙草ベスト5」に入るほどだ。

火を付ければ甘い臭いがあるのを支配し、我慢しようとするが航真は顔をしかめてしまう。

「とりあえず、発注内容は無事受理された。多分向こう側もすでに準備してくれているだろうから、2、3日後には着くはずだろう」

「そりゃありがたい。最近、新しく常連客が増えた上に由樹の奴が新しいレパトリーを覚えたからな」

煙草を美味そうに吸いながら、航真は現状報告するように呟く。

毎度のことながら高木は由樹の話しを聞きたがる。話しが苦手な航真はいつも渋々といった感じで話していたのだが、何時からか自然と話すようになっていた。

この前、常連客であった藤井が風紀委員に絡まれたり、上条が新しいフラグが建てたことや、由樹が新しい料理を作ったなどといった他愛のないことだ。

「なるほどなるほど……しかし、常盤台の女子高生まで虜にしちま

うとはさすがだな、景山さん」

「相変わらずだがな……………さて、帰るとするか。今日の客達はちと特殊だとか言っていたからな」

いつの間にか煙草は吸い切り、灰皿に放り込むと航真はスーツの上着を着込む。

「あ、ちょっと待った。1つ頼まれてくれないか？」

「頼まれごと？」

バックを持ち上げ、踵を返そうとする航真を呼びとめる。

振り向いた彼に差し出したのは、白い手紙であった。赤いシールで封をされた綺麗なものだが、正式なものではない。

「これを樋口さんに渡してほしい」

「……………俺、あの人苦手なんだがな」

ぼやきながらも世話になっている相手の頼みだ。断るわけにはいかないだろう。

航真はそれを受け取り、バックの中にしまい込んだ。

『アンティーク珈琲店 - カフェ -』が昼ごろから店を開いているのは、かなり珍しいことである。

基本的に学生向けとした営業をしているので、当然顧客の狙いは中高生である。時間的にまだ学校があるこの時間帯は店主は寝ているか開店の準備をするのかくらいしかやることはないのだが、この日だけは店は開いていた。

普段のようなならしのない格好でいるのは、普段ではないくらいに真面目に店の中を掃除している由樹だ。右手には箒が握られているが、左手では携帯電話を握り通話しているのだが。

その相手は、今頃は中学校で昼休みであろう初春だ。

「んで、まだインクが取れないって？」

『はい……どうも第10学区で開発された特殊インクらしくて、今だに……』

重福美穂による常盤台中学生を狙った事件の日から2日が経ったが、彼女が眉毛に使用したマジックは10学区にて開発されたものらしく、1週間はインクが取れないというものだそうだ。

昨日から連続で佐天から電話を受けており、またついさっき愚痴

電話を受けたばかりだったのだが職員室に呼ばれたらしく、どういうわけか初春が電話相手となっている。

『でも、すぐに落ちるみたいです。今は帽子がまだ必要ですけど』

「そうか。まっ、あの子も反省してるみたいだし……あんまり恨んでやるなって、伝えてやってくれ」

「マスター！ オレンジジュース4人分、超お願いします！」

オーダーの声に頷き、初春に一言一言告げてから電話を切りキッチンに戻る。

今いる客は4人の少女達だ。女子中学生らしき子から高校生らしき少女まで。色とりどりの少女達だが、朝からずっとここに居座っている。

この時間帯はまだ学生は学校に通っているはずなのだが、彼女達はここに居る。スキルアウトのような輩という例外もいるが、どこをどう見ても不良には見えないだろう。

彼女達は”特例”なのだ。

「あと、C級映画の情報を超お願いします！」

「相変わらずな超ハイテンションだな、絹旗」

「口癖、移ってるわけね」

ポプカットの女子中学生、絹旗最愛に答えていると、金髪の少女、

フレンドの突っ込みが入る。

トレーに人数分のオレンジジュースと作り立てのケーキを乗せ、そそくさと運んでく。

「ほい、お待ち」

「あれ、私達が頼んだのはオレンジジュースだけ。結局、ケーキは頼んでいないわけよ？」

「サービスだ。試作だがな」

「……………かげやま、良い人」

彼女達は喜んでケーキを受け取ると、ほわほわとした少女、滝壺理后がわかりずらいくらいだが笑みを浮かべてそれを食べて行く。その姿は普通の女の子、そのものだ。

その姿がとても嬉しくて、由樹も笑みを浮かべる。

「C級ねえ……………生憎とおっさんには映画には興味ないからなあ。あ、魔法少女カナミンのOVAなら……………」

「超キモいです、マスター」

「結局、マスターも変態ってことね」

彼女達に散々なことを言われても、由樹は笑みを浮かべているだけだ。

さて、と箸を握ろうとしたところで、彼は入口に目を向ける。

カランカランと来客のベルが鳴り響き、少年が入ってくる。その風貌はどこかヤクザのようだがホストの新人のような格好であり、その眼光は鋭い。

手には紙袋が握られ、もう片方には新聞が握られていた。

「よお、クソヤロウ」

「お、珍しい……………」

滅多にこない来店客に由樹が手を挙げた瞬間、彼を遮るようにさきほどの少女達が突き飛ばす。

「第2位っ!!」

「ああ？ なんだよ、『アイテム』の連中がいやがるのか」

明らかな舌打ちをかまし、彼は少女達から面倒そうに目を反らす。そして、持っていた新聞紙をテーブル上に放り投げ、席に勝手に座る。

「コーヒーくれ。仕事帰りでだりいんだ」

「おやおや、ホストさんも大変だな」

「冗談を交えつつキッチンへ戻り、由樹はいつものようにコーヒーを入れる。」

だが、少女達の敵意は治まらない。今にも飛びだそうな姿勢で睨みつけ、特にストレートのお嬢様風な少女が完全に殺気を放っていた。

「てめえ……このクソつたね。『スクール』のリーダーさんがよくのこのこと顔出しやがったな……………」

「俺だってこういうトコに来るくらい時間はある。テメエらだつてここに来てんだらうが……………それとも」

ぎろりと振り向き、その目を彼女達に向ける。

「ここで潰されたいか？ ああ？」

「上等じゃねえか……………やってみるよ、エセヤクザ」

「……………ムカついた。お望み通り潰してやるよ」

「はいはい」

二人が立ち上がるうとした瞬間、コーヒーを入れたカップを叩きつけるように由樹が宣言する。

その瞳には普段のような穏やかさはなく、航真のように鋭い光が籠っておりその場にいる誰もが背筋に悪寒を感じるほどだ。

「暴れんな。超能力者が激突したらどうなるか、わからないわけじゃないだろっ？」

その言葉に、明らかに二人が口を紡ぐ。

学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}。そのうちの二人はここにいる。

学園都市暗部組織、『アイテム』所属・麦野沈利。

同じく暗部組織、『スクール』所属・垣根帝督。

学園都市にとって害となる者たちを始末するために組まれた組織の組員達だ。そのほとんどがいわゆる裏の世界の人間であり、また非合法的な実験の被験者達だ。

超能力者^{レベル5}は単独で軍隊と渡り合えるレベルの能力者だ。そんな彼らが全力全開で戦えば、『アンティック珈琲店 - カフェ -』はあろうか第7学区は焦土と化してしまうだろう。

超能力者^{レベル5}であるどちらも由樹の言葉にしばらく硬直し、舌打ちをかまし席に戻った。

「け、結局……マスターに叶うのはもう一人のマスターだけなわけね」

「ちょ、超どうでもいいことですけど、鋭いマスターはどちらに行かれたんです?」

ほっとしつつ険悪な空気を変えようと、緋旗とフレンドが由樹に問い掛ける。

わざとらしい話題の反らし方だが二人の気持ちをくみ取って、由樹は普段のように優しい笑みを浮かべて答えた。

「ああ、発注のために第16学区に行ってる。そろそろ材料が付きそうだからな」

ちなみに、と区切ると由樹は麦野がまさしく今食べようとしているケーキを指差す。

「そいつはぶつちやけあり合わせで作ったケーキなんだけど、評価は上々のよつで」

にやにやと笑う由樹に、麦野は食べずらくなつたのか顔を赤くしていく。

その様をうんうんと頷きながら眺め、ふと由樹の視線が新聞の一面を捉える。おそらくここの朝刊だが、そのまま放っておいたものだろう。

キッチンでパスタを鍋に入れてゆでながら、もう片方の手で新聞を手にする。

「……………グラビティ虚空爆破事件、か」

「あー、それ超聞いたことがあります。アルミ缶を基点にして周囲を爆発させてるらしいですね。超手間がかかりますよ」

垣根の隣の椅子に平然と座り、素人の犯行ですね、と絹旗が話す。

麦野がぎろりと眼を向けてきたりするが、絹旗は気付かない。嬉

しそつに足をぱたぱたと交互に動かし、そついった彼女に垣根は興味なさげにコーヒーを飲み込む。

「節目、かもしれないな」

「節目？」

首をかしげる絹旗に、ついと麦野。垣根だけでなくフレンドも目を向け、滝壺はぼけーと天井を見詰める。

由樹は答えない。ただ口元を緩めるだけであり、パスタをゆつくりとかき混ぜる。

世間は騒がしくても、今この時間だけは。

闇の組織のこの子たちが普通の子供のように笑っていられるこの時間くらいは、せめて騒がしくしないでほしい。

革命………ってわけじゃないけど、時代には代わり時つてのがあるのさ。

かつてこの学園都市にも何度かそつというのは訪れた………

7年前の、あれもその1つなのだろうな。

昼を過ぎたとしても日照りが落ち着くことはなく、むしろ気温は
高まりつつあった。

大通り大型ウィンドウでは熱中症が続出しているというニュース
が速報で流れ、これは大の大人でお気を抜けば倒れてしまうほどの
ものだろう。

料理人を称している航真としては、体調不良で倒れるなどは極力あってはならないことだ。小まめに水分補給をしてはいるので、問題ないだろう。

中身が空になったので、ちょうどよく目の前を通過したお掃除ロボット（プラスチック製品用）の前に放り投げ、回収したのを確認して歩き出す。

目指すはセブンスミスト。第7学区にある大型デパートの1つであり、女性向けの服などを用意していることで有名だ。航真は行ったことはないのだが、結標などがよくセブンスミストの袋を提げて店に来るので覚えていた。

「……………ん？」

わき道から大通りに出ればセブンスミストまですぐなのだが、そこで見知った顔を見つけて航真にしては珍しく目を丸くする。

「上条」

「え、あ……………航真さん！」

上条当麻。ツンツン頭に学校の夏服を着込んでいる少年は、藤井の親友であり『アンティック珈琲店 - カフェ -』の常連客の一人だ。

生まれつきの不幸体質のおかげでよく金欠かねては食糧不足に陥っては『アンティック珈琲店 - カフェ -』を頼ってくるのだ。

由樹や航真は頼ってくる子供たちには無償で料理を振る。もちろん根が良い奴かどうかを見極めてからであるが。

そして、上条にしては珍しく女の子が一緒であった。幼稚園生ほどのツインテールで、彼の足に隠れている。

「その子は？」

「セブンスミストに案内してほしいと言われたから、連れて行く途中なんですよ」

航真が女の子を見やると、彼女はぎゅっと上条のズボンを握る。

正直、自分の顔がほぼ無表情で子供に嫌われていることは理解している。が、ここまで完全に怖がられていると、さすがに心に来るものがある。

「あー、大丈夫だって。この人確かに顔は怖いけど、良い人だからさ」

「……………ほんと？」

おそろおそると見上げる女の子に航真はしばらくは無言であったが口を緩めると、女の子の頭を撫で上条を見やる。

「セブンスミストへ行くんだらう？ 俺も用がある」

「そうなんですか？ じゃあ一緒に行きましょうよ」

にっと笑い上条と女の子は航真と並んで歩きだす。

女の子はやはり航真が怖いのか上条を真ん中で歩き、挟むように航真と女の子がいるわけだが。

「で、その子は誰なんだ？ まさか隠し子とかいうベタな展開じゃないだろうな？」

「俺は高校生ですってば！ どうやったらそういう展開になるんですよ！？ この子は本当に偶然道端で会ったんですってば」

「つまりはお持ち帰りしたわけか……………」

「ちつくしょう、この人は……………」

上条当麻の世話好きは知っていたが、幼女まで範囲内だとはさすがに予想外だ。

ふるふると上条の肩が震えるのを無視し、そんな冗談を思い浮かべながら女の子を見やる。

「で、セブンスミストに子供だけでなにしに行くんだ？」

「え、えっと……………テレビのお姉さんみたいにおしゃれしたいなって……………ひつく……………」

どうして普通に尋ねただけなのに、子供は皆泣きそうになってしまつのだろうか、という航真の心の声がそのまま伝わってきてそんな感で、無表情な男は万年旗男を見やる。

航真の顔というより鋭い瞳が極道ソウチャのような感じに見えなくもない

ので、上条は苦笑を浮かべることしかできない。

「……………別段、今のままで十分可愛いと思うが？」

「……………え」

思いもよらない言葉に女の子の目は丸くなり、上条へ『もしかしてこの人良い人？』という視線を向ける。

信頼している上条が頷いたからか、その瞬間から女の子の瞳がきらきらと輝きだす。

夢は女優さんになることだの、ピンク色のスカートが好きだのと、航真が良い人だと理解してからの女の子が会話を辞めることはまじりなかった。乙女が数人寄せれば喧しいと昔知人に言われたことがあったが、一人でもそれは十分だと航真は痛感する。

セブンスミストまではそれほどまで距離はなく、案の定すぐに到着した。

「さて、俺は事務所の方に用があるからな。ここでお別れだ」

「えー、もっとお話したいなー」

頬を膨らませる女の子の鼻をつまみ、適当に相手をしてやってから上条にちゃんと面倒を見るよう言い聞かせ、航真は彼らと別れた。

店内に入れば冷房が航真の気分を立て直し、カウンターの受付嬢へ赴く。

彼女は書類に目を通していているのか視線を落とし、航真が近付いた影でようやく顔を上げる。

「すみません。樋口支店長はおられますか？」

「……………はい、支部長室にいらつしやいますが……………失礼ですが、どちら様でしょうか？」

航真の姿を認めて怪訝そうな顔をするということは、今年から入った新入社員なのだろう。最低限、相手を不快感を与えるようなことは、普通はしない。

それを察したからこそ、航真は気にした様子もなく財布を取り出し中から名刺を差し出す。

「同じ学区にある『アンティック珈琲店 - カフェ -』の店長です。樋口支店長とは旧友で、私用があつたので伺つたのですが」

はあ、と名刺を受け取るもどう対応して良いのかわからず、彼女は少し戸惑ったように手元の書類などをあさる。大方マニュアルでも探しているのだろう、と思いカウンターの背もたれにもなっている柱にある各階案内を見詰める。

ふと、前回訪れた時にはあつたはずの喫煙コーナーがないことに気が付き、受付嬢に尋ねた。

「喫煙コーナー、なくなつたんですか？」

「え……………あー、すみません。私が入社した時にはすでにありませんでしたので、わかりませんが……………今は各階禁煙となっております」

そうですかい、と航真は納得する。

やがて、対応しきれないのか内線電話を使い先輩だか上司に連絡を取り、名刺の名前を彼女は告げる。すると、一言二言交わし受話器を戻すと、航真を見やった。

「あの、アポの方は……………」

「ない。急なことだったので……………面会できなくても良い。この手紙を渡してもらえれば、それで」

敬語を使うのも面倒になってきたので、思わず普段の口調で告げながら手紙を差し出す。

「名刺と一緒に差し出せば受理してくれるはずだ」

一旦それを受け取った彼女はどうしたら良いかわからず、航真の言葉に頷くだけだ。

少し悩んだ上で、まあ後で上司に聞いて受け取ったらまずかったということなら連絡すればいいか、と自己納得したのか頷く。

「わかりました。支部長に渡せなかった場合はこちらの連絡先にお電話するという形でよろしいですか？」

「ああ。その場合はこちらに取りに来る」

「おやおやぁー、いけないなあ真里菜ちゃん」

話しが解決しそうになったその時、突然若い男の声が飛んだ。

そちらへ顔を向けると、受付嬢の顔があからさまに嫌そうな物に変化する。

そこにいたのは警備服を着た男達だ。だが若い。おそらくスキルアウトといった輩のアルバイトなのだろう。警備員とは違い単なる各企業が雇った従業員の一部であり、銃器など能力者用の武装はしていない職だろう。

それが2、3人。警備員がそれだけ集まってくれば十分一目につきもので、周囲の視線は一気に集まった。女学生達がひそひそと陰口を叩いたりしているが、警備員達は気付いていないのかへらへらと笑いながら航真に近付いて行く。

「佐々木さん。持ち場はどうしたんですか？」

「不審者がカメラに映っていたんでねえ。気になって来たんだよ」

言うまでもなく、不審者というのは航真のことだろう。

警備員の視線は彼に向き、警棒で肩を叩きながらにやにやと笑い、

「まったく……うちの受付嬢をナンパするなんてなあ」

「……………柄が悪い警備員だ。よく雇われたな」

もつとも、柄が悪い方がやんちゃな子供達が万引きをしないようにとの支部長の配慮なのだろうが、これでは逆に一般客に不評なのではないか、と密かに思う。

3人は航真を囲みにおごそかに告げる。

「ちょっと事務所まで来てもらいましよつかねえ」

「……………お婆ちゃんが言っていた」

突然、航真は指を上へ向け語りだす。

「たとえ身体は大きくても、人のことを考えられない者はいつまでも子供だとな」

「何が言いてえ？」

「お前らはどんなに頑張っても、今しか楽しめないガキだ」

その言葉だけで警備員達の顔が怒りに染まる。所詮は学生、こんな挑発に乗ってしまうのだから。

「ちよ、佐々木さん！ この前も……………」

「うるせえっ。女はすっこんでろ！」

警備員達は警棒を振り上叫び女学生たちが悲鳴を上げる。

それを航真は片手でいなし、軽く足払いをかける。それでも彼らは完全に尻餅をつく前に、身体を捻って航真を蹴り上げようとする。

それすらも弾き、航真は首元に手刀を叩きこみ気絶させる。残りの警備員達もその動きに驚き、振り上げようとしていた警棒を止め

てしまう。

「……………デモンストレーションにはちょうど良いか？」

「こ、こいつ……………」

もはや客寄せのイベントではないかと、客たちが集まっているのもあってか警備員達の顔をが赤くなっていく。自分達から喧嘩をしかけておいて、片手のみであしらわれている。

不良として、男としてここまで屈辱なことはない。

「このっ！」

「何をしているのかしら？」

それでもまだ喧嘩を続けようと警備員達が動いた瞬間、女性の声が振りかかる。

人ごみをかきわけるように現れたのは、航真と同じくらいの女性だ。紺色のスーツを着込み長い黒髪を後ろで結わい、まるで社員の手本となるような姿である。

セブンスミスト学園都市第7学区支店長、樋口真紀。

彼女は慄然とした態度で周囲を見回すと、頭を下げた。

「失礼しました。お客様はこのままお買いものをお楽しみください」

まさかの支部長の登場に客達はざわついていたが、それも一時で

すぐに解散していった。

「貴方達は奥に戻りなさい。後で処分を通達します」

「……………へい」

樋口の冷たい声色に、警備員達はバツが悪そうに頷きとりあえず倒れている同僚を担ぎあげて去っていく。

ようやく樋口は航真を見やると、笑顔で言った。

「大変お待たせしました。こちらへどうぞ」

「いえ、手紙を渡すように言われただけで……………」

言いかけて、航真は口ごもる。

その笑顔がとてつもなく「いいからついてきなさい」と語っているように見え、彼は息を吐き受付嬢から手紙を受け取る。

「どつも」

手紙を再び鞆の中に仕舞い、受付嬢にひらひらと手を振って樋口の後ろについていく。

1階のコーナーの脇を通り、少し大き目の扉から奥へと進む。そこから先は従業員しか来ないためかところどころ汚れてしまっている。

その通路を少し進んだところで、ようやく樋口は振り返った。

「久しぶりだねえ、ムッツリィー」

「誰がむつつりだ。このヤロウ」

さきほの慄然さはどこへ行ってしまったのか、樋口はにやりとまるで子供のような笑みをうかべると航真に抱きついた。いや、これは抱きついたというよりも飛びかかったという方がしっくりくるだろう。

決して樋口に恋愛感情があるわけではなく、昔から彼女は抱き付き癖がありこうしてよくしがみついてくるのだ。

自分が女だと自覚していないのか、もしや自分は男扱いされていないのではないかと思ってしまうくらい、彼女は恥じらいもなく胸を押しつけ抱きついてくる。

昔は航真でさえもよく赤面していたが、さすがに時の流れからか耐性というものを覚えた彼はぶっきらぼうに樋口を放す。

「突然どうしちゃったのさー？ 前もって連絡してくれたらちゃんとして迎えたのに……………」

「来る予定ではなかったのだがな、高木さんから手紙を渡すよう頼まれた」

さきほどの手紙を渡し、樋口の反応を見る。よくよく考えれば科字が発達したこのご時世、手紙などという古風に拘らずともメールをすればいいのだ。

それなのに手紙にしたということは、ハッキングなどによる情報流出を危惧した重要な案件なのか。

「……………内容は？」

「乙女のひ、み、つー」

どうせそんなことだろうな、と航真はそれ以上は言及しない。彼女にも彼女の都合や人付き合いというものがあるのだから、彼が踏み込んでいいものではないだろう。

手紙を丁寧に畳みこみ、樋口は踵を返して微笑んだ。

「ほら、お茶くらい出すよ？」

「おい、仕事しろよ」

「大丈夫。仕事しながらでもお茶くらい飲めるでしょ？　っていうか飲んで行きなさい」

航真の『支店長がそんなんで大丈夫か、このビルは』という視線を華麗にスルーし、2人は奥へと進む。

奥にあったのは各店舗の搬入場所であり、青や緑といったコンテナ積み上げられている。完全自立の機械達がそれを決められた手順で動かしており、従業員は監視のための数人しかいない。

その中を邪魔にならないように歩き、ようやくたどり着いたのが小型のエレベーターである。乗り込み押しした行き先は最上階で、数秒でそこへ到着する。

さらに社員専用の事務室を通り、ようやくやってきたのが応接室であった。

「長っ」

「仕方ないじゃない。学園都市という学生が集まるこのビルは、セブンスミスト最大の激戦場と言っても過言ではないんだから」

応接室に到着した瞬間に吐いた航真の言葉に、樋口は苦笑をうかべる。

椅子に座って鞆を適当に置き、お茶だかコーヒーを淹れようとしている彼女の背中を見詰める。

7年前、航真も樋口も学生であった。どちらも高校生であり、学園都市の卒業生だ。

だが、確かに7年前からそれなりの付き合いだったがここまでの仲ではない。せいぜい街中で「見たことある顔だな」程度のものだ。

それが社会に出て、社会人として会った結果がこれだ。

つまりは、人間どうなるかわかったものではない、である。

「久々に振舞うコーヒーだからね。砂糖3杯でいい？」

「待て。やっぱり俺が淹れる」

ついでに言ってしまうえば、彼女の行動もわかったものではない。

何が風紀委員だ。
ジャッジメント

何が警備員だ。
アンチスキル

この世は所詮、弱肉強食。弱い奴は死んで強い奴が生きる。

誰も助けてくれない。手を差し伸べてくれる奴なんて、どこにも
いはしない。

復讐してやる。報復してやる。

今まで僕を見下してきた奴らを。

だから、僕は力を得たんだ。復讐するために。

まず手始めに、ジャックメント風紀委員から。

綺麗事ばかり述べている奴らは、所詮弱者なのだから。

3話・連続虚空爆破<のつりょくとちから>（後書き）

ちょっと時間軸合わせの関係か飛ばし過ぎなと思っ
ていますが、レベルガンアニメのオリジナル話を盛り込んでいく
となると、するしかなくなってしまう。

とりあえずこの話しは前篇後篇という形をとります。

後半ではレベルアップの存在が明らかになり、ファミレスへ向
かうシーンにつながります。

4話： 『幻想御手へレベルアップ』 (前書き)

少しぐだくだかなと思いつつも……どうぞ！

4話： 『幻想御手へレベルアップ』

コーヒーを飲むなり垣根は帰ってしまい、再び『アンティーク珈琲店 - カフェ -』は女子高生たちの喧騒に包まれることとなる。

あらかた掃除を終えた由樹がすることは晩御飯の支度をする程度のことしかなく、野菜を細かく切り刻んでいるところだ。

「はあー、暇ねえ」

「世間の学生たちはテスト前だつてんでんやわんやしてるのに、お前らは気楽だねえ」

一体どれだけの時間からいたのだろうか。『アイテム』のメンバー達はずっと『アンティーク珈琲店 - カフェ -』に入り浸り、本来なら何千円単位の飲み物などを飲みまくっていた。

一応金は支払っているので由樹は何も言わないが、明らかに利益になるような額ではないことは確かだ。

そんなことはまったく気にしていないのか、由樹は腕を組む。

「さあーて……とりあえず刻んだが、何を作るか………」

「私、夕飯はハンバーグが良いです！」

「あれー、シヤケ弁は？ あれー？」

絹旗と麦野のリクエストはスルーし、とりあえず日持ちするサラダにでもするかと適当な皿に移す。

時間としてはようやくおやつの時間を過ぎたあたりであり、本来なら航真も戻って良い頃だ。だが一行に気配を見せないということは、高木などと話しこんでいるのかもしれない。

今日の夕飯を作るのは由樹になっているので献立は彼が決められるが、正直何を作ればいいのか困る。

材料も明日か明後日の昼ごろに搬入されるので、あまり材料も使うわけにはいかない。

「マスター、リクエストです」

「残念、聞いてやりたいが材料がない。これだと夕飯はもつけど明日の朝とかどうだろうなあ……………」

後ろの業務用冷蔵庫の中身と明日の配分を比べながら、由樹は渋る。

ここ最近、白井や御坂といった新しいリピーターを得たが、そのため予定よりも早く食材が消費されてしまった。もちろん美味しいと言って笑顔で食べてくれる彼女達を見るのは料理を作る人間としても、何より由樹としても喜ばしいことなのだが少し調子に乗りすぎたのかもしれない。

本気で悩んでいるからか唸り声が少女達の方にまで聞こえてしまい、4人は顔を見合わせる。

「ふーむ……しゃーない。航真に頼んで少し買い出ししてもらおうか」

結局、そういう方向で意見をまとめた由樹は踵を返し、携帯からメールを打つ。

とりあえずこれで明日までは持つだろう。航真が何を買ってくるのかはわからないが、とりあえず変な物は買ってこないはずだ。

「さて、夕飯はどうするかねえ………」

適当に質素な物でいいかと自己完結し、適当に外の掃除でもしようとした時。

由樹の携帯が振動する。メールの着信だ。

携帯を開き内容を確認すると、怪訝そうな顔をする。

「……………まさか、この間の奴……………？」

「マスター？」

神秘的な表情をしていたからか、絹旗が首をかしげる。

笑みを浮かべなんでもないと首を振り、由樹は箒を持って外へ出る。

夏本場の照らしが肌を焦がし、彼は目を細めながら空を見上げる。

遠く広がる空は相変わらず青いが、どこか雲の流れが速く嫌な予感が脳裏を駆けた。

「……………つたく、柄じゃないっての」

一人愚痴って、由樹は踵を返して店内に戻る。

やることは一つ。

やるべきことをする、ただそれだけだ。

昔の話しというのは、当時からしてみれば笑い物ではないものばかりのものだ。

所詮はインスタントコーヒーといったところか、あまり味は良くない。電子ポットのお湯なので淹れ方で工夫することもできず、航真はあまり飲み物には口はつけていない。

たださすがセブンスミストといったところか、高級なお菓子は美味い。

「でさー、あの時の……………」

「失礼します！」

まだまだ話しは盛り上がり（樋口だけ）そうになっていた時、応接室の扉を叩かずに突然従業員が入ってきた。その表情は切羽詰まったものがあり、額には汗まで滲んでしまっている。

「どうしたの？」

「さきほど風紀委員ジャッジメントから連絡が入り、このセブンスミストにて莫大な重力加速が見られたことです！」

「量子加速……………最近、巷を騒がしている連続爆弾魔か」

アルミ缶などのアルミを基点に重力加速し、それを周囲に放つことにより爆弾にするというものだったと新聞で聞いたことがある。

「次の爆発地点はこのセブンスミストです！」

「即座にお客様の避難。ついで従業員の避難を！ アナウンスでは電子系統の故障ということで放送しなさい！」

「は、はいっ」

同じ人物とは思えない鋭い指示を飛ばし、一瞬にして従業員たちの間に緊張が走る。

樋口は息をつくときさきほどのような凜々しい表情で、航真を見や

る。おちゃらけた旧友の樋口ではなく、支店長の樋口として彼女は告げた。

「申し訳ありません。こんな事態に巻き込んでしまって……至急避難を……」

「お前はどつする？」

「私はここの責任者です。皆を残して避難なんてできません」

強い意志の籠った瞳で航真を見詰めるその姿は、記憶の通りのものだ。

昔から彼女は自分を犠牲にして誰かを助ける。そういつた輩の集まりの一人だったのだから、彼女がそう言うのもわかっていた。

まったく、変わったと思っていれば変わっていない。

「阿呆」

鞆を持ち上げながら嘯く航真の表情は、壮絶な笑みを浮かんでいる。

「これでもかつては、アンタらと肩を並べた人間だぞ？ それにアンタを置いて先に逃げたと由樹が聞いたら、どやされる」

「ですが、危険なんですよ？」

それがどうした、と心配そうな樋口に航真は笑いかける。

それは稀に見ぬ自信満々の笑みであり、樋口も彼が笑顔になるところなど初めて見たほどだ。

「俺を誰だと思っている？」

「……………本当、相変わらずなのね」

凜々しい口調をしたというのに元の口調に戻し、樋口は苦笑を浮かべる。

二人が応接室を出ると従業員たちがあちらこちらを走り回っており、そのうちの一人が駆けよってきた。

「ジャケット風紀委員の協力によりお客様の避難は大方終了し、フロアの従業員たちも順次避難を開始しています。支店長とお客人も早く避難を」

「私は支店長です。皆が避難するまで逃げるわけにはいきませんよ」

「ですが、支店長にもし……………」

流るように従業員が口ごもっていると、今度は少し年配の男性社員が駆けよってくる。

「支店長、搬入口の従業員達と連絡が取れません！」

「搬入口……………」

「さつき通った広い場所よ。わかりました、そちらの様子は私が身に行きます。皆は避難しさない」

「ですが……………」

「こう見えて、私は元風紀委員ジャッジメントよ？ それなりに非常時の備えは出来てるわ」

それでも引き下がらない従業員達だが、最終的には避難するという方向で折れた。

エレベーターは樋口と航真が使用するため非常階段で避難していく従業員達を見届けた後、二人はエレベーターに乗り込む。

来た時と同じ速度で降りて行くエレベーターの中で、樋口は腕を組んだ。

「もう引き返せないわよ？」

「こっちはまだ現役だ。それに、最悪の展開がないとも限らないしな」

航真の気兼ねない言葉に、樋口は言葉を紡ぐ。冗談めいた口調だが、それはあり得ないことではないのだ。

これが能力者の仕業だとしたら、相手は学生である。それは小学生か、中学生か、はたまた高校生かはわからなが、精神的に身発達である場合が高い。

その能力に酔ってしまい、怪我人が出る可能性がある。

ということとは、それ以上の最悪な展開もありえるということだ。

チンという音とともにエレベーターが停止し、2人は降りる。

刹那、2人の鼻を劈くような異臭が襲った。

さきほど通ったはずの空間だった搬入口が、見るも無残な光景と化していることに航真は齒噛みし周囲を見渡す。

積み上げられていたはずのコンテナは拉げたりして形が変わっており、たちまち砂埃が宙を舞う。

これは重力爆発の現象ではないと、2人の直感が告げる。

「……………一体何が起きたというの？」

「……………これはすでに最悪かもしれないな」

そつとコンテナの影から広い場所を覗き、航真は目を細める。

広場には監視役として端末を手にしていたはずの作業員たちが倒れており、2人は彼らに駆け寄る。

だが、はたから見ても彼らの作業服を染めてしまっている赤い色に、樋口は絶句するしかない。

「……………ダメだ」

「……………っ！」

首筋に指先を当てる航真だが、希望空しく首を横に振る。

息を呑み瞠目してしまう樋口だが、航真は彼女の手を掴みその場から走り出す。

「な、何をっ!?!」

「あいつらの遺体処理うんぬんはあるが、まずは避難が先だ。まだ犯人が近くにいる可能性がある」

言葉とほぼ同時に、遠くの方ではじけ飛ぶ音が響く。コンテナが吹き飛んでいき、その中から人影が見える。

だが2人は振り返らず、一気に駆け抜ける。即座にボタンを押してフロアへ駆けこむ。

「……………どうして、こんなっ」

「とにかく……………ここから離れるべき……………」

「航真さん!」

かけられた声の方を振り向き、航真は珍しく驚いた顔を見せる。

「上条に……………御坂?」

駆けつけてきた上条が、まさかついこの前店のリピーターになった御坂と一緒にいることに驚きを感じたが、2人の表情は真剣だった故にとりあえずそのことは置いておく。

「あの女の子を見かけませんでしたか!？」

「何……? 先に避難した可能性は？」

「外にいなかったんです! トイレに行くって言って別れたつきりで……」

心底申し訳なさそうな顔で俯く上条に、航真は即座に周囲を見渡す。外が喧騒に包まれているのと、自身も多少なりとも焦っているからか気配などでは追えず、舌打ちをかまして御坂を見やる。

「御坂、とりあえず樋口支店長を外に連れ出せ。上条と俺とで探すぞ!」

「な、何言ってるのよ! 危険なことをアンタ達だけに任せて逃げるわけにはいかないわよ!」

一瞬だけ航真の思考が止まりかけるが、呆けている時間はない。

航真は頷くと樋口を肩を揺さぶり、強く言い放つ。

「樋口、お前は避難しろ。いいな!？」

弱弱しくだが、しっかりと頷き樋口は出口へと走っていく。

上条曰くすでに1階から3階は調べきったこと故、3人は停止し

たエスカレーターを駆け昇っていく。

セブンスミストの4階コーナーは主に小雑貨を取り扱っており、可愛らしい小物が棚に置かれている店が見える。

「お姉ちゃん！」

「っ、今のって………！」

上条と御坂が即座に反応し、航真も駆けだしていく。

女の子は嬉しそうに駆けていた。おそらく避難誘導が終わったことを報告していたのか、片手に携帯を握りしめる初春に向かってだ。

その両手が持っているのは、カエルのような人形。

「眼鏡をかけたお兄ちゃんがこれを渡してくれて！」

強張っていた初春の表情が緩み、それを受け取るうとする。

しかし、ほんのわずかに人形が”萎縮”した瞬間、航真は瞠目すると同時に叫んだ。

「初春っ、それが例の爆弾だっ！」

「っ!?!？」

突然叫ばれても、運動神経が一般学生以下である初春に出来ることはその爆弾をあらぬ方向へ投げ飛ばすことだけだ。

ただ、『超電磁砲』^{レールガン}だけは違った。

基本的に能力者同士の激突というのは万国人間ビックリショーのようなものだ。当然、摩訶不思議な攻撃が襲ってくることもある。たとえ常盤台というお嬢様学校に通っていても、御坂美琴は7人しかない超能力者《レベル5》。

「『超電磁砲』^{レールガン}で爆弾ごと……っ！」

スカートのポケットから『超電磁砲』^{レールガン}の象徴でもあるコインを取り出し、いつものように射出しようとした時、

爆弾の向こうにいる、黒い影と目があったしまった。

どくん、と御坂の中で心臓が跳ねる。背中を冷たい者がなぞり落ち、思わず脱力してしまう。

「っ、しまっ……………」

放とうとしていたコインが手から滑り落ち、御坂は驚愕で頭の中が真っ白になる。

その瞬間、ぐいっと御坂は引つ張られる。

それは航真が腕を引き、初春と女の子を守るように抱きしめた。

だが、もはや爆発を停めるすべはない。この威力は風紀委員を何人をも病院送りにしていると聞く。

誰も止めることは出来ない。

何が『超電磁砲』だ。

何が常盤台のEースだ。

何が超能力者だ。

何が第3位だ。

こんな時に誰かを守れないで、どうしてそんな肩書を持っている。

何も出来ないという無力感を初めて感じた御坂の眼前に黒い影が現れたかと思つた瞬間、

その世界は爆発に巻き込まれた。

心の中でどす黒いものが大きく芽生え、介旅初矢の心を支配していく。

本来、彼の『量子加速^{ル4}』は異能力者^{レベル2}。だが、今やその威力は大能^{レベル6}力者まで到達しているだろう。

全て風紀委員^{ジャッジメント}が悪いのだ。風紀を守るだのと言いながら、肝心な自分のピンチには駆けつけないヒーローなど。

この世に必要ない。

この弱肉強食の世界で物言うのは、力だ。能力によって優劣が決定されてしまうこの町は、そういう世界なのだ。

なのに、どっしりして。

「……………つくしよつ」

どうしてこんなにも、心が重いのだろうか。

彼が歩いているのは人通りのない裏道である。表通りでは突然の営業終了のお知らせを聞いて野次馬達がセブンスミストに集まっていることである。

いつもなら爆発の威力を垣間見て、喜んでいるのだが。

どういうわけか、女の子に爆弾の入ったぬいぐるみを渡した時の無邪気な笑顔を見て。

うん、ありがとう。お兄ちゃん

あの子まで、無関係な人々を巻き込んでまですることだったのだろうか。

「わからない……………」

脱力感、喪失感、無気力感。

一体自分が何をしたくてこんなことをしたのか、わからなくなってくる。

自然と彼がめをおとしたのは、一つの音楽プレイヤー。

これのおかげで強くなれた。自分にとってかけがえのないもの。だけど、どうして。

「……僕は、どうしたいんだろう……」

「……あんた、そこで何やってるのよ？」

冷たい言葉をかけられ、介旅は振り返る。

そこにいたのは常盤台中学の制服を着た少女と、スーツ姿の男。

「……さあ、なんだろうね」

自分が爆弾魔であることは当に知られているだろう。

だが、介旅は隠す気にはなれなかった。ゆっくりと振り向き、自身を自嘲するように笑みを浮かべる。

「……アンタが爆弾魔でいいわけ？」

「ああ、そうだね……」

あっさりと認めたことに怪訝さを感じたのだろう、少女の表情が歪む。

「……あんたご自慢の爆弾だけど、大した威力よね。大能力者^{レベル4}

くらいかしら……けど、残念ながら死人どころか怪我人すらいな
いわよ」

「……そう」

それだけで彼は何も言わない。

ただ億劫そうに音楽プレイヤーを握りしめ、立ちつくすだけだ。

「……ちょ、ちょっと、どうすればいいのよ？」

てつきり最後の抵抗だといわんばかりに反撃してくるだろうと思
っていた御坂は、予想外のハプニングに慌てふためき航真に振り向
く。

彼ははあと溜息をつき、腰に手を当てる。

「どうもしない。こいつが逃げないかどうか、見張ってればいいだ
けの話しだ」

「……力がある奴にねじ伏せられた。金はむしり取られるし、殴
られるし蹴られるし、散々だった」

突然、介旅は歌うように語り出した。御坂は「何言ってるのこい
つ……」と引くような表情だが、航真は真剣な表情で煙草をくわえ
る。

「ジャケットメントいつつ風紀委員が来ることはなかった。皆、不良たちが汚した
廊下の清掃とかしてたから」

「……………だから、今回の事件を起こそうって？」

言葉を聞いているに釣られて、御坂の表情が怒りに染まっていく。

端から見て、彼の言葉は言い訳にしか聞こえない。

ジャッツジメント
風紀委員が悪い、守ってくれない奴らが悪いんだ、と。

「復讐したかった……力を得て、ジャッツジメント風紀委員にも、スキルアウトの奴らも……みんなみんな……力で、ねじ伏せたかった」

「何よそれ……自分の無力を押しつけようっての!？」

ジャッツジメント
風紀委員が虐めなどの現場に急行しても間に合わない、というのは問題しされていることだ。彼らは出来るだけ早急に駆けつけたいのだが、やはり距離や移動速度などの問題から間に合わない場合が多い。

介旅が言ったように些細な問題をわざと起こしてジャッツジメント風紀委員の注意をそちらに向けてから、虐めやかつあげなどの行為を行うということもある。

それでも御坂は許せない。友人を馬鹿にされたようで、彼女達も一生懸命そういった学生を助けようと努力はしているのに。

御坂は介旅の胸倉をつかみ、怒鳴りつける。

ジャッツジメント
「風紀委員のせいじゃない。アンタはそれを自分でどうにかしようとしなかったわけ!？ 力、力って、力が全てなんかじゃないでしょう!？」

「御坂」

今にも殴りかかりそうな御坂の肩を掴み、航真は止める。

彼女はぱつと振り返り、航真に不満をぶちまけようとして……、

航真の表情が、言葉に出来ない威圧を放っていることに気が付き口を閉じる。

「誰もがお前みたいに、強いわけじゃない」

常盤台の『超電磁砲』^{レールガン}は、最初は低能力者^{ほんじん}だったが並々ならぬ努力で超能力者^{ちようてんりき}に上り詰めたという話しは有名であり、学生の見本になると教師たちもこの話をよくする。

だが、学生全員が彼女のように強いわけではない。

やはり才能という壁には誰にも叶わず、「『超電磁砲』^{レールガン}は頑張つて超能力者^{しゅへんりき}になりました。だから貴方も頑張りなさい」というお伽^{けん}噺^{ばなし}に立ち向かい、そして挫折していく。

世間的に見て御坂美琴は素晴らしい物語だろう。

だが、現実はそのはいかないのだ。

介旅初矢は御坂美琴みさかみことではないし、御坂美琴にはなれない。

「確かに、お前は凄いよ。才能の壁を乗り越えられた……けど……」

と言いかけ、航真は瞠目する。

御坂も振り向いた瞬間、驚愕してしまう。

「ちょ、アンタ!?!」

2人の目の前で、介旅が尻もちをついて息を荒くして、明らかに体調不良を訴えている姿であった。

「どうしたのよ!?!」

「わ、からない……けど、もしかしたら……罰なの、かな……」
息をのみ、彼は見上げる。

もうその瞳は焦点が定まっておらず、意識が朦朧としている中で彼は必至に言葉を紡ぎだそうとしていた。

「……教えられたんだ、あの子に……」

脳裏に浮かぶ、無邪気な笑顔をつかべる女の子。

自分のせいで、怖い目に合わせてしまった無関係の子供。

「間違っていたんだ……僕は……押しつけても、仕方……」
「抗ったのか？」

しゃがみ込み目線を合わせる航真に、介旅は首を僅かにかしげて見せる。

「虐められて、反撃したのか？ そのままやられっぱなしで力が欲しいなんて思ったか？」

「……戦った、けど……すぐに仲間を呼ばれて……」

「……そうか」

航真は一旦目を伏せ、口元を緩めた。

「起きたら教えてやる。喧嘩の仕方ってやつを……第7学区の『アンティック珈琲店 - カフェ -』に來い。そしたら……」

それは間違いなく、御坂が初めて見る笑顔だ。

「今度は、お前が同じ境遇の奴らを守ってやれ」

「……出来ますか、やり直せますか……」

不安で一杯であろう少年に、寡黙な店員は天を指差す。

「お婆ちゃんが言っていた……強きを助け弱きを碎け、ってな。所詮この世は弱肉強食……強い奴が勝ち、弱い奴は倒れていく」

それは励ましの意味なのか、それとも貶す意味なのか。

判断が難しい言葉を、彼は間髪入れずに紡ぐ。

「お前はどっちだ？ 強者なら立ち上がれ、弱者ならそのままへばつてろ」

一瞬だけだが、御坂は垣間見た気がした。

介旅初矢の瞳に若干の光りが入り、痙攣しているはずの四肢に力が入る。

本来動かすだけでも辛いというのに、明らかに文系という彼の身体は確実に動いていく。

そして、彼は立ち上がった。痙攣しているのにも関わらず、尻餅からちゃんと立って、

再び倒れそうになる。

その動きがスローモーションに見え、御坂があっという顔をする。

力が抜けた腕を、航真が掴んだ。

「立ち上がったじゃないか……今は眠れ」

「……………その、前に……………」

か細い声で紡ぐ言葉は、御坂に聞こえないほど小さなものだった。

「『レベルアップ幻想御手』は、実在します……………」

意識が消えかける前に、どうしても伝えなかったこと。

能力のレベルを上げることが出来る都市伝説のアイテム『レベルアップ幻想御手』は実在すると。そしてネット上で広まっているということ。

だが、もはや介旅にそれを告げるだけの力はなく、微かに呟くだけ。

「……………ごめんなさい」

それきり、介旅の手から力が抜けそのままぱりと、動かなくなってしまった。

意識を失った介旅初矢を警備員アンチスキルに引き渡した頃には、辺りは夕陽に沈んでいる時間帯になっていた。

「んじゃ、一応枝葉だけは後で病院に來いよ」

「おう」

航真にそれだけを言い放ち、笠部は護送車に乗って行く。

本来ならば事情聴取などの手続きがあるのだが、偶然にも駆け付けたのは笠部だったからか、特に小難しいことはなしに解放となった。

初春と駆けつけた黒子は現場検証に赴き、航真は佐天はを連れて『アンティック珈琲店 - カフェ -』へ戻ることにし、御坂は途中でまで一緒にすることになった。

とりあえず、といった感じで佐天は心底息を吐く。

「もう、心配しましたよ……………」

「あはは……………ちょっと無理しちゃったかなあ」

黒こげになったセブンスミス4階を思いうかべながら、佐天も御坂も乾いた笑みを浮かべる。

「でも、御坂さんのおかげでみんな無事って、初春が喜んでましたよ」

「そう、かな……………」

佐天はまるで自分のことのように話すが、御坂の脳裏に浮かぶのは介旅のところへ行く数分の前の話し。

あの時、御坂の『超電磁砲^{レイルガン}』は確実に間に合わなかった。

初春達を助けたのは、まるで英雄^{ヒーロー}のように立ちふさがった1人のツンツン頭の少年。

重力爆発すらもその右手で打ち消し、颯爽といつの間にか消え去っていたあの馬鹿。

彼がいなくなり非常階段から去ろうとしていることに気づき、御坂は即座にそこへ向かった。

『いいの？ 皆私が助けたって思ってるけど……名乗り出れば、
主人公よ？』

御坂にはわからなかった。助けたのは彼なのだから、彼が褒められるべきだ。

自分は何も出来なかった。介旅を助けることも、爆弾をどうすることも。

何も出来なかった自分がどうして褒められ、助けた男の事を誰も知らないのか。

だが、彼は澄ましたように告げたのだ。

『ああ？ 何言ってるんだ、お前？』

まるで近くのスーパーでバーゲンやってんぜとでも言うように、さも当然と言わんばかりに。

『皆無事だったんだから、それでいいじゃねえか。誰が助けたなんて、どうでもいいことだろ』

それだけを言い残し、彼は去っていく。

正直、こう……心の中でしこりがあった。

どうして自分で助けたと言わないのか、せつかくヒーローになれる機会だというのに。

どうして……

それが上条当麻だという少年の本質だと見抜くには、御坂美琴はまだ幼すぎたのだろう。

その後、航真がやってきて、そこで犯人を確保しに行ったということだ。幸いあの人形を持った介旅を御坂が目撃しておたので、難なく特定は終わった。

だが、御坂の表情を見てもわかるように、まだ終わっていない。

「『^{レベルアップ}幻想御手』……か」

「ああ、都市伝説のですか？」

御坂の言葉を拾い、佐天の顔が変わる。

この学園都市には、いくつもの都市伝説が存在する。

曰く『不良達が集まれる喫茶店がある』だの『特定の時間に学区を跨ぐと、虚数学区に迷い込む』や『あらゆる能力を打ち消す右手』など。

そのうちの1つ、『^{レベルアップ}幻想御手』。使用しただけで能力のレベルを上げることが出来るという、夢のようなアイテム。

「それが実在するらしい……」

「…………えっ!？」

心底驚いた表情の佐天に、航真は微かに頷く。

やがて、十字に差し掛かり左へ行けば『アンティック珈琲店
カフェ』というところで、御坂は右の方へと足を向ける。

「じゃあ、私はこっちだから」

「夕飯くらい御馳走してやるぞ?」

「……………少し、考えたいこともあるから」

「あれが上条当麻だ」

歩こうとして、航真の言葉に足を停める。

航真に背を向けうるような形になったが、彼は気にした風もなく
続けて喋り出す。

「『フォックスワード偽善使い』……………本人“達”はそう言っていたが」

「……………何の話しかしら?」

御坂はそれだけ言い残し、歩いて行く。

彼女なりに考えることができるのだろう、と航真は何も言わない。

上条当麻は誰かを助けるためには自分が犠牲になるのもいとわな

い、そういう少年だ。

「どうかしたんですか？」

ただその意味を知らない佐天が、無邪気に問い掛ける。

航真が「なんでもない」と呟くその姿は、いつもと同じ寡黙な枝葉航真のものだ。

「『レベルアップバー幻想御手』、かあ……………」

さきほどの会話で、それが気になってしかたないのだろう。

レベル0佐天は無能力者だ。その憧れは誰にも理解出来ないものだし、超能力が欲しくて学生たちは学園都市にやってくるのだから。

そんな彼女に、寡黙なマスターは呟く。

「……………欲しいか？」

「えっ？ いや、えっと……………」

凶星を疲れたからか、佐天は狼狽する。

『レベルアップバー幻想御手』が実在すれば無能力者は無能力者でなくなる。憧れを手にすることが出来るのだろうか。

「……………無能力者にとって、能力は空のようなものだ。手に入るはずのないとわかっていても、欲しくなってしまう」

「……………えっ？」

「……………お婆ちゃんが言っていた」

夕焼けに染まる空を指差し、彼は告げる。

「人生で間違った道を進んだとしても、それは間違いではない。来た道に戻って新たな選択をするのも、それは物語だ……………ってな」

「どっという意味ですか？」

「……………つまりは、よく考えて行動しろということだ」

そう言って彼が取り出したのは、1つの音楽プレイヤー。介旅が持っていたものだ。

介旅初矢は意識が途切れる寸前でこれを航真に手渡した。

御坂に気付かれないように。

それがどっという意味なのかはわからない。風紀委員ジャッジメントに提出しろということなのか、それとも預かっていて欲しいという願いなのか。

だが、航真はそれを佐天に渡すことを選んだ。憧れを渴望する少女に、気休めでしかないかりそめの希望げんそつを与えるつもりで。

「まさか、それが『レベルアップ幻想御手』……………？」

「らしいな。これはお前に預けておく」

「えっ、ど……どうしてですか？」

航真はそれに目を落とす。

それは麻薬のようなものだ。どう考えても後遺症という罰が残り、介旅と同じ末路を辿るだろう。

常識ある人間ならば、ジャッジメント風紀委員がアンチスキル警備員に渡すのが筋だ。

まが、それを佐天に渡す意味。あえてレベル0無能力者である意味は、麻薬をそのまま渡すような行為に等しい。

「……………どうして、私に……………」

「欲しかったんだろう？ それが」

「っ、私はこんな物欲しくなんかっ……………」

強く否定する佐天に、航真はそうかとだけ呟く。

「別に使えとは言わない。ただお前に預ける、白井にでも渡しておいてくれ」

「……………自分で渡せばいいじゃないですか」

「苦手なんだよ。ジャッジメント風紀委員とかアンチスキル警備員とか」

明らかに嘘っぽい言葉に、佐天の表情は曇る。

『レベルアップ幻想御手』が入っているという音楽プレイヤー。常識的に考

えれば白井か警備員アンチスキルに渡すか、もしくはこの場で壊してしまうという選択もあるが。

佐天はその音楽プレイヤーを見つめ、ただ苦し気に表情を歪ませる。

壊したい。もしくは渡さなければならない。

だが、使うだけで能力が手に入る夢のようなアイテム。

「……………まだ、いいよね」

そう結論付けた佐天は、それを制服のポケットにしまう。

その光景を見つめ、細く笑む者がいるとも知らずに。

4話： 『幻想御手へレベルアップ』（後書き）

少し綺麗な感じにまとめ過ぎでしょうか……

『レベルアップ幻想御手』使用者である介旅はいじめられっ子キャラですね。確かに御坂の言う通り力を言い訳にするというのは褒められた事ではないし、無関係な人を巻き込んで事件を起こしたのだから殴られても当然かもしれません。

けど、だからといって御坂が正しいとは作者自身、少し肯定出来ませんでした。

彼女も基本的に自分より下の人間を見下す思考だと思います。だから倒せない上条を夜な夜な追いかけて回しているのだし。

原作アニメではやられ役とした彼ですが……けど、彼も立ち上がる力くらいあると思います、少しかっこよくしてみました。

彼だけでなく、『レベルアップ幻想御手』使用者は少なからずどうしても能力が欲しかった……その理由が何にせよ。

そんな彼らを一方的に悪と決めつけたくないと思います、介旅や重福には主人公を絡ませていきます。

何より介旅初矢などは、作者の姿に……

なーんてシリアスな事書いてますが、作者にこれといった信念があるわけではありません。

最近、ちょっとブルーな事が連続で起こってるんで……

ちなみに彼らモブキャラは、この先幾度なく登場させる予定です。では、感想などお待ちしています。

応援よろしくお願いします

5話・躍動する物語（せかい）

「レベルアップ幻想御手」……………ねえ」

陽がほとんど落ちた状態の公園にて、藤井はジュースを片手に唸り上げる。

その隣にいるのは、ヤシのみサイダーをちびちびと飲む御坂の姿が。

あの後、御坂は帰宅せずぶらぶらと歩いていたのだが、その途中で不良達にナンパされ、そこを偶然通りかかった藤井に（不良達が）助けられたのだ。

そして消沈している彼女が気になったので、少し強引であるが連れ出したのである。

そこで聞いたのは、とある少年の行動が納得いかないというものであった。

その右手だけで沢山の命を救ったというのに、周りの人々は御坂が救ったと勘違いをしている。

そして当の本人は見知らぬぶり。

「思い返しただけでも腹が立ってきたわ……………」

「あーらら……………」

とりあえず、話を聞いて藤井が思ったのは。

あの野郎、ちゃっかりフラグ建ててやがる……………。

「あーまあ、なんつーの？ そう憤るなって」

「だって私は本当に何もしていないのよ！？　なのに皆、私が助けたみたい……………」

皆が彼女に向ける視線は、本来は彼に向けられるべきであった。

何が超能力者^{レベル5}だ。友達も、誰一人助けられないというのに。

膝を抱えるようにしている御坂からは、感情に応えるようにバチバチと電撃が光だしている。

「なんで、あいつは……………」

「ん……………なら逆に聞くけどよ」

ちらりと、ジュースを飲んで彼女を一瞥。

「お前さんはその時、誰かに褒めてもらいたいから立ちふさがったのか？」

「そんなんじゃないわよ。私はそこまで安っぽい人間じゃない」

「なら、そういう事だよ」

短く返された言葉に、御坂は眉を潜める。

「あいつにとって、誰が助けたなんて言葉通りどうでもいいのさ。皆が無事で笑っていられるなら、それでいいんだよ」

「……………でも、そんなのっておかしいじゃない。」

評価されるべき人間が評価されないなどという世界は、正しい世界か。

これではまるで、道化ではないか。

「あいつが良いって言ってんだ。ならいいじゃんか。それよりも…」

…

永遠と続きそうな会話を断ち切るように、藤井は身を乗り出す。

普段とは違う空気を身に纏った事に気づき、御坂も顔を上げて彼を見やる。

「『レベルアップ幻想御手』が実在するって話し……………」

「え、ああ……………うん。よくわからないけど、航真さんがそう言ったのよ」

思い返しても枝葉航真は確かにそう言っていた。何かを含んだ

言い方であったが、それに間違いはないはずだ。

『レベルアップ幻想御手』が実在するとして、それが学生に渡っているとしたら大問題だ。

能力を上げることが出来る夢のようなアイテム。それを欲する学生は、この学園都市に何百、何万人といるだろうか。

だが、その末路が介旅初矢のように意識を失ってしまうものであったら。

「もし、そんなことになったら、大事件に……………って」

人が真面目な話しをしている横で、聞く側であるはずの藤井は呑気に携帯電話を弄くっていた。

バチバチと電撃が火花を散らすか冷静に、冷静に。詳しい話を聞いてから、黒焦げにするのはそれからだ。

「……………何をしているのかしら？」

「声、上擦ってんぞ。まあいい」

彼は携帯電話を閉じると、御坂を見やる。

「第7学区にじゅなさんっていうファミレスがあんのは知ってるな？」

「へっ、まあそりゃ……………」

本来、常磐台中学に通う学生は例外なくお嬢様だ。故にフアミレスという単語を知っているかどうかも謎謎所のだが、流石は御坂美琴。

伊達に上条を追い掛け回しているわけではない。

「そこで今夜、何かが取引されるらしい」

「何か、って……何よ？」

的を得ない言葉に御坂が聞き返す。

もうすでに飲み終わったのかジュースの缶を適当に遊びながら、藤井は告げる。

「さあな……エロ本かもしれないし煙草かもしれない……そこは知らん」

「どこ情報よ」

「大人の事情だ」

ふんと鼻を鳴らし、彼は立ち上がる。軽く身体を動かし、そのまま言い放つ。「今夜の8時に行われるらしい。どうするかは好きにすればいいぞ」

「……………どうして協力してくれるのよ？ 別にあんたに実害があるわけじゃないでしょう」

「ところがどうこい。そーでもねーんだわ」

遮るように眩き、藤井は空を見上げた。

確かに 『レベルアップ幻想御手』が回り能力者が増えようが、正直藤井には関係ない。手を出したいとも思わないし、興味もない。

だが、それで誰かが困ったり悲しんだりしていたら、黙ってられない男がいる。

彼はたとえ自分が無関係であっても、必ず立ち向かう。どんな強大な力を持った相手でも。

それが彼なのだから仕方ないとは思う。だが、そのせいで何度も死にそうな目に合っているのを藤井は知っている。まだ出会って半年くらいしか経っていないが、それくらいわかるほどに彼は極端だ。

だから、知る限りの憂いは自分で断つ。あいつが動かないで済むように。

もう、あんな馬鹿を失う事がないように。

「……………俺の知り合いに被害が出ないとも限らないしな」

「そんな理由で仲間を売るの？」

仲間、ねえ。と口の中で眩き、苦笑する。

確かに自分自身不良だと思う。授業をサボったりするし喧嘩もする。教師に怒られる事だって多々あるし、罰すらもバックレた事

もある。

だが、だからといって誰かを傷付けて良い事になりはしない。

それで誰かに力を振るい、悦に浸って良いはずがないのだ。

そのような輩と一緒にされるくらいなら、フォックスワード偽善使いで十分。

「とりあえず、気が向いたら俺も行ってやる。あんま無理すんじやねーぞ」

振り返らず言い放ち、藤井は去っていく。

声をかけようと御坂がはつとなった時には、すでに彼は離れた場所へ行ってしまっている。

「……………結局、肝心な話しに答えてもらってないんだけど」

そうばやいた所で言葉は届かず、御坂はため息を吐くしかない。

だが、とりあえずやるべき事は定まったような気がする。

『レベルアップ幻想御手』の発見。黒子に言えば一般人だからどうのこうのと言われるだろうが、目の前で困っている人があるならば、見逃すことなど出来ない。

「……………よし」

そうと決まれば、と御坂はゲコ太の携帯電話を取り出す。

とりあえず、彼女を取り巻いていたもやもやは消えてなくなっていた。

こんな人達もこんな店に来るのだと、佐天は心外そうに目を丸くしていた。

結局、晩御飯をご馳走になるために『アンティック珈琲店 カフェ』へとやって来たのだが、どういうわけか店番であるはずの由樹の姿はなく、4人組と1人の女子校生がいるという普通の喫茶店ではあるまじき光景であった。

4人組のうち金髪の留学生らしい女子校生は身体を振り向かせると、おかえりーとでも言うかのように片手をひらひらさせる。

「由樹は？」

「なんか超スピードで出て行っちゃいましたよ？ 『カナミンが俺を超呼んでいる！』とか超叫んでましたけど」

「あー、いや、いい。ひとまずオ、シ、オ、キ、か、く、て、い、だ、な」

シヨーツトカットの少女が発した明らかに嘘っぽい内容に、1人でごちった航真は台所に向う。とりあえず立ったままだとあれなので、佐天にカウンターへ座るよう促す。

スーツ姿のままではあるが、料理する程度には問題ないのだから。フライパンなどの調理器具を取り出し、後ろにある業務用冷蔵庫を開くと、

「……………ほとんど食材がない、だと」

「由樹が食材がぬえーって叫んで、航真さんに買い物頼もつって頼いたわけよ」

絶句した航真が、金髪留学生の言葉に、携帯電話を開く。

すると、確かにメールが入っていたのが確実に凍りつく。

半ば人間って凍りつくところなるんだ、と佐天が感心しているのと、いつの間にか由樹のエプロンをかけた少女がお冷やをカウンターに置く。

「はい、どござ」

「え、あつ……………わざわざありがとうございます。というか、定員さん……………ですか?」

「うづん。お客さん」

ふるふると首を横に振るおっとりとした少女に、とりあえずお礼を言ってお冷やを一飲み。

「……………仕方ない。残り物で作るか」

結局、そう結論付けたらしく航真は本当に有り合わせの食材を取り出す。

佐天としてはどうして客であるはずの少女が、普通に店員のようになっているのかなどと突っ込みたいのだが、それが許されないような雰囲気なのでとりあえずお冷やを頂くしかない。

少しずつ、ちびちびと飲んでいる佐天の背中をちらりと一瞥しているのは、暗部組織『アイテム』の4人だ。

やがて、オレンジジュースのストローから口を話したフレンドが爆弾を投下。

「結局、その子は航真の女って訳？」

「どちらかと言えば俺ではなく、由樹だな」

ぶはっ、ガタッ。

爆弾を普通に掴み投げ返す航真と、水を吹き出す佐天と、反射的に立ち上がった先輩系巨乳女子高生の図の完成である。

おっとり癒し系少女滝壺からタオルを受け取り、軽く解釈すると佐天はかばりと航真に怒鳴り付けた。

「な、何言ってるんですか!? まだ知り合って1週間しか経って
いないんですよ!?!?」

「なるほど。まだ、ですか」

悪のりかはわからないが、絹旗がぬつと佐天を覗き込むように
呟く。

これはまたいらぬ誤解を招く、と判断した佐天は慌てて言葉を
紡いだ。

「いや、まだとかじゃなくて……というかあの人がいくつですか!?!?」

「24だが……」

「だったら10歳も離れてるし!」

「いやいや、わかりませんよ。あの人、カナミン好きという事は口
リコンかもしれせん!」

などときゃあきゃあと騒ぐ女子校生達。

その端で珍しく麦野だけは、大人しくコーラを飲んでいる。

おそらく彼女と航真は気付いていたが、店の外で体育座りで落
ち込んでいる男が1人、いたとかいなかったとか。

完全に吹っ切れた、と言いが御坂は黒子と連絡を取り、件のファミレスへと着ていた。

看板には蛍光灯でじゆなさんと幼稚そうな感じで彩られており、その下で2人は店を見上げる。

じゆなさんは雑貨屋の上に店舗を構えており、入り口に立つと中から見えてしまう構造になっているため、一先ず作戦会議のために階段下にいるというわけだ。

「じゃ、突入するわよ」

「いや、あの……いきなし呼び出されて、レベルアップ『幻想御手』がどうのこうのって……あれは単なる都市伝説ではないのですか?」

呆れた具合に呟く黒子の言葉は道理だ。話し程度なら佐天から聞いているが、所詮は眉唾物としか認識出来ない。

まるでゲームのように簡単にステータスを上げる事が出来るのなら時間割り《カリキュラム》など受ける必要がないのだから。

ないから地道に努力するのではないか。

黒子の言葉は最もだ、と言わんばかりに御坂も頷く。

だが、と御坂はそれが単なる都市伝説に留まるような気がしないのだ。

「とにかく、あなたは離れた場所で待機ね。ジャッジメント風紀委員として顔が割れてるかもしれないしね」

「あ、ちよっとお姉様……………!!」

黒子の言葉虚しく、階段を登っていく御坂。

その背中を見つめ、ジャッジメント風紀委員は一言。

「……………嫌な予感しかしないですの」

そして、その予感は惜しくも当たることになってしまつのであった。

相変わらず上条^{しのほか}当麻の不幸は半端ないと、藤井晃は痛感した。

その日はようやく長くダルかったテスト期間が終わり、当麻を含めたクラスメイト達とカラオケやゲームセンターに立ち寄り、精一杯遊んだ。やはり遊んでいると時間は早く回り、完全下校時刻には解散となったのだが。

その帰り道に御坂がナンパされているのを見かけ、助けたいので話を聞き、とりあえずアドバイスのものを投げて去った。

までは良かったはずだ、確実に。

その帰り道で再び不良に追いかけて回されている上条を発見し、そのまま2人で相手を撒いて合流し、そのまま夕飯を食べようとい

う話しになったのだ。

そこで向かったのがファミレスじゅなさん。

御坂美琴に紹介してしまった店である。

その事に気付いたのは店に入って、視界にその光景が入ってきたからであった。

御坂がまるで妹キャラと言わんばかりにぶりっ子姿勢で不良達に媚びている姿と、少し離れた席でテーブルに鼻息を荒くして頭を打ち付けている黒子の凶。

まさしくカオスな空間と化しているその場に、藤井は出来れば触れたくはなかった。

絶対に面倒事に巻き込まれる。上条と御坂とで1回ずつ不良と喧嘩し、そしてまた目の前にそれらしいイベントのフラグが。

瞬時に触れてはまずいと直感が告げ、藤井は上条を見やる。

「おい、上条。別の店に……」

と、言葉が終わるよりも早く、上条はそのカオス空間へと進ん

でいく。

そして。

「ちょっと、その君達！」

普通にその中へと入っていき、説教を始めた。

「君達、女子校生にたかるなんてどういう神経をしているんだ！
男なら自分の手持ちだけでどうにかするもんだろ！」

「あー、上条」

これ以上ヒートアップしても困るので、上条の腕を掴み藤井は
嘆息する。

「どつ見ても逆。こいつがたかってるだろ」

空いてる方の腕で口をぱくぱくさせている少女を指差す。

何でアンタがここに………というかもしかして今の見られてた………！？
と顔を真っ赤にしている御坂に、上条は怪訝な表情を向ける。

「なんで……お前、レベル5超能力者なんだし、たかる必要ないべらつ！
!?!」

ひきりと御坂が固まり、『テレポート空間移動』
により上条の後頭部に移動した黒子がドロップキックをかます。

前につんのめる上条は無視し、もはや半ばやけくそ気味に黒子は腕章を見せつけた。

「シャッジメント風紀委員ですの！ 違法な取引があるとの連絡を受けて参りましたわ！」

「は？ 違法な取引………?」

きよとんとする不良達に、御坂もこれみよがしにと指を突きつける。

「惚けんじゃないわよ！ ここで謎の取引がされるのは知ってるのよ。さつさと『レベルアップ幻想御手』を出しなさい！」

「………『レベルアップ幻想御手』?」

唯一部外者であろう上条が首を傾げるのを余所に、御坂は続ける。

「アンタ達はそれを取引するためにここに………」

「取引っつーか、それってこれの事か?」

ヒートアップする女子校生2人だったが、出された物に顔を真

っ赤にして押し黙ってしまっ。

不良達が茶封筒から出した物は、本来この学区には在ってはならない物だ。どう考えても第7学区には高校や中学校が密集しており、年代としてもそれくらいの学生しかいない。

いや、と藤井はそこで論理に待てと命じる。在ってはならないのかもしれないが、だからこそ“これ”は必要なのだ。

いつの時代も人間を成長させたのは好奇心からであるからして

……

「な、なんでエロ本がここにあるのでせう？」

「……………俺のカッコいい幻想をぶち壊してくれてありがとう」

上条を殴りたい衝動に駆られるが、藤井はとらあええず我慢である。

要するに、高校生でさえ手に入れてはならない物はずである未成年禁止の物が出てきたのだ。

お嬢様学校であり女子校である常磐台には無用な一品であり、顔を真っ赤にするのは当然の反応といった所である。

わなわなと震えていた御坂は、やがて藤井を睨み怒鳴り付けた。

「は、話しが違っじゃない！」

「どーしてこんな卑猥な物が出てきますの！？」

「俺は『レベルアップ幻想御手』かどうかわからないけど、って説明したはずなんだけどな？」

呆れて頭をかき、藤井は黒子を見やる。

初春から聞いた話しであるが、黒子は以前媚薬を購入して御坂に飲ませようと画策したらしい。

なら一応、こういう事にも慣れていないか、と突っ込みたくなるがそれを我慢する。

「な、なら『レベルアップ幻想御手』が何なのか知ってる？」

「知らねーな、そんなもん」

話題を変えようとする御坂に、数瞬置かずに不良達が答える。

不良達の様子からして、もはや話す事はないと言わんばかりの空気だ。

これ以上この場においても面倒な事になるだけだ、と藤井は上条と黒子の手を引いて店の出口へと向かう。

「おっと、そう簡単には」

「通さない、ってなあ」

それを阻むように立ちふさがったのは、たった今店に入ってきた6人の不良達である。

全員がにやにやと笑みを浮かべ、御坂と黒子の表情が変わる。それは普段ナンパしてくるろくでなしから感じる気配と同じだったからだ。

「あれれー、もう良い子はお家に帰る時間ですよー」

「それとも、お兄さん達といけない夜でも過ぎすー？」

でひゃひゃ、と下品な笑みを浮かべる不良に、御坂の額からバチリと電気が走る。

これは頭にきているな、と藤井は相手から目を反らさず心の中で呟く。

『レベルアップ幻想御手』が取引される（かもしれないと念を押しただのに）と聞いてやって来てみれば、『レベルアップ幻想御手』はなく、妹キャラを演じた所を上条に見られたという羞恥と怒りで我慢の限界といった所だろう。

だが、店内で暴れてしまえばアンチスキル警備員を呼ぶ事態になりかねないし、何よりジャッジメント風紀委員の目の前だ。

「……………フケるぞ」

短い言葉を藤井が発したと同時に、上条は頷くよりも早く御坂の手を掴み出口へ駆け出した。

ちょ、と御坂が顔を赤くし振り払おうとするが上条の真剣な表情に押し黙り、不良達を押し退けて店を出ていく。

「あつ、てめえ！」

「白井！」

「ちよ、どうして逃げるんですの!？」

不良達に立ち向かおうとしていた黒子こ腕を引き、藤井は駆け出す。

外に出るとカップルの学生達が何事かと騒ぐが、藤井には気にする余裕はなく上条と共に駆け出した。

「ちよ、ちよっと! どうして逃げるのよ!？」

「店先で暴れるわけにはいかないだろ。それとここじゃ一目に付き、周りに迷惑がかかっちゃう」

藤井は喧嘩上等の人間であり、絡まれたら当然嬉々として殴りかかる。

だが、誰かに迷惑が掛かるといふのなら話しは別だ。

誰かに迷惑を掛けてまで喧嘩をするな、それはただの獣がする事だ。

師である男から教わった理念のような物だ。

だから彼は人がいる所では喧嘩はしない。まずは人気のない場所まで誘い込み、やるのはそれからである。

やがてほぼ街灯がない河原へとやって来て、ようやくそこで4人は止まった。

わらわらと群がってくる不良達も肩を上下させ、もはや息絶え絶えといった感じである。

「こ、の野郎……ようやく追い詰めふべらっ!?!」

やっと落ち着いて喋れると安堵した瞬間、突然藤井が殴り飛ばした。

「うし、喧嘩開始だ」

「だ、か、ら！　なんでこんな所まで来なきゃならないのよ!?!」

くわりと御坂が叫ぶのもお構い無しに、藤井はかかっといやと言わんばかりに構える。

確かに店先や街中で暴れるのは周囲に迷惑が及んでしまう。だからといって、わざわざ人気のないこんな場所まで来る必要があるのだろうか。

御坂はこんな奴らさっさとビリビリさせたいわ、と言わんばかりに電撃を走らせる。

「ここ、警備員アンチスキルの目に付きにくい場所なんだよ。だから思い切り暴れても問題は……」

「ま、お待ちくださいませ！風紀委員ジャッジメントの前で喧嘩など……」

腕章を突き付け、言い切る黒子に藤井は一瞥もせず彼女に言い放つ。

「アホか。どうしてこいつらは腕章を付けてるお前がいんのにナンパしたんだと思うよ？」

そもそもの前提が間違っている、と藤井は言った。

不良というのは大概無能力者レスレであり、まずは能力者である風紀委員ジャッジメントに勝つ事は出来ない。

それは学園都市の暗黙の了解というか、法則性のような物だ。火に水を掛ければ鎮火してしまうように、能力者に殴りかかっても拳が届く前に能力で倒されてしまう。

だからこそ、風紀委員ジャッジメントになるには能力者という条件が付いている。

だが、もしその前提が崩れたら。

無能力者レスレが能力者に勝ったとしたら。

その自信があったからこそ、彼らは常磐台中学の学生である御坂達に狙いを定めたのだとしたら。

「そんなの関係ないわ……私の電撃でっ！」

まるで臨界点を突破したかのように、御坂から白い閃光が迸りばちいと電撃の槍が放たれる。

さすがに超能力者レベル5の電撃には反応出来なかったのか、不良達は顔を青くし逃げようとする。

が、全力疾走により体力は尽きていたらしく、悲鳴と共に倒れていく。

残らず黒焦げになってしまった不良達を見つめ、藤井は肩を竦めて振り返る。

「横槍かよ」

「ちまちまやってんじゃないわよ。まったく…… 『レベルアップ幻想御手』の事を聞き出せると思ったのにこんな……」

「お姉様。これは私に拘束してくださいという意味表示ですの？」

わなわなと身体を震わせる黒子に、御坂はしまったという顔をする。

不用意かどうかはさておいて、ジャッジメント風紀委員の目の前で堂々と暴れてしまったのだ。

震わせた肩を収める事なく、黒子はびしりと指を突き付けた。

「おのれ藤井つ。お姉様にこのような事をさせるとは、なんたる愚

行！」

「……………おっと、まさかまさかなまさかだろ。責任転嫁と言っぞ、それ」

呆れ顔で呟き、藤井は一先ず黒焦げになっている不良達を一瞥する。

とりあえず御坂は手加減したらしく、ぴくぴくと動いているので生きてはいるらしい。

「……………で、一体全体どうしてこうなったのか上条さんに説明して欲しいのですが？」

「気にすんな。不良達を守ろうと努力したけど、結局ビリビリ姫からは守れなかった、って話しなだけだ」

先ほどから黙りを決め込んでいた上条を流し、藤井はとりあえずと言った感じで頭を搔く。

もはこの場にいる意味もなく、さっさと帰ろうと御坂達に言い出そうとした所で、

突然、あらぬ方向からコンクリートが飛んで来て、藤井は瞠目すると同時にその場から飛び退いた。

まるで車が激突したような音に御坂と黒子ははっとなり、振り向く。

「うちの舎弟を可愛がってくれたのはアンタらかい？」

掛けられた声は少女の物であり、4人の視界に映ったのはジャージを来た高校生らしき女性。

茶髪を後ろで結わい付けているが、まったく化粧気はなく殺伐とした物が第一印象である。

「先に手を出して来たのはこいつらだ。とやかく言われる筋合いはねえな」

「……そうかい。おい、お前らあっ！」

びくりと身を震わせ、不良達はびしりと立ち上がると一糸乱れぬ動きで女性の背後に整列した。

「あ、姉御……」

「ちゃんと謝んな」

「す、すいやせんでした……」

「声が小さい！」

「本当に、すいやせんでした!!」

中心の男に習い、残りの男達も一礼をする。

突然の乱入者に御坂達は困惑するが、藤井は特に気にした様子もなく彼らを見つめる。

「これで許してくれるかい？」

「いや、えつと……別に……」

御坂は外見とはかけ離れた大人の対応にたじろぐが、彼女は不良達に鋭い目を向ける。

「ほら、お前らもう帰んな！」

「へ、へいつ」

お疲れさまでした、などお先に失礼します、といった言葉と共に不良達は立ち去っていく。

そして彼女は、不良達がいなくなったのを見計らったように壮絶な笑みを浮かべ、

「さあ、始めるかい」

御坂と黒子は、その意味を一瞬だけ理解出来ず困惑の表情を浮かべたが、その意味を理解したと同時に吃りながら声を上げた。

「なっ……今、許してくれって………!」

「それはそれ、これはこれだ。原因はどうあれ、舎弟がやられて黙っていられる頭タマはいないと思うけど?」

そつちの事情なんか知らないわよ、といった感じで顔を曇らせる御坂だが、藤井は一步前に出て軽くではあるが構える。

「だ、ろうな。嫌いじゃないぜ、そういうの」

「お待ちなさいって言うてるでしょう!」

その瞬間、『テレポルト空間移動』で黒子が2人の間に割り込み、腕章を見せつける。

「これ以上、わたくし風紀委員の目の前で暴力は振るわせませんわ!」

「あ? 寝惚けた事言ってんじゃないよ。ジャツジメン風紀委員だからってあいつらに力を振るって良い証拠になるのかよ!？」

「なっ、最初に仕掛けてきたのはそつち………」

「御坂、白井」

一言割るように藤井は言葉を述べる。

御坂も黒子に合わせ前に出ようとして止まり、彼を見やる。

「少し黙れ。これ以上ややこしくすんな」

まるで突き放すかのような言動に2人の中学生は驚愕の表情を浮かべるが、藤井は気にした様子もなく軽く左腕をスナップさせる。

「聞いた事あるぜ。お前……浅野和美だろ。能力は『ブラックコート表面融解』、アスファルトの粘性を自在に操る」

「よく知ってるじゃないか」

「レベルは知らねえがそこそこだった気がする……不良でそこそこの能力者ってのは珍しいからな」

不良に無能力者レベル0が多いのは、現実挫折する者が多いからだ。誰もが能力に憧れを持って学園都市にやってきて、そこで「あなたに才能はありません」という現実を突き付けられるのだ。

それでも頑張ろうと生きるのが藤井や上条、佐天達だが、誰もがそうではない。

中には絶望し学校へ行かず、墮ちる所までとことん墮ちる輩もいるわけだ。

「なんだい。あたいの能力を知ってるから勝てるっても？」

「俺的に重要なのはそこじゃない。ブラックコート表面融解……アスファルトの粘性を操る能力だが……」

そこで一言区切り、彼は言周囲を見回してからった。

「どこにアスファルトなんてある？」

あ、と御坂が思わず声を上げそうになる。

ここは河原だ。地面は当然土だし、アスファルトといえはかなり離れた所の土手を上がった先の道路しかない。

先程の攻撃は能力による物だとしたのなら。

そのアスファルトはどこから持ってきたというのだ。

「さっきのはアスファルトじゃないだろ。暗くてよく見えなかったけどよ……あれ、土だよな」

藤井は足元の土を踏み鳴らすように足で叩く。だが、その目は一度も彼女からは目を反らさない。

土しかないのにアスファルト並の鉋物を投げつける。

それが意味する事は、

「お前、レベルアップ『幻想御手』使ったな？」

「ごくり、と御坂は知らず知らずのうちに息を飲む。

不良の喧嘩は御坂も黒子も見た事はあるし巻き込まれた事もある。

だというのに、この躍動感は何だというのだろうか。まるで試合を目前にしたスポーツ選手のような空気だ。

いや、空気が張り詰めている原因はそれだけではない。

『レベルアップ』を実際に使った者がいた。そちらの方が張り詰めている理由としては主だろう。

「……………くくっ」

籠ったような笑い声に全く無関係である上条が眉を潜める。

「なるほど、『レベルアップ』が目的かい？」

「ああ、能力者って奴の気分を味わってみたくってな。さっさと寄越しな」

「嘘だね」

断ち切るように浅野和美は言う。

「トルハンマー絶対破壊が能力を欲する人間ではない事はあたいでも知ってる。そんなんじゃないだろう」

「『レベルアップ』幻想御手』を使ったって事は隠さないんだな」

ぱきり、と手の音を鳴らし藤井は僅かに腰を落とす。いつでも

駆け出せるようにと、姿勢を低くする。

ついに喧嘩が始まるうとした、その時……

遠くの方からサイレンの音が響いてきた。

「っ、アンチスキル警備員ですわ！」

汗を吹き出せながら黒子は御坂の腕を掴む。

「ちよ、何……っ!？」

「アンチスキル警備員に捕まったら寮管に怒られる程度じゃ済みませんわ！ 最悪、退学の可能性だってありますのよ!？」

普通の学生ならばその可能性はほぼ皆無であろうが、彼女達は名門常磐台中学校の学生である。

アンチスキル警備員のお世話になるのは、非常に厳しいペナルティが待って

いるのだろう。

「ちよ、まっ……私を置いて勝手に話しを進めるんじゃないわよ！」

「上条、そいつら連れて先行け。俺はこいつから『レベルアップ幻想御手』を奪う」

「……あーもう、巻き込まれて不幸だあーっ！」

ほぼヤケクソに近い感じで上条は御坂の腕を掴み駆け出す。

御坂はふざけんなーっとなりに身を任せて電撃を撒き散らしたのだろうが、生憎上条が御坂を掴んでいるのは右手である。

あの右手に掴まれている以上、能力者が異能の力を発する事は出来ない。

詳しい理屈はわからないが、そういう腕なのだ。

だいたい3人が遠退いた所で、藤井はにやりと笑う。

「お前は逃げないのな」

「アンタが逃げさせてくれなかったんでしょうが」

ちらりと、徐々に近付きある警備員をアンチスキル一瞥し、藤井を再度見やる。

「アンタは逃げなくていいのかい？」

「生憎と、警備員とはお友達だ」

アンチスキル

いつもお世話になってます、的な意味で。

もちろんその意味を理解しているのだろう。浅野和美は冗談に言葉は返さずせず、ただ敵意を孕んだ瞳を向けてくる。

つくづく自分は人が良いらしい。もちろん上条ほどではないが、わざわざ警備員アンチスキルの前で喧嘩を始めるとは。

だが、2人が怖じ気づく事はない。

やがて離れていた2人の距離は一気に縮まり、拳がぶつかり合う音が響いた。

不幸だ、と呟きながら熱帯夜の朝を上条は歩く。

その後、ある程度離れた場所で御坂の腕を放した途端、彼女が放電。

しかも運悪く近くにあった電信柱にまで電撃が資料が走り、結果こころ一帯の電化製品は全てダメになったらしい。

美しかったはずの夜の学園都市の夜景は瞬く間に闇の世界に早変わり。

さらには腹いせとしか思えない御坂の追撃を撒き、さらには先程の不良達と出会い鬼ごっこ開始。

つまりは一睡も出来ずに駆け回り、やっと帰ってきたわけである。

ひとまず真つ先にしたのはシャワーを浴びる事だ。一晚中走り回って汗だくである。

「藤井の奴、大丈夫かな……」

今頃は警備員のお世話アンチスキルになっているだろう親友の事を思い浮かべ、若干憂鬱な気分になってしまう。

今更だが、担任へどう説明しようか。一応担任の連絡先は知っているから伝える事は出来るが。

とりあえず、布団を干そう、帰り途中でも思ったが日照りも良く、本日から学園都市はテスト休みに入るから1日自由だ。

時間はたっぷりあるのだし、ぐっすり寝てから考えればいい。

と、その時携帯電話にメールが着信している事に気付く。

藤井か、もしくは隣人の土御門か。と思っていたら担任であった。

要約すると『上条ちゃん、馬鹿だから補修でーす』というラブレール。

「不幸だ……」

携帯電話を一先ずテーブルに置き、ベッドのシーツを引っくくめて持ち上げる。

「あーもう、やめやめ！ 布団を干しましょう！ ……つか、夕立とか降らないよな？」

暗い考えをやめて器用に足でベランダへの網戸を開き、空を見上げる。

ああ、なんと清々しい青空。空はこんなにも青いのにお先は真つ暗。

激しく憂鬱になりそうな気分で、そこはかたなく嫌な予感を口にしつつベランダへ目を向け、

すでに白い布団があった。

「……………おっ？」

学生寮といえど上条に同居人はおらず、^{ルームメイト}独り暮らしだ。なので、この部屋でベランダに布団を干すような人間は上条を除けば藤井か由樹らマスター達くらいである。

無論藤井は独房だろうし、何より干すべき布団は手元にある。

よくよく見れば、布団などなかった。

白い服を着た女の子だ。

「ウエ!?!」

あまりの事態に抱えていた布団がばさりと落ちるが、そんな事を気にしている場合ではない。

一体全体どうしたらこんな展開になるのか、と慌てふためながらも女の子を（失礼と思いつつも）観察する。

歳は上条より年下で銀髪の外国人。鉄棒の運動中に力尽きたみたいにくったりと腰の辺りをベランダの手すりに押し付け、身体を折り曲げてだらんとしている。

「なん、ってかこの子……シスターさん……?」

よく見れば少女の着ている服は純白の修道服だった。頭にも少し高価そうな純白のフードで、全体には所々に金系の刺繍が織り込まれている。

ピクン、と彼女が反応を見せた。

「うおっ……」

生きてる、とは言わずに上条には後退るしか出来ない。

そもそも相手は外人。自慢ではないが上条当麻、話せる言語は日本語のみ。

「……………」オ

やがて彼女は、可愛い唇を動かした。

「おなかへった」

「……………」

少女は告げた。

少年は出会った。

相棒が独房にいる時に。

寡黙マスターがパスタを茹でている時に。

ナイスガイなマスターが玄関先で体育座りしている時に。

科学と魔術が交差する時、

物語は始まる
！

6話：何も能力者になる事が、期待に応える事とは違うんじゃないか？（前書き

東北大地震の時、自分は高校の友人たちとカラオケにいました。4階で最初は大した揺れじゃなくて、次第に大きくなって一瞬冷つとしましたね。

揺れてる最中の俺達

俺「どうする!?!」

友人「よし、コップを持とう!」

俺「わかった! ……え、なぜに? 隠れるのが先じゃないの!」

避難後

友人「しまった!」

俺「忘れ物したか?」

友人「俺ジンジャーエール全然飲んでない!」

俺「ああ、そう……………」

6話・何も能力者になる事が、期待に応える事とは違っんじゃないか？

上条と別れ（逃がしたとも言っ）、御坂と黒子は一度寮に戻り一眠りし、朝には外出していた。

目的地は当然、第7学区にある病院。

意識不明に陥った介旅初矢が搬送された病院だ。

今日から学園都市はテスト休みに入るため、受付には普段なら見かけないくらいの学生達がいた。病人や怪我人と、他にも面会希望者と。

一先ず受付を済ませた2人は風紀委員^{ジャッジメント}+1名だという事を伝え、担当医の男性についていく。

「そうですか、現場に……」

「はい。それで介旅初矢の容態は……？」

「……正直、お手上げです。検査では異常は見当たらず、原因もわからないのです」

カルテを見つめ、医者は息をつく。学園都市の科学技術が外と比べて30年ほどの開きがあるという事は、それだけ医療技術も発展しているはずだ。

その技術ですら原因を明かす事が出来ない。

やはり 『レベルアップバー幻想御手』で意識不明に陥ってしまったのだから、治療法も 『レベルアップバー幻想御手』を解析するしかないのだろう。

「同じ症状の子供達も何人が搬送されてきたのですが……」

かけている眼鏡をくい、と直してカルテをめくる医者は深く息を吐く。

そのカルテを横から覗き込んだ御坂と黒子は無を見張る。

そこあった写真は、かつて御坂や黒子達が出会った少年少女達であった。

佐天達と初めて出会った時の銀行強盗に、重福美穂。他にも多数だ。

彼らが全員、『レベルアップバー幻想御手』を使用していたのだとしたら、書庫シヅに乗っている情報と食い違いがあったのも頷ける。

「我々では手に負えないため、急遽専門家を招く事になりました…

…」

と、そこで男性は言葉を止め、書類から顔を上げる。

御坂と黒子が釣られて顔を上げると、

1人の女性が。

スカートにワイシャツ、その上からは研究者が着る白衣を纏った長髪の女性。

研究者にしては比較的若く、目元には隈が目立つ。

「水越病院院長から招集を受けました……」

彼女は告げる。

「木山春美です……」

それが、初めての邂逅であった。

食材がなくては客どころか自分達すら生かせない、という事で航真は朝早くから出掛けていた。

残された由樹は1人、店の掃除や器具の点検をして過ごす事にした。そのため、今日の『アンティック珈琲店 カフェ』は休業だ。

であるはずなのに、ドアが開閉したベルが鳴り響く。

「あつれー、ホントに今日は休みなんですか？」

「表の看板に出てるだろーが。なのに、どうして堂々として入ってくる？」

カウンターの椅子を弄くっていた由樹が顔をしかめて、入り口を見やる。

そこにいたのは2人の女子中学生、佐天と初春のコンビだ。

「ご、ごめんなさい。休業だから今日は止めましょうって言ったんですけど、佐天さんが……」

「あははー……すぐに帰りますよ」

「別に構わないよ。コーヒーくらいしか出せないけど、ゆっくりしていきな」

優しい由樹の言葉に佐天はやったと喜び、初春は申し訳なさそうに頭を下げながらカウンターにつく。

アイスコーヒーを淹れながら由樹は、2人へと尋ねる。

「そっぴや今日からテスト休みか」

「はい。もともうちよつとで夏休みです」

嬉々と初春はコーヒーを受け取り、佐天は無言でそれを受けとる。

一瞬であるが、景山由樹は目を細める。昨日からそうだったが、佐天にいつもの元気がない。

昨日、不思議な縁か暗部組織のアイテムのメンバーや案内人である結標淡希と仲良くなっていた時はいつも通りの少女だったはずである。

「朝から遊ぼうって言うからどこ行くのかと思えば、『アンティック珈琲店 カフェ』だし……」

「えー、だって由樹さんに会いたかったしー」

「はいはい。おだてても何も出せないよ」

軽く流しつつ、由樹は厨房の掃除を開始する。

どうやら2人は長居するらしく、ガールズトークを開始した。

少しの時間が経ち、そろそろお昼時となる時間になった時だ。

再びドアのベルが鳴り、由樹はそちらへと顔を向ける。

「あ、御坂さん！」

「えっと、表には休みつてあるけど……やってるの？」

入ってきたのは御坂と黒子、そして見知らぬ女性が1人。

「中覗いたら佐天さん達がいたから入っちゃったんだけど……」

「……………ま、常連特許。飲み物だけでいいなら」

いつまでも客を立たせておくのも悪いので、中に入るように促す。

見知らぬ女性は残念美人といった所か、化粧けがなく目元には隈。

着ている白衣からも研究者である事は一目瞭然であり、由樹にはどこか疲労しているように見えた。

いや、疲労というよりもこれは。

「とりあえずここで良いですね、木山先生」

「ああ、涼しければ何処でも構わないよ」

この炎天下を歩き回ったのか、3人は汗をかいており彼女の反応もまちまちである。

中に入った3人はいつもの席に座り、ひとまずコーヒーを注文し会話を再開した。

議題は。

「さて、先ほどの話しの続きだが……なぜ、同程度の露出でも水着は許され下着は許されないのか」

「いえ、そつちではなく……」

どんな会話をしていたのかと思えば、そんな下らない事か。

普通ならそつ切り捨てる。

だが、ここに黙ってられない男がいる。

「決まってるじゃないですか」

キリッ、と由樹は宣言した。

「水着はその身体を見せつける物であり、下着は恥じらいを隠す物。つまり……」

「話しがややこしくなるので黙っててもらえますか」

コーヒートをトレイに載せて運び、聞こえてきた話題に由樹は盛り上がりを見せようとするが、黒子に釘を刺されて押し黙る。

ふと、木山は彼を見上げた。

「私が頼んだのはコーヒーだったはずだが」

彼女の言う通り、テーブルには3人分のコーヒーに加えてティーポットにそれ用のカップが1つ。

由樹は微笑を浮かべながら、ティーポットの紅茶をカップに注ぐ。

「俺からのサービスです。暑い日にアレだけど……疲労に効く紅茶葉ですよ」

注がれたカップから湯気が立ち上り、心地好い香りが一同の鼻を擽る。

注ぎ終えたカップを、どうぞと差し出す。

受け取った木山は解釈し、一口飲み、

「……………美味しいな」

「じゅっくり」

いつもよりも店員らしく振る舞い、由樹は厨房へと下がる。

と、初春がカウンターの椅子を回転させると尋ねる。

「それで、研究者さんと白井さん達は……はっ、まさか白井さんの脳に異常が……」

「『レベルアップ幻想御手』の件ですの……」

「白井の脳に関してはもう手の施しようがないだろ」

ふざけた由樹に再三の視線が向けられ、彼はやれやれと肩を竦める。

やがて、やっと話しが進められると御坂が話しを切り出す。

「レベルを簡単に上げられるアイテム……それってありえると思いますか？」

「ふむ……形状、使用方法がわからないと何とも言えないね。それに原理も思い付かないな」

木山春美は脳医学の権威であり、彼女ならば少しはと思ったのだが。

「けど、『レベルアップ幻想御手』をどうするんですか？」

「『レベルアップ幻想御手』の開発者の検挙、使用者及び所持者には事情聴取を行いますわ」

ぴくりと、少女の肩が震える。

由樹は怪訝そうな顔で尋ねた。

「使用者はわかるが……所持者も？」

「今の所、使用者には凶暴化する傾向が見られます。所持者にもどういいう経緯で『レベルアップ幻想御手』を入手したのか、というのを伺いますわ」

まあ、と区切り黒子は言う。

「『レベルアップ幻想御手』なんて物に手を出すくらいですもの。どうせ能力者に復讐とか、くだらない理由だと思えますわ」

「……………くだらない、ね」

黒子には聞こえないように由樹は呟く。その瞳は冷たく、いつものような優しい色が失せたものだ。

彼女は今、自分が口にした言葉の意味を理解しているだろうか。能力者と無能力者。そのどちらも同じ境遇で、見ている世界が一緒だとは限らないのに。

確かに重福美穂は能力を強化して、常磐台の学生に八つ当たりに近い復讐をした。介旅初矢も助けてくれなかった風紀委員ジャッジメントに復讐するために事件を起こした。

だが、その全てに悪意があったのだろうか。

いや、確かに悪意はあった。どちらもそれを憎んでいたし、力を入れたから有頂天になった。

だからといって、全ての子供がそうなるのだろうか。目の前の壁を余裕で飛び越えていってしまい、見下されるが悔しくて力を振るうのか。

由樹は息を吐いて厨房を掃除する。

1人の少女が、突き刺さる言葉の刃に耐えるのを感じながら。

「まったく……いい加減にしないと退学になるじゃんよ」

アンチスキル 警備員の黄泉川愛穂は飽きれ顔で、自分の生徒を見つめる。

まるで刑事ドラマに出てくるような個室にパイプ椅子に座り、向かい合うようにしながらそっぽを向く藤井晃は無言を貫く。

一夜を開けても、アンチスキル 何故警備員から逃げずに暴力を振るった理由を告げる事なく、彼は独房にて待機していた。

藤井は黄泉川の学校の中でもずば抜けた不良振りであり、入学前から独房に入ったりしているのではや顔見知りという域を越えた関係である。

「お前が単にむしゃくしゃしてたって理由で喧嘩……する奴だけど、アンチスキル 警備員が目前にいたというのに戦うような性格じゃないじゃんよ」

「……………一緒に護送された浅野和美は？」

やれやれ、と黄泉川は安堵したように息を吐く。ようやく口を開いたらその話題は、戦っていた少女の安否とは。

いや、だからこそ藤井晃である。

「違う棟にいるじゃんよ。流石に男女は分けないな」

「あいつに意識はあるのか？」

その言葉に、黄泉川は首を傾げる。

「そんなに痛め付けたのか？」

「……………」
『レベルアップ』
『幻想御手』の使用者は、最終的に意識不明になるらしいぜ」

「……………」
『レベルアップ』
『幻想御手』だと？」

初めて聞く言葉に、黄泉川は首を傾げる。

彼はまるでやっぱりとも言うかのように肩を竦め、やっと黄泉川と目線を合わせた。

「今、学生達の間に戻ってる、季節外れのクリスマスプレゼントだと」

「何を言って……………」

その時、ばたばたと慌ただしい足音が響き、黄泉川は扉へと振

り返る。

扉を開けて入ってきたのは、浅野和美の事情聴取を担当していた警備員アンチスキルの同僚だ。

まさか、と黄泉川の予感を裏切らず、切羽詰まった彼女は叫ぶ。

「浅野和美が事情聴取中に倒れ、意識がありません！」

「……………冷静に。病院へ連絡をするじゃん」

「は、はい！」

慌てふためく女性警備員アンチスキルに指令を出し、彼女が去っていったところで、黄泉川は藤井を見やる。

そこに呆れた顔の彼女も、先生としての顔の彼女でもなく、警備員チスキルとしての顔があった。

「どづいう事か、説明してもらっじやんよ」

「……………さーて、俺も詳しい事は知らねえよ」

実際の事は藤井は知らない。『レベルアップ幻想御手』という物が出回っており、使用者にはレベルを上げるといふ快楽を与える代わりに最終的には意識不明という最悪な贈り物ステキ。

藤井は軽く背筋を伸ばすと立ち上がり、そのまま扉へ歩き出す。

「とりあえず、俺が知ってるのはそこまでだ」

「……………お前は黙っているのか？」

「決まってんだろ」

振り向かずに問い掛けてくる彼女に、藤井も背を向けたまま答えた。

「俺のダチに手を出すってんなら……………独房やみの中で懺悔してもらおう」

枝葉航真は正直な話し、靈感持ちである。「視」る事は出来ないが、気配を何となく感じる程度だが。

そして、それがよりはっきりと感じた事は今まで経験した事はなかった。

目の前に白い修道服を着た少女がいなければ。

思わず口に加えて火を点けようとしていた煙草が、ポロリと落ちてしまうのも無理はない。

25年という歳月を生きてきて、正直十分破天荒な人生だったと自負しているが、まだまだ自分が若いという事を痛感する。

それほどまでに衝撃的な展開だった。

とりあえず、一応周りを見回してみる。

ここはビルの屋上である。一先ず少量の食材を買おうと来たのだが、偶然か電気系統の故障により閉店。さらには突然の停電に慌てた誰かに足を踏まれるという始末。

イライラが頂点に達した彼だったが物や人に当たる訳にもいかず、非常階段を登り立ち入り禁止の扉をぶち破って屋上に辿り着いたのだ。

人混みを嫌う航真にとってこの解放感は堪らなく心地好い物で、煙草を吸おうと取り出した所で……

がこん、と気付けば少女が手すりにぶら下がっていたのだ。

「……………お腹空いた」

第一声がそれとは、些か航真も反応に困る。

彼女からは間違いなく霊的な“何か”を感じる事が出来、常識に考えて突然出現した彼女が一般人である事はまずない。

「お腹空いたって言うてるんだよ？」

「……………その状況で行き倒れと言つつもりか？」

「……………とりあえず助けて欲しいかも」

航真は嘆息しながらも少女を持ち上げ、屋上に下ろす。

改めて航真は少女の姿を見つめる。

白い修道服はどういう訳か安全ピンで補強されているが、装飾されている金の刺繍は見事な物であり、かなり高価な代物だ。

銀色のストレート髪から見ても外人だという事はわかるが、流暢に話すのは日本語である。

「何かご飯をくれると、嬉しいな」

初対面の人間に図々しく食べ物をねだるといふ。

呆れながらも航真は彼女の手を引き、近場のカフェテリアへ行き適当な昼食を取る事になったのだが。

この少女、遠慮を知らないと言わんばかりにカフェテリアのバーガー等を口に入れていく。

「美味しいんだよ！　こんなに美味しいのは初めて食べたかも」

「初めてって……こんなん、何処にでもあるだろ」

日本に限らず全世界にハンバーガーを中心に出版しているチェーン店と、さして変わらない味付けのバーガーにかぶり付く少女。

航真は注文したコーヒを口に含み、顔をしかめる。うん、自分で淹れた方が美味しい。

「むぐつ、むつ………　そういえばまだ名乗っていなかったんだよ。私はインデックスって言うんだよ」

「……………　枝葉だ」

短く答え、航真はインデックスという少女を見つめる。

ばくばくと食べる少女、インデックス。

インデックスと言われたら目次だと頭に浮かぶが、彼は別の言葉を溢す。

「……………　禁書目録」

「ねえねえ、えだは。おかわりしても良い？」

「食い過ぎじゃないか？」

航真の啖きは聞こえなかったらしく、インデックスは笑顔で食を続ける。

その小さな身体の何処へ料理が消えていくのか疑問ではあるが、とりあえずバーガーの注文を取り、インデックスを見て肩を竦める。

「お前、シスターだろ？ 食材への感謝とかいいのか」

「むっ……天に召します我らが主よ。私は主に忠誠を誓います私はまだ見習いの身だからちよっと感謝を忘れてしまつ時もあるかもなんだよ」

つまりは、さらさら感謝する気はないらしい。最も食べる前にはちゃんと「頂きます」と言っていたので、航真としては言及する気はない。

やがて、満足いくまで食べれたのか、彼女はごくんと飲み込むと笑顔を航真に向けた。

「ご馳走様でした!」

「はい、お粗末様でした」

煙草を加えて火を点けながら答えると、彼は目を伏せる。

「で、お前は何故あそこにぶら下がっていた？」

「うん。逃げてる途中で吹き飛ばされて、歩く教会の防御結界を壊されちゃったからビルの間を飛び移ろうとしたんだけど……」

「随分と八チャメチャな逃避劇だな。で、誰から逃げていた？」

「マジックキャバルだよ。魔術結社……あ、でも学園都市だとありえないって言われるんだっけ……………」

不安げに呟く少女に、航真は嘆息する。

「魔術なら生憎知っている」

「えっ、そうなの？」

「昔、世界を旅した時にな」

魔術。それは科学とはまったく別の超常現象を引き起こすための方式。

科学が才能がある人間に使えるのに対し、才能がない者のみに使える技術。

だが、もしインデックスが魔術サイドの人間だとすると、不可解な事がある。

「魔術サイドの人間がどうしてここにいる？ 本来なら魔術と科学が交わる事は決してないはずだ」

魔術は科学を嫌う。それは崇める主への冒涇だという事なのか理由は知らないが、魔術と科学の領域は決して交わる事はない。

だから上条や藤井といった学生は勿論、教師でさえ魔術という

存在を知る者は少ないだろう。

インデックスは頭上にハテナマークが浮かびそうなくらいに首を傾げている。まるで知らないよ、とでも言わんばかりに。

「……………うーん、わからないかも」

「お前、どこから来たんだ」

「わかんない。気付いたらここにいたし」

そう言うインデックスの表情に嘘偽りはなく、本当に彼女はわからないようだ。

「記憶喪失、か？」

「うーん、多分。路地裏で目覚めた時は、とにかく逃げなきゃって思ったから」

航真はそうか、とだけ呟いてコーヒーカップを掴み口をつける。しかし、いつの間にか飲み終わってしまっていたのか、中は空であった。

「ご馳走様。私、もう行かなくちゃ」

タイミングが良かったのか、本心か、インデックスが言う。

「1人でいる気か？」

「何時までもここにいと、敵が来るかも」

敵、か。

航真は顔を上げて空を見上げる。

「……………平気か？」

寡黙な男は言葉を投げる。

すると少女はくすつ、と笑った。

「さつきも同じ事言われた。匿ってくれるの？」

航真は答えない。

ただ、彼女は少し悲しそうな顔をして、

「じゃあ、私と一緒に地獄まで着いてきてくれる？」

珍しく、航真の表情が強張る。

その言葉の裏にある意味。

こちらに來ないで。

「じゃ、」馳走様…」

インデックスは元気にお辞儀をすると、人混みへとかけていく。

航真はそちらへ目を向けず、とりあえずレシートを見つめ息を

吐いた。

「……………少しは遠慮しろっての」

席から立ち上がった航真は、一度だけ人混みを、彼女が消えた方向を見やる。もはや彼女の特徴的な銀髪を見つける事は出来ず、元より彼女を探す気は毛頭ない。

残念ながら、ただでさえ面倒事があるのに、これ以上魔術等という厄介事に巻き込まれるのはゴメンである。

会計を終えて外に出て、航真は再度顔を上げて空を見つめる。

幾分か時間が立っていたらしく、陽は頭上を通り越しているようだった。

空には少しの雲があるくらいで、天候が崩れる事はまずないだろう。

だが。

航真は歩き出す。禁書目録ちいせきとはまったく反対方向へ、まっすぐと。

人混みを避けて、暗い路地裏へ。

どんなに明るい時間帯であっても、その暗闇に自ら進む者はまっずい。

やがて真ん中くらいの距離に来たところで、航真は立ち止まっ

た。

何か特別だったり珍しい物があるわけではない。あるのは薄汚れた換気扇が回っているくらいである。

にも関わらず、彼は声を上げた。

「尾行が下手くそだな」

「……………気付いているとは、驚きだね」

すつ、と目の前の暗闇から赤い髪の男が現れる。身長は明らかに航真より高い、170くらいか。右目下にはバーコードのような物があり耳にはピアス、加えている煙草はイギリス産のようだ。

黒い服に身を包んだ男は煙草を吐き出し足で消すと、航真を睨み付ける。

「いつから気付いていたんだい？」

「お前がインデックスを見つけてすぐ、といった所か」

「……………なるほど、つまり最初からという事が。君がいたせいで禁書目録を回収出来なかったよ」

「……………回収だと？」

聞き直す航真に、男はああと頷く。

「ああ、回収さ。あれは大切な大切な魔導書を保管しているからね、良からぬ魔術師に確保されたら堪らないからね」

その言葉に、航真の脳裏に先程の少女とのやり取りが浮かぶ。

初対面の人間に対して、いきなし飯を奢らされたり遠慮なしに大量に食ったりと。

だが、それでも彼女は笑った。泣きそうになったり、悲しそう
な顔をした。

「……………あいつは物ではない」

「……………まっ、君がどう言おうが関係ない。君がいたら回収の邪魔に
なりそうだから」

男が右手を掲げると、ぼつと炎が湧き出る。

ここは学園都市だ。超能力で炎を扱う学生などたくさんいる。

だが、明らかに外部の人間が能力を使っている。外部の人間に
能力は使えない。

つまり、この男は。

「魔術師か」

「ああ……ステイル」マグヌス、と名乗りたい所だけど、ここでは Fortis931と名乗ろうか」

Fortis。日本語に訳せば強者。

何てことのない言葉だが、それを発した瞬間に魔術師の気配が一変する。

明らかかな殺意を彼は放つ。魔術師はゲームに登場するような優しい味方の呼称ではなく、れっきとした殺し屋だ。

「魔法名……と言う奴さ。ま、これから死ぬ人間には関係のない事かな」

「……強者……その中に、お前はどんな意味を込めた？」

びっくりと、魔術師の表情が強張る。

「一体、誰に向けて信念を立てた」

「ごうっ、と魔術師の炎が上がった。

ステイルという魔術師の感情に呼応するかのように、猛々しく燃え盛る。

暗いはずの路地裏が明るくなり、換気扇等を溶かす。

そんな非現実リアルな事象を見て、航真は一言。

「……やめておけ」

「何？」

恐れる訳でも抵抗する素振りを見せる訳でもなく、ただ面倒そうに懐から煙草の箱を取り出す。

「その程度の炎じゃ俺は殺せない。せいぜいライター代わりにするくらいだな」

「……………ほざいてる」

魔術師が腕を振り上げ、火球を投げつける。本来ならば炎自体を投げるといふ事は不可能であるのに関わらず、まさしくそう表現するしかない光景が広がった。

そしてそれは、確実に航真へと命中した。炎が燃え上がり、彼の姿を包み込む。

「……………呆気ないね」

つまらなそうに呟き、魔術師は踵を返す。

だが。

「訂正だ。ライターにもなりやしない」

なつ、と魔術師が振り返る。

揺らぐ炎の向こう側、姿を現したのは。

枝葉航真。喫茶店の寡黙なイケメンマスターだ。

「ば、馬鹿なつ……生身の人間が受けて無事で済む炎じゃなかったぞ！」

「そうだな。確かに常識に考えれば、な」

そう吐き捨て、航真は黒焦げになった煙草を放り投げて捨てる。

「ここは超能力者を生み出している学園都市だ。その程度で狼狽えてどうする？」

「……なるほど、そうだったね」

余裕ぶるために笑みを浮かべているが、わなわなと肩は震えている。

「だったら、今のを越える炎で……」

「わからないか？」

遮るように言い、航真は新しく煙草を取り出すと自分のライターで火をつける。

「いくらやっても無駄だ」

「言っじゃないか、ヒーロー気取りの能力者が……人より多少異能ミュータントの力が使えるのがそんなに偉いか!？」

吠えながらも魔術師は手に炎を集束させる。

だが、航真はただため息を吐くだけだ。心底つまらなそうに、魔術師を見つめる。

「どれだけ奮闘した所で徒労に終わるだろうが……」

言葉を捨てるように吐いた航真は、煙草を加えたまま地を蹴った。それは魔術師という世界から見ても恐ろしいくらいに早く、彼は間合いを詰める。

魔術師が炎を投げつけた時には、すでに航真は懐に入っており、炎など掠りもしなかった。

魔術師が両腕を交差させ防御するが、航真は構わず腕を振り上げる。アッパーのように繰り出された一撃を受け止め、魔術師は少しだけ吹き飛ぶ。

地面を滑りつつ、魔術師は両手を広げるような形で炎を形成した。

「灰は灰に……塵は塵に……紅十字の吸血殺しっ!」

交差するように炎が通り、航真へと走る。狭い路地裏で横へと避ける事は不可能であり、地面やパイプが熱で溶ける。

だが、それを航真は避けた。

上へと跳躍する事で。

炎の波を越える、ビルの2階、下手をしたら3階にまで届きそうな高さに跳躍した航真は、ギリリと睨み付ける。

その瞬間。魔術師の、ステイル＝マグヌスという人間の脳裏で激しく警鐘が鳴り響く。

この男は、ただの人間ではないと。戦ってはいけない、化け物であると。

「くっ……」

何らかの能力を有しているのだろうか、もしかしたらこの跳躍力が能力に関係しているのかもしれない。

だが、それを確かめている暇はない。ステイルは炎を足元目掛けて放つ。

着弾した炎はたちまち白煙を巻き上げ、視界を瞬時に奪う。

着地した航真が顔を上げた時には、一帯には白煙が立ち込めていた。

「……………逃げたか」

吐き捨てるように呟き、航真は目を細めて周囲を見回す。

魔術師と名乗った男の気配は完全に消え失せ、航真は息を吐い

て空を見上げる。

「……………禁書目録。魔術師……………」

航真が呟いた時、携帯電話が震えた。ポケットに手を伸ばして画面に目を落とす。

そして再び顔をあげて、航真は低く呻いた。

「……………何を考えているらアレイスター」

途中から訳のわからない講義のような物が始まったが、それも夕方頃には終わって木山は立ち上がり由樹を見やった。

「ご馳走様。中々美味しいコーヒーだったよ」

「また来て下さいな」

笑顔で返事をしながら白衣を手にし、黒子達を見やる。

「君達もありがとう。久々に教鞭を取っているようで、楽しかったよ」

「いえ、捜査にご協力頂けるのですから……って、教鞭？」

「先生でしたんですか？」

「……ああ、昔ね。じゃ、何かあったら連絡をくれ」

そう言つて木山は店から出ていく。

去つていった彼女を見届け、興味深い話しが聞けたからか初春は目をキラキラさせながら黒子を見る。

「さっそく資料を整理しないといけませんね」

「ええ、けど……」

黒子は怪訝そうに呟く。

「何か変な人ですの」

「白井さんよりですか？」

即座に茶化してくる初春を軽く睨み付けてから黒子は由樹へと振り返つた。

「休業日なお邪魔して申し訳ありませんでしたわ」

「気にするな。する事がなかったから良い暇潰しだ」

彼女達が飲んでいたカップをトレイに載せて、由樹は笑みを返す。

厨房へと戻っていく由樹を尻目に、黒子は初春を見やる。

「さて、支部に戻りますわよ」

「はいっ！ あっ……」

元気に返事をした所で、初春はぱつと振り向く。

いつの間にか初春も彼女達の会話に参加してしまい、一緒に来ていた佐天を無視してしまっていた。

「う、ごめんなさいっ。ずっと話しに夢中になってしまって……」

だが、当の彼女はカウンターテーブルに突っ伏して、くーくー可愛らしい寝息を立てていた。

「……………寝てますわね」

「いいよ。俺が面倒見とくから、仕事に行ってきた」

起こそうとする初春に言って、厨房奥からタオルを取り出して佐天にかける由樹。

一瞬どうしようか迷った初春だったが、手詰まり状態だった事件がようやく進展しそうだからか、佐天を任して彼女達は出ていく。

「むっ……この反応は……びりびりっ！」

「ちよ、お姉様どちらへ!？」

「ダメですよ白井さん。資料を整理しようって言い出したの白井さんなんですから」

「初春!? どちくしょう、おのれ初春っ！」

聞いていて楽しい会話をしながら彼女達は店を後にし、由樹は残された少女を見やる。

すーっ、と寝息を立てる佐天涙子に、由樹は言った。

「下手な狸寝入りだな」

「……………てへっ」

むくりと起き上がった佐天はぶりっ子ぶった仕草を見ると、頬杖をつく。

「だって私だけ無関係ですもの」

彼女の呟きに、由樹は寂しさを感じた。

親友である初春は風紀委員で、同じ一般人であるはずの御坂美琴は学園都市で7人しかいない超能力者^{レベル5}。

彼女だけが、ただの人間。ただの少女。

そこにあるのは疎外感。皆は優秀なのに、自分だけ劣化しているという現実。

「……………あーあ、『レベルアップ』幻想御手レベルアップがあれば私でも能力者になれたのかなー」

さりげないようなわざとらしいような、そんな感じで言いながら彼女は伸びをする。

由樹がぱさりと落ちたタオルを拾い上げた時、カランカランとドアが開閉した音が響いた。

「あら、よく会うわね」

「結標さん……………」

昨日今日と連日で会うとは思っていなかったのか、珍しく巨乳先輩系女子高生は怪訝な表情をしながら店に入る。

「というか、外の看板が見えんのかい」

「あーあーキコエナイ」

問答無用で入り、佐天の隣に座って足元に目を落とす。

「あら、何か落ちてるわよ」

「えっ……………?」

間抜けな声で反応し、佐天も見やる。

結標が拾い上げたのは、紐で繋がれているありふれたお守りであつた。

学園都市は科学の街で、お守りというオカルト的な物は信用されていない。

第10学区にはちゃんとした墓場はあるが、それは形式のような物であるため宗教的な意味があるわけではない。神社もあるが然り、である。

結標な頭を下げ、佐天はお守りを見つめる。

そして、ぽつりと。

「……………母って、迷信深いです」

「えっ?」

由樹は2人の前に水を差し出し、その語りに耳を傾ける。

佐天の母親は、最後まで彼女が学園都市へ行くのは反対だったそうだ。学園都市に行けば才能が見出だされるかもしれないが、そのためには薬等で脳を弄る必要がある。

だけど、娘が行きたいと望むなら、それを親の務めだ。

だからせめて、無事でいるようにと。

「……………良い母親だと思うけど」

話を聞いたただけだが、そこら辺に疎い結標でさえそう言える人物像である。

だが、彼女は首を横に振った。

「……………その期待が重い時もあるんです」

なぜなら、いつまで経っても無能力者^{レベル}。この街ではその言葉だけで、落ちこぼれの烙印を押されてしまう。

その気持ちは、同じ無能力者^{レベル}である藤井や上条であつても読み取る事は出来ないだろう。彼らはレベルなど気にする性格ではないし、何より真の無能力者ではない。

「……………そう、嫌味に聞こえるかもしれないけどね」

結標は決して佐天涙子に遠慮する事なく、きつぱりと言った。

「私は能力なんて欲しくなかったわ」

「……………え？」

思わず佐天はまじまじと結標を見やる。そんな馬鹿な、とても言うように。

「私の能力、『座標移動^{トポポイント}』。触れる事なく物体を転移させる事が出来る能力なだけどね」

ひよい、と彼女が腕を振るうと、由樹が用意していたお菓子の載った小皿が佐天の目の前に出現する。

わつと驚く佐天は頭を下げて、何か言いたげな由樹に苦笑しながらお菓子を頂く。

「凄い！ 触れないで物を転移させるなんて」

つまりは白井黒子の『空間移動』テレポートよりも優れた上位種ということだ。

まるで子供のように目を輝かせる少女に、結標はくすりと笑った。

「ありがとう。アンタは素直にそう言ってくれるから楽だわ」

でもね、と彼女は区切って呟く。

「一見していた便利そうな能力でも、使いようによってはこんな事も出来るのよ」

今度は何をするのかと思えば、結標は一気にコップの水を飲み干す。

そして、お菓子を載せていた小皿からお菓子をどけると、指をパチンと鳴らした。

すると、その小皿は転移し、コップを割るように突き刺さった。

それを見て、佐天ははっとなる。空間転移というのは、転移先

の物を押し退けて移動するという事だ。ただの空間で転移するならば、空気を押し退けるだけで大した怪我はないが、その先が何かの柱だったりしたら。

「気付いたみたいね？　そうよ、こうやってコップを割る事も出来る」

ずるりと、割れたコップが落ちてテーブルに転がり、彼女はそれを手に取る。

「これをアンタの首に転移させれば、簡単に殺せる」

っ、と佐天は息を飲む。そう、彼女の能力は簡単に人を殺せる物なのだ。

彼女に限らず学園都市の能力者達は、異能力者レベル2くらいまでなら問題ないが、大能力者レベル4になってくるとその力は甚大な物になる。

仲良くなったばかりの御坂美琴だって、本気を出せば簡単に人を殺せるだろう。

「私はこんな化け物になりたいなんて、思わなかったわ」

「結標さん……………」

悲しそうに言う結標。だが、けれど。

「化け物なんかじゃないです」

はつきりと、佐天は言った。

「だって、化け物だったらそんな悲しまないですよ」

「アンタ……」

純粹に、心の底からそう言う佐天に結標は目を丸くする。

その一部始終を見ていた由樹は、その空気を壊すように笑った。

「ふふっ……純粹じゃないか」

「えっ、だってそうじゃないですか。昨日会ったばかりですけど、そんなに悪い人じゃないくらいわかりますよ」

「かといって善人でもないけどね。私が言いたいのは、そうまでして化け物になりたいの？」

幾らか話しが脱線してしまっただが、要するに結標が言いたいのはそういう事だ。

彼女は能力のせいで大怪我をした事もあるし、そのために非人道的な実験も目にしてきた。

一般の子供達にとって憧れなのは結果であって、過程ではない。その過程を知って、なおも求めるのか。

だが、結標の言う過程というのも一般には知られていない、闇の世界での話だ。表だけしか知らない彼女にとっては、やはり別の物に映るのだろう。

「まあまあ、視点つてのはいくつもあるから、どっちが正しいって
言えないけどさ」

遮るように言っつて、由樹は佐天を見やる。

「何も能力者になる事が、期待に応える事とは違うんじゃないか？」

「……………そう、でしょうか」

「そうよ。生きてく上でこんなの墮落にしかならないんだから。そ
れよか料理出来た方がよっぽど能力者よ」

冗談めいていて、けっこう本気で告げる結標。

だが、そうだとしても。

「……………やっぱり」

そう簡単に諦められるものじゃない。

それだけ能力というのは、手に入れるには壁があるのだ。

インデックス
禁書目録。

最初は偽名かと思ったが、それがベランダに引っ掛かっていた少女の名である。

そのシスターさんは魔術結社という胡散臭い組織から逃げている途中らしかった。

魔術なんてただの電波かと思っていたが、彼女が着ていた『歩ふくく教会』は右手で触れた瞬間に木っ端微塵になった事から、魔術かはともかくそれが異能である事に違いはない。

彼女はそのまま家を出ていったが、（ビリビリ中学生の襲撃を回避して）補修から帰ってきて、見た光景は。

背中を切り刻まれたインデックス。

そして、現れたステイル「マグヌス」という魔術師。

インデックスを回収すると言った男に、ふつふつと自分の中で

怒りが沸き上がるのを感じる。

なぜ、これだけの現実^{リアル}を前に自分の正義を名乗る事が、信じられなかった。

だが、実際の問題、ただの高校生に殺しを経験してきた男に勝てる道理などあるわけもなく、魔術という力で作られた炎の魔人に敗退を余儀なくされる。

本当に不幸というか、厄日というか。

インデックスとの繋がりは、ただ家に置き忘れたフード。

それだけだ、どこにも命を懸ける理由はない。

「……………ふざけんじゃねえ」

だが。

別れる直前の、相棒の言葉が脳裏を駆け巡る。

『目の前で困ってる人がいて、手を伸ばす道理はねえかもしれないけど、それが手を伸ばさない理由になりはしないだろ』

そうだよ、と立ち上がる。

手を伸ばすのに、理由なんていらぬ。どうしてもいるなら、助けたいで十分じゃないか。

だから、走った。寮のスプリンクラーを利用して、『魔女狩りイノケンテの王イウス』を作り出しているルーンと呼ばれるカード、術式を破壊する事に成功。

炎の魔神を退け、あとは魔術師だけ。

上条当麻は、自身の右手を見やる。変哲のない右手。何の異能を打ち消す事しか出来ない右手は、テストで100点を取る事も女の子にモテる事もないし、インデックスによれば幸運も弾いてしまっらしい。

だけど、この右手はとても便利だ。

何せ、目の前のクソ野郎を思う存分ぶん殴る事が出来るのだから。

222

『…………、じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？』

「そつだよな…………地獄の底までついて行くのが嫌なら、地獄の底から引きずり上げてやるしかねえよなあっ！…！」

彼の幻想殺しイマジンプレイカーが魔術師を捉え、その巨体を吹き飛ばした。

肩を上下させる彼は、すでに自身が大きな運命に巻き込まれている事を感じていた。

それでも彼は止まらない。もう決めたら。

インデックスを守る。

それが上条当麻が『死』ぬ事になったとしても。

6話・何も能力者になる事が、期待に応える事とは違っんじゃないか？（後書き

地震で被災地の方々に何か出来ないか考えて、結局出来たのは募金だけ。しかも300円という小さな金額……

それでも向こうの人たちにとって力になれば………

今回から本格的に禁書の本編と並行していきます。と言っても主はレールガンの方で禁書に移って行くのは3巻からになってくるでしょう。

結標淡希は一応、ヒロインです。なので本来出会うはずのないキャラと出会ったり、絡むはずのない事件に絡んだりします。

あ、ちゃんとレムナント事件では暴れますが。

では、ここらで被災地の方々の無事を祈りながら………

応援の方、よろしく願います。

7話：外れた邂逅（前書き）

今回はけっこう短いです。

7話：外れた邂逅

和気あいあいと話していた結標が、突然言い出した。

「佐天の料理が食べてみたいわ」

「いや、いきなしだな本当に」

呆れるくらいに唐突に言い出す少女に、由樹は呆れの言葉を漏らす事しか出来ない。だが、実は彼も佐天料理には興味があり、一度は食べてみたいと思っていたのだ。

だからと言って、食材不足の今に言い出さなくても。と、申し上げたいのと言う事が出来ない由樹をよそに、2人だけで話しは進んでいってしまう。

「じゃあ、今日ウチに来ちゃいます？」

「何言ってるの。ここで作る事に意味があるんじゃない！」

「じゃあ航真が帰ってくるのを………って」

半ば乱暴な意見もいつもの事なのでスルーし、彼女達の要望を満

たせるような行動を提示しようとしていたが、由樹は言葉を停めて携帯電話を取り出す。

「……………あー、航真は帰ってこれなさそうだな」

「えー、じゃあ買いに行きましょう」

がたりと立ち上がり、呟く結標。

「……………えー」

「ほら、行くわよ。ちょうどいい夕飯時でしょうが」

指をぱちりと鳴らすと、ひゅんっと由樹が厨房から転移させられる。

不満そうな顔をしながらも由樹はエプロンをとり、適当にカウンターのうへと放り投げた。

「なら、行くか」

「はいー!」

もはや佐天はノリノリであり、結標ともども先に店を出て行く。

「しゃーない。19学区まで行くぞ」

学園都市は23学区によって分かれている。その中で主に彼らが発注した物が届くのは物流センターのあるが、由樹が自分の足で行く時には常連となっている市場があるのだ。

魚はもちろん野菜や肉なども取り扱っているが、それらは全て学園都市製である。科学の街に相応しい農薬等が使われたりしているので航真は利用しないが、由樹はその空気が好きだった。

『アンティック珈琲店 - カフェ -』の横には4台の駐車スペースがあり、そこに止まっているワゴン車は由樹の所有物だ。特に外装を改造したり飾ったりしている訳ではない無骨なワゴン車に2人を乗せて、由樹は車を出す。

学区と学区の間には別段、検問のような場所はない。さらに言えば大半が学生なので、車を利用するのは教員や研究者といったくらいしかないなく、スムーズに進んだ。

助手席に座りながら、ふと結標は思い出したように呟く。後部座席の佐天には聞こえない、小さい声で。

「昨日、”あの男”が上機嫌だったわ」

その言葉に、由樹は一瞬だけ目を細める。

「何か起きてるわね。この学園都市で……………」

「……………さて、な。佐天、何を作るか決めてるか？」

それだけで終わらせ、由樹はわざと明るい声で佐天に呼びかける。

彼女はその事を考えていたのか、顔を上げて再び考え込む仕草を見ると、笑顔で頷いた。

「はい。八宝菜にしてみようかなって」

「あら、いいじゃない」

笑顔で頷く結標に、佐天は笑顔で話しを盛り上げる。好きな食べ物やファッションの話題など、もはや由樹が入れない空気になってしまっていた。

もとより、女の子とはそういうものだ。そう自身に言い聞かせ、車を走らせる。

すでに落ち始めていた陽はほとんど落ちてしまい、反対側からは夜空が広がりつつある。

まだ夕方くらいだというのに広がる夜空は、もうじこ夏休みを知らせるかのようだった。

市場では人々で溢れており、またその人達にとって由樹は顔なじみであった。気さくな性格なばかりの人々なので、由樹が女の子を連れて歩いているという事だけでわいわいと騒ぐくらいである。

「つたく……………」

多くの人たちからおちよくられたりしながらも食材を買う事に成功した由樹は、参ったように会計を済ませた食材を買い物籠からエ

コバックへと移して行く。

その姿を目にして、佐天はしみじみといった感じで呟いた。

「由樹さんって、本当人脈広いですね」

「まあ、ああいう性格だしね」

おじさんおばさんに囲まれつつもホイホイ言葉をスルーしていたりしている由樹に、結標は頷く。

景山由樹という男からは威圧感を感じられない。航真と違って上から押さえつけるようなものではなく、全てを受け入れてくれる抱擁の優しさか。

あの第4位と第2位ですらも反抗させないほどの器は、どの人間が認めているものだ。

自分達より10年長く生きていた彼は、教師たちとは違った大人に映った。大人のような合理的な思考を持つが、子供のような無邪気な視線で話しを聞いてくれる。

「ほら、2人とも。帰るぞ」

大人のようにも子供のようにも思える男に呼ばれ、2人は彼へと続く。

ワゴン車へ乗り込み、3人は市場を出発する。

来た道に戻る頃には、完全に落ちてしまっていた。時間帯的にも

車の交通量が増え、道端にも学生の数が多くなってくる。

「そついや、寮の門限は大丈夫なのか？」

思い出したように由樹がバックミラーで佐天の顔を伺いながら尋ねる。結標は暗部としての立場から基本的に活動は夜なので、ほとんど学生寮ではなく暗部が用意した部屋で暮らしている（らしい）。だが、一般人である佐天は列記として寮生活だ。

学園都市の最終下校時刻に合わせて寮にも門限が定められており、男子ではなく女子ならばなおのことである。

「大丈夫です。ウチ、別段そこまで厳しい訳じゃありませんから」
にこつと笑う佐天にそうか、と頷き返す。

『アンティック珈琲店 - カフェ -』の近くまでようやくやって来たところで、何かに気付いたように由樹は目を細める。

まっすぐ直線道路、その途中に『アンティック珈琲店 - カフェ
-』はある。

「……………さつき、何かが起こってるって言ってたな？」

さきほどの答えなかった言葉に、突然由樹が呟く。

「その通り、だな……………アレイスターの野郎、どうやら”プラン”
つてのが動き出したみたいだぜ……………」

言っている意味がわからず首をかしげる結標だが、彼の視線を辿

り景色を捉える。

そこには、『アンティック珈琲店 - カフェ -』の入口の階段に座りこんでいるツンツン頭の少年。

イマジンプレイカー
幻想殺し、上条当麻がいた。

魔術師を殴り飛ばした後は、インデックスをなんとか下まで運び、傷の手当てをしようとした。だが、インデックスは正式な学園都市の住人ではないため、病院での治療は受ける事は出来ない。

ならば、インデックスが記憶している魔導書に回復といった治癒の魔術を利用すれば良い。ポピュラーな考えかもしれないが、RPでも魔術だの魔法に治癒の術が存在するはずだ。

だが、それは上条当麻には使えないとのこと。それが幻想殺し《みぎて》のせいだけではなく、この学園都市全員　つまり、能力開発を行った学生では使用した瞬間に脳が吹き飛ばらしい。

そもそも魔術は超能力者のように”才能”がある人間ではなく、”才能がない”人間のために作られた方式だそうだ。

だが、だからといってこの出血量を放っておくわけにもいかない。

そこで上条が思い付いたのは、担任である月詠小萌に任せるというのはどうだろうか。外見は小学校に通っているとわかれても不思議

議ではない幼児体型ながらも列記とした成人である彼女ならば、能力開発は行っておらず魔術は使えるのではないかと。

青髪ピアスに小萌の住所を教えてもらい（何故知ってるのかは不明だが）、押し掛ける形で侵入。

だが、術式を展開するために幻想殺し《上条当麻》は邪魔ではない。せっかく展開した術式を右手で破壊されては意味がないからだ。

だから、上条は小萌にインデックスを任せては走った。

どこへ行きたいのかわからず、ただがむしやりに走ったはずだ。

「それで、行き着いたのがここってわけか」

佐天が白菜を斬っていく音を聞きながら、上条に訳を聞く3人。だが、結標も佐天も驚いた、というよりも信じられないといった感じの表情だ。

「魔術……そんな曖昧、というか胡散臭いのが存在するの？」

「実際に十字教つてのは存在するし。学園都市にはないけど、確かに外にはオルソラ教会つてのがあったし。けど、魔術つてのは俺も初耳だっけど」

科学から見出された超能力という事象に干渉する方式とは異なつた、才能がない人間が見出したという方式。

「俺も信じられないけど、超能力とは明らかに違った能力を使っていた。右手でかき消せたから、間違いない」

「イマジンプレイカー幻想殺し……………異能を打ち消す右腕なんて聞いた事ないわよ」

「でもでも、都市伝説に”どんな能力を打ち消す右腕”っていうのありましたよ！ あれ、上条さんの事だったんですね」

都市伝説そのものに出会ったからか、佐天は若干興奮気味である。対する結標は魔術同様に胡散臭げな表情。

「信じがたいわね」

「なら、試しに上条を転移させてみなよ」

由樹の言葉に結標は眉をひそめると、指をパチリとならせる。本来ならば上条の身体は瞬時に転移され、逆さまで床に倒れているはずである。

だが、何事も無いように彼の身に変化は起きない。変わらず椅子に座っているだけだ。

「……………マジ？」

「マジだよ。そいつの右手、イマジンプレイカー幻想殺し……………たとえ10億ボルトの雷だろうが破壊する魔手だろうが、灼熱の業火だろうが……………それが異能の力によって生み出されたのなら容赦なく打ち消せる」

「……………レベル5超能力者が万の天才だったら、アンタは万の天災じゃない」

右手の性能を聞かされて、その凄まじさを知って結標だけでなく佐天もが驚きの表情になる。まじまじと見ても何の変哲のない右腕だが、今を見せられては嘘だと思えない。

都市伝説、どんな能力を打ち消す右腕を持つ男は実在したのだ。

「……………ま、けどその話したとインデックスっていう子は助かったんだろっ?」

その問いかけに、少年は頷く。だが、その表情は決して明るいものではない。

「……………俺は、助けられたのでしょうか?」

「えっ?」

突然の呟きに、佐天が料理の手を停めて首をかしげる。

「インデックスを助けたつもりでも……………本当に助けてあげれたのか」

地獄の底まで付いてきてくれる?

そう尋ねてきた彼女に、上条は肯定する事が出来なかった。だから、地獄の底から引きずり上げてやるしかない。そう決めて、魔術師を殴り飛ばした。

だが、そんな右手でもインデックスの傷を癒す事は出来ずに、むしろ邪魔になってしまふ無力な彼は立ち去る事しかできなかった。

その気になれば、神様の奇跡システムだって打ち消せるくせに、誰一人守れない右手。

それなのに、この様なのにインデックスを助けたと言えるのだからか

「……その子はアンタに感謝してるんじゃないの？」

「……… わっかんねえ。先生に任せてあるから大丈夫だとは思
うけど」

「そうじゃなくて、その子を魔術師の手から救ったんでしょ？」

「………一応、そうだけど………でもあいつ、なんだか傷を負つたらわけわかんねースーパーモードみたいになっちまって、怪我でそれどころじゃなかったし………」

傷を負ってステイルの魔術「魔女狩りの王」イノケンティウスを打ち破る方法を教えてくれたのは、インデックスだった。朝方上条のベランダにへばりついていた少女とは思えないほどの、まるで鉄のような冷たい瞳をしたインデックス。

辛そうに語る少年を見て、結標は由樹を見やる。彼女は本来、表の人間と関わりを持つ事が出来ない。佐天と関わっていられるのは特例というか、佐天がさして能力を持っていないからだ。

上条当麻……いや、あらゆる能力を打ち消す右手というのであれば、微かに聞いた事がある。胡散臭い金髪男を理事長の部屋へ運ぶ時に、そんな存在の事をちらりと聞いた覚えがある。

学園都市理事長にとって、このひよろりとした男が重要なファクター。

だからこそ、結標には何も言えない。彼に対して思い入れもないし、何か言えるほど達観してるわけでもない。

なんにせよ、干渉出来ないがこんな重い空気の中にあまりいたくない。かといって離れるわけにもいかない。

「大丈夫ですよ！」

能天気のような、少女の声が響く。

八宝菜を皿に盛りつけながら、佐天は笑顔で宣言した。

「だって、上条さんはインデックスって子を助けようって思って戦ったんですね？ で、魔術師を倒した」

にこりと、優しく。

「だったら、助けられたんじゃないですか！」

自信満々に、根拠もなしに宣言しながら佐天は盛り付けた八宝菜を差し出した。

「どうぞ！ 出来たんで食べてください」

「あ、ああ……………」

「ぷつくく……………いつは説教してる身が、説教されるとなんてな」
愉快そうに笑い、由樹は腕を組みながら厨房の中に入る。

「そういう事だろ、簡単な話し。結果としてどうあれ、お前が立ち上がったからインデックスの怪我を治す事が出来たんだからな」

詳しい事はわからない、踏み込む事も出来ない。

ただ由樹にも結標にも、ただの少女である佐天にもわかるのは。

「お前が、ちゃんとインデックスを助けたんだ」

「……………そう、かな」

やっと、上条に笑みが広がる。

荷が下りたように笑みで

「……………ふーん」

結標はじつくりと上条当麻を見詰める。自分と同一年くらいでツンツン頭の冴えない男。

だが、その冴えない男が魔術師というものを撃退したという。

「うめえ！　こんなうめえ八宝菜！　結標、お前も食べてみるって
！」

「一応、年上なんだけどね……………」

呆れた顔をしながら、結標は言われた通りに八宝菜を頂く。

面白そうな少年。それが結標淡希の感想だ。

イマジンプレイカー　ムーブポイント
幻想殺しと座標移動。

本来出会うはずのない人物が出会った。

だが、それでも彼が『死』んでしまうという運命は変えられない。

なぜなら、彼女の『救い』と彼の『死』は等価値なのだから。

7話：外れた邂逅（後書き）

はい、というわけでお送りしました。

今回はまえがきにある通り長いです。

だいたい目安として文字数が1万〜1万2、3000くらいで執筆しているのですが、少しストーリーの軸関係で、原作で言う間章みたいな感じで入れました。

最初に言っておきます、自分凄くあわきん大好きです！

なので、彼女裏方の人間ですがどんどん出します！ 一応魔術の知識だけは取り入れたり、多分色々活躍させちゃいます！

この子にかぎったことではありませんが、多数の暗部キャラはキヤラ崩壊っていいほど良い奴になってくるはずですよ。

それでも原作のストーリーには忠実に沿っていくよう頑張って執筆していきます！

ではでは、感想レビューその他よろしくお願ひします！

8話・善悪の線引きへライン

刑務所のように黒塗りの分厚い扉から出て、藤井は雲のない空を見上げる。

本来、アンチスキル警備員によって捕縛された学生が出所するのにはそれなりの手続きと時間が必要のだが、今回はかりは違った。

『レベルアップ幻想御手』。

夢のような噂のアイテムが、実在するという情報をシヤツジメント風紀委員へ情報を問い合わせたところ、返答はあるらしいという事だった。今だ実物を発見したわけではないが、バンク書庫とレベルがかみ合わないという事件が多発し、捕まった学生が『レベルアップ幻想御手』を使った」と供述したらしい。

だが、その学生の手を持つを調べても『レベルアップ幻想御手』らしき物は見つからずに、その学生も意識不明となって病院へ搬送されてしまったそうだ。

浅野和美 『レベルアップ幻想御手』を使用していたらしく、同じく意識不明に陥ったらしい。

学生が原因不明の重体という事件が相次ぎ、藤井の相手をしてい
る暇などないという事で釈放されたのだが。

さて、と思索する。上条は相変わらず補習だろうし、藤井もその中に入っているだろう。だが、顔を出してしまえば小萌にありだこーだと言われ、毎日が補習漬けになってしまう。

小萌には悪いが、今は自由に行動させてもらおうとするか。

そう決めると、藤井は歩き出す。

目指すは第10学区。通称ストレンジ。

学園都市にとって吹き溜まりが集まる、破落戸の場所である。

正直な話し、まだ佐天は能力を諦める事が出来なかった。

昨晚、上条という都市伝説そのものに出会したが、彼にだって幻想殺し（イマジンプレイカー）という立派な能力が備わっており、そのおかげで魔術師という途方のない相手を倒せたのではないか。

結局は、凄い人には凄い能力があるのだ。

別に凄い人になって誉めてもらいたいとか、誰かを助けるためといった理由があるわけではない。

大層な理由はないが、能力それが欲しくてここへ来たのだ。

才能に否定されたとしても、やはり欲しい物は欲しかった。

航真ベルアップバーから、より正確には介旅という事件犯から渡ってきた『幻レ想御手』。これを使えば能力者に。だが、代価として意識不明に。

まさしく麻薬というべき代物だ。甘言で子供を誘惑して、夢が見れるのは一瞬だけ。すぐに訪れるのは悪夢。

だが、だけど、そうだけど。まるで言い訳をするかのごとく、そんな言葉が頭を過る。

手放してはいけない。またとないチャンスだから。

かといって、使う勇氣もない。宙ぶらりんな状態。

中途半端な気持ちで彼女の中で駆け巡り、使う事も誰かに話す事も出来なかった。

休日の昼前だが、初春は風紀委員シヤッジメントの仕事で出払っているとの事。何でも他の支部が捕まえた学生の中ではっなかりと『幻想御手レベルアップバー』を使ったと供述した者が出たそうだ。

ネットの情報からも高価な値段で取引されているのが確認されたため、風紀委員シヤッジメントが捜査するという。

朝一で初春から教えてもらった情報をまとめてみても、『幻想御手レベルアップバー』というのは、手に入りにくいらしい。

捨てられないし、使う事も出来ない。

家においても気分が落ち込んだりするだけなので出歩いてみたのだが、結局考える事は同じであった。

いつの間にか家からたいぶ離れてしまっただけなので出歩いてみたのではない裏路地に近い場所に佐天はいた。裏路地と称しても廃ビルがちらほらと建ち並ぶ場所で日陰はなく、夏の昼前からたむろしているスキルアウトの姿は見かけない。

と、思っていた時だった。

「『幻想御手レベルアップバー』……譲ってくれるんじゃないのか!？」

突然、響いた声に佐天はびくりと肩を振るわせた。

声は先の方から聞こえ、彼女は駆け足で曲がり角へ行き、顔を覗かせる。

そこには3人のスキルアウトが、学生に詰め寄っていた。こんな人気のない場所で、それらしい人間が貧弱そうな学生を囲むなど、想定される事はろくなことではない。

「やばっ……！」

明らかかな場面に出会し、佐天は恐る恐る首を引っ込める。

とにかく警備員アンチスキルが風紀委員ジャッジメントに連絡しようと携帯電話を取り出し、

バッテリー切れの音に顔を凍らせる。昨晩はずっと『レベルアップ幻想御手』をどうするか悩んでいたので、携帯電話を充電しておくのを忘れてしまっていたらしい。

「ど、どうしよう……」

誰かに知らせようにも、連絡手段はない。止めに入りたくとも、黒子や結標のような能力を持っているわけでもない。

それに相手は巨漢で、非力な自分など一捻りだろう。

だから、今出来る事は。

「……………しょうが、ないよね……………」

佐天は踵を返し、その場から逃げるように立ち去る。

ついこの前まで小学生だった自分が、いかにもといった風貌の相手など出来るわけないのだ。

だから、これは仕方ないのだと、自分に言い訳して。

手渡された資料の分厚さを見て、黒子は顔をしかめて初春を見やる。

「喧嘩売ってるんですの？」

「それだけ取引現場が多いんです。他の人に比べて少ない方なんですから、頑張ってください」

資料を渡してきた初春はというと、普段通りに振る舞っているが、疲労がかいま見えた。

昨日、『アンティーク珈琲店 カフェ』から支部へ来て2人で資料を纏めたりして、黒子は途中でダウンしたのだが初春はずっと起きていた事を思い出す。

「……しよがないですわね。早く終わらせて『アンティーク珈琲店 カフェ』に行きましょ。頑張ったご褒美に奢って差し上げますわ」

「ホントですか！？　ならアクセル全開で振り切っちゃいますよ！」
何とも単純思考というか、それだけで頑張れるのだから人間とい
うのは凄いかもしれない。

まるでオーラを纏ったような錯覚を見せる初春に苦笑を浮かべ、
黒子はふと思いついたように言った。

「そういえば、昨日の虚空爆破事件シンクロナイトの日にちと同時に起こった火災
の件はどうなっているんですの？」

「ああ……男子寮の火災ですか」

あの虚空爆破事件シンクロナイトが起きた夜、第7学区の男子寮で火災が発生。
その近くの部屋のドアノブが溶けたりしてしまった事件だ。

「その部屋の学生の無事を確認しようにも、中にはいなかったそう
です。学校にも連絡したら、うち1人は担任の先生宅にお邪魔して
るそうです」

「もう1人は？」

「連絡がつかないと聞いてます。妹さんに聞いてみたら『まあ兄貴
の事だから心配は要らないだろー』との事です」

「……………誰が担当したんですの？」

「支部長です」

その言葉に、黒子は目を瞬かせる。

どの支部には支部長というリーダーがいるが、ここの支部長は滅多に顔を出さない。彼自身大学受験を控えている身なので、必然と固法が指示しているのだ。

黒子でさえ直接会話した事はないその支部長が、夏開始前のこの時期に事件に乗り出すとは。

「珍しい事もあるんですの」

「さあ……とにかく、白井さんは『レベルアップ幻想御手』を」

「了解ですの！」

強く返事をして、黒子は飛び出していく。

外に出て見上げた空は晴れであったが、いたる所に黒い雲が見える。

一雨が来る、と予想して、黒子は資料の場所へと『テレポート空間移動』した。

逃げても良かったけど、だけど。

「……………や、止めなさいよ！」

「あア？」

ボコボコにしていた肥満気味の学生から手を放し、3人のスキルアウトは振り向く。

佐天は恐怖で泣きそうになるのを堪えて、強気に言い放つ。

「あ、アンチスキル警備員に連絡したから……………もう止めなさいよ！」

もちろん嘘つぱちだ。バッテリーが切れた携帯電話はもちろん、周辺には電話ボックスすらない。

「おおう？ ガキのくせにしゃしゃってんじゃねえぞ！」

俯いて目線を反らしている佐天の言葉など、嘘だと言っているようなものだ。スキルアウトは男子学生から標的を変更する。

と、その中の歯並びが悪いスキルアウトは佐天の眼前まで近寄ると、おもむろに彼女の髪の毛を掴んだ。

「痛っ……!!」

「力のない奴が、偉そうに指図してんじゃねえよ」

ずきりと、彼女の心が痛む。

そつだ、どんなに勇気を振り絞った所で、結局は何も出来ない。

目の前で行われている悲劇を、止める事も出来ないのだ。

その時、カランカランと空き缶が転がる音が響いた。

「貰いの力を自分の力だと勘違いしている輩に、彼女を責める資格はありませんわ」

少女はいつもと違い、怒っていた。当たり前だ、友達が教わっていたのだから。

ピンクのツインテール髪が風で靡き、彼女は名乗りあげる。

「ツインテール風紀委員ですの」

白井黒子の登場に、スキルアウト達は若干困惑の表情を浮かべるが、やがてにやりと笑い標的を彼女へ変更する。

まるで復讐する相手が見つかったように。

「……………風紀委員ジャッジメントお……………俺達はずっとテメエらの影にびくびく震えてたんだあ……………」

彼らスキルアウトは基本的に無能力者（レベル0）であり、どんなに力を持ってしても能力者である風紀委員ジャッジメントに勝てる事はない。

最後には地べたに叩きつけられ、そのまま冷たい独房へと連れていかれる。

だから、決めていた。

「能力ちからを手に入れたら……………風紀委員テメエらに復讐するってなあっ！」

叫び声を上げながら、スキルアウトの1人が片腕を振り上げる。まるで呼応するかのごとく、周囲に散乱していた土管や工事の看板が浮かび上がる。

学園都市で最もポピュラーな能力の1つ、『念動力サイコキネシス』だろう。

浮かび上がったそれらは、当然生身の人間にぶつけければ無事ではすまない威力を孕んでいる凶器だ。

それをスキルアウトは躊躇う事なく、黒子へと投げつける。

当たれば重傷間違いなしの攻撃。

だが、黒子の姿は眼前にはなく、スキルアウトの背後に立っていた。

「なっ……………」

「いくつものガセネタのせいでたらい回しにされたあげく、やっと辿り着いた現場で友人が暴行を受けていたのですから……………」

スキルアウトが振り向くと同時に、黒子は鞆を遠心力を利用して振り抜く。見事、それはスキルアウトの顎に命中し、彼はダウンした。

「今日の黒子は危険ですわよ?」

「……………なるほどなあ、『テレポート空間移動』ってのか? 初めて見たぜ」

仲間がやられたというのに、歯並びの悪いスキルアウトはヘラヘラと笑みを溢す。

「余裕をこいている場合ではありませんわよ? 次は貴方の番ですから」

「ああ……………そうだなあ。確かに『テレポート空間移動』なんて厄介なものだがあ……………」

彼が呟いた瞬間、突然黒子の背後から衝撃が襲ってきた。

「がっ……………!!」

不意討ちに前のめりになるが、そのまま倒れず『空間移動』テレポートでその場を離れる。

今いた場所を改めて見やり、黒子は顔を歪める。そこには誰もおらず、佐天や男子学生の様子からも突然黒子が攻撃されたように見えたとようだ。

不可視の攻撃。それがこの男の能力か。

思案した瞬間、間髪入れずに自身を否定した。スキルアウトの男は身動きしておらず、ただ突っ立っているだけだ。攻撃したような素振りはない。

ならば、第3者……つまりはスキルアウトの仲間。

「一応教えといてやるが……この場には3人のスキルアウトがいた。1人はお前が倒した……」

さて問題、残りの1人はどこにいるでしょう。

黒子は舌打ちをかましながら太股に巻き付けてある金属棒を取り出す。『空間移動』テレポートの最大の攻撃は、相手の体内に異物を直接転送させる事だ。場所が悪ければ殺しかねない能力だが、黒子にはミスをするという心配はなかった。

それだけの鍛練をして、大能力者（レベル4）になったのだから。

だが、それも相手が見えないのであれば、当てる事が出来ない。

「おらあ、余所見してんじゃねえぞ！」

思索している暇なく、黒子へと襲いかかる。

歯並びの悪い男からの攻撃なら避けられるが、見えない敵からは逃れられない。

再び見えない所からの衝撃に、彼女は真横に吹き飛ぶ。そのまま壁に激突し、呻き声を上げた。

「白井さんっ！」

「ん？ んうー？ はっはぁーん、お知り合いかぁ？ ならちようどいい」

にやりと笑ったスキルアウトは、倒れて咳き込む黒子の頭を掴み上げた。

「おい、なかなかの上玉だからよぉ……剥いで犯っちまおうぜ」

「いいねえーっ。最近ご無沙汰だしな」

いつの間にか、もう1人。正確には一緒にいていつの間にかいなくなっていた男が下品な笑みを浮かべる。

このままではまずい。色々な意味でも、佐天達の安全も。

となると、残された手はこれしかない。

黒子は『空間移動』テレポートで瞬時に佐天達の前へ転移し、2人の腕を掴んだ。

「逃げますわ……」

「白井さん後ろ！」

言い終わるよりも、黒子の身体が吹き飛ぶ。地面を転がり、彼女は苦痛に身体を丸めた。

「がつ………！」

「なあに勝手な事してくれてんだあ？」

歯並びの悪いスキルアウトは黒子を蹴り飛ばした足をぶらぶらさせると、次は佐天と男子学生に目を向ける。

「さあて……男は邪魔なだけだからな、かといって逃がしても通報されたらたまらねえ」

という事で、とスキルアウトは懐から折り畳み式のサバイバルナイフを取り出した。

間近で凶器を初めて見たからか、佐天がひくつと声を詰まらせる。

「たくよお、弱いくせに出しゃばんじゃねえよ」

手元でくるくるとサバイバルナイフを弄び、スキルアウトは告げる。

佐天は思わず男子学生の手を引いて逃げようとするが、恐怖で足が動かなかった。

「逃げようとしてんじゃねえよ！」

「あうっ……！」

ぐわりとスキルアウトの腕が延び、佐天の髪を掴みそのまま寄せると思い切り頬を殴り付けた。

「さ、てん……さん……！」

倒れたきりの黒子が、顔だけを動かして佐天を見つめる。

たえ優秀な能力者であっても、彼女はついこの間まで小学生であったのだ。年上の、それも不意討ちの攻撃を食らったのだ。動かそうと頭は働いても、身体が言う事を聞いてくれないのだ。

「あんまし無茶しない方が良くない……！」

下品な笑いをしながら、スキルアウトはサバイバルナイフを逆手に持つと、大きく振り上げた。

その先には、間違いなく男子学生が。

「じゃあな、デブちゃん」

掲げられたナイフが陽の光で煌めき、降り下ろされた瞬間。

男子学生の身体が動いた。

肥満気味の身体とは思えない俊敏な動きで、ナイフを降り下ろす腕を掴んだ。

黒子や佐天はもちろん、スキルアウトですら驚愕した動きを見せた男子学生は、そのまま雄叫びを上げながら身を捻る。

「おおおおおおおおおっ！！！！」

「なっ……！！」

思いもよらない反撃に、スキルアウトはなすがままにされる。

そして、男子学生はそのまま腰を捻り、スキルアウトを持ち上げた。

それはまさしく柔道の背負い投げであり、スキルアウトの身体は地面に叩きつけられる。

顔面から。

「がっ……」

ただでさえ歯並びが悪いというのにその衝撃で鮮血と共に砕け散り、そのままばたりと倒れた。

「……………僕は……………」

男子学生がゆらりと立ち上がる。

瞬間、男子学生の身体が吹き飛ぶ。

叩き伏されたはずのスキルアウトが立ち上がり、蹴りを放ったのだ。黒子を数撃で落とした一撃は、男子学生の身体を持ち上げるほどの威力だった。

壁に背中から激突し、体内の酸素が吐き出されて噎せる男子学生が次に見た瞬間、眼前に迫っていたのは鉄パイプであった。

「無能力者（レベル0）が図に乗ってんじゃねえぞ！！」

ガアン、と聞いた事がないような音とともに鮮血が飛び散り、その光景に佐天は思わず目を背ける。

「ぐっ……………やめ、なさい……………！」

少しだけ注意が逸れていたからか、黒子の身体からは痛みが消えて、演算出来るだけの気力が回復していた。

太もも部分に巻き付けてあるベルトから金属棒を取り出し、それをスキルアウトへ放つ。

最終的な手段として、金属棒を体内へ転送させるのが、彼女の最大の武器だった。

だが、転送した先はスキルアウトの真横の、何も無い空間であった。

「なっ……！？」

「ちっ、まだ力が残ってんのかよ………」

仕切りに殴り付けた鉄パイプを投げ捨て、スキルアウトは標的を黒子に移したようにゆらりと身体の向きを変える。

男子学生は顔面血だらけになり、酷い有り様としか言えない状況であった。微かに痙攣するように動いているから、最悪には至っていないはずだ。

「ったく、なーんかめんどくさくなっちまったなあ………」

ポタポタと、血を足らしながらサバイバルナイフを振り回すスキルアウト。

「決定だ………全員あの世行きだぜえ！」

「くっ………」

力の入らない身体を何とか持ち上げようとして、黒子は腕を立てるが崩れ落ちてしまう。

倒れている黒子の前までやって来て、スキルアウトは冷酷に告げる。

「じゃあな……クソヤロウ」

「クソヤロウはテメエだっつーの」

その刹那。

真横から凄まじい衝撃にスキルアウトは吹き飛び、黒い影が入ってくる。

突然の介入者に一同愕然となり、その人物を見る。

特に黒子は、信じられない表情だ。

ジーパンに白Tシャツに上から灰色の半袖パーカーを着こんだ、片方だけが金髪という印象的な髪型。

彼は警備員アンチスキルに捕縛され、数日は出歩けないはずだ。

「な、んだテメエツ……!?!」

「どうして……ここに……!?」

彼は楽しそうに笑いながら、それでいて怒りが隠った瞳でスキルアウトを睨み付けた。

「はぁーい……独房やみの中で懺悔する覚悟は出来てるんだろうなあ？
クソヤロウども！」

藤井晃は言葉と同時に地を蹴って、有無を言わずに殴りかかった。

出所してから向かった第10学区で、『レベルアップ幻想御手』が高値で取引されていると聞き、藤井が行った事は1つ。

とらあえずそこにいたスキルアウト達をぶちのめし、取引場所を聞き出した。

そして、聞き出した先へ来てみれば、

「いくらスキルアウトだからって、越えて良い一線つてのがあるだろ」

殴り捨てたスキルアウトには目もくれず、残されたスキルアウトを睨み付けて言う。

「何なんだ、いきなり。飛び入り参加は認めねえぞ」

「喧嘩に飛び入りもクソもあるかよ。つたく、最悪な気分だぞ……」

額に手を押しあて、指の隙間から藤井は敵を睨み付ける。

そこにあるのは、確かな敵意。黒子達と初めて出会った日、お礼参りに来たスキルアウト達に向けた瞳だ。

「遙々来てみたら、友達が”3人”も襲われてるとか……どんだけですか」

そう言っつて、彼は倒れている男子学生を見やる。

「生きてつか？ 鋼盾？」

「……………なん、とかね……………」

弱々しくであるが、男子学生が答える。

「中学以来だな……つか、何で『レベルアップ幻想御手』なんて求めた。超そ能力んなものに頼らなくなつて、お前強えじゃんか」

なあ、と目を彼に向けて囁く。

「学園都市中等部柔道部門第3位……鋼盾掬彦」

意外な成績の暴露に、その場にいた誰もが驚愕する。

学生の街で称されているこの街には、中学からは部活動があるし、小等部にはサークルという形で同じような活動がある。

大会は学園都市内だけになるのだが、ちゃんと列記とした公式戦というのがある。そこでは能力の使用は一切禁止、純粋な身体能力で競われるのだ。

そこでの成績は、正直な話しあまり優遇されない。レベルで優劣が決まってしまうこの街では、そんな結果はただの“がんばったで賞”くらいでしかないのだ。

それでも無能力者（レベル0）が多数出場するその世界では、凄い偉業である。

何せ、この男はこの街で柔道において、3番目に強いものだから。

「……昔の話し、だよ……それに……」

微かに、ほんの微かに鋼盾の表情が苦痛に歪む。今受けた攻撃の痛みではなく、まるで少し前に受けた記憶を思い出すように。

「柔道これじゃ、誰も守れない……」

救えると信じていた力も、救える事は出来なかった。

だから、欲した。力が、全てを下す力ではなく、ただ小さな手を引き上げる事が出来る力が。

それを聞いた藤井は笑い、藤井安心したように言った。

「なら、大人しくしてる。今は俺がお前を引き摺り上げてやる」

そして彼は左手を軽く振り、厳かに告げる。

「んじゃ……喧嘩やろうぜ」

「はっ……友達だあ？」

鼻で笑い、スキルアウトは足元に転がっていた鉄パイプを拾い上げた。

「風紀委員ジャケットが友達だあ……治安だの何だのほざいて、俺達の自由を奪う輩に付くとは不良の風上にも置けねえなあ！」

「自由だの何だのほざくなって、中二病が。同じ飯食ったり笑い合ったりしたんだ……そいつらは少なくとも赤の他人じゃねえ。だいたい友達に地位や肩書きなんか関係ねえだろ……」

んでもって、と彼は一区切りして吠える。

「友達が襲われていて、その上相手が気に入らねえ……暴れんにそれ以上の理由はいらねえだろ」

「……ちつ。カッコつけやがって……なら……」

にやりと笑った彼はズボンの後ろポケットから携帯電話を取り出すと、画面を見ずにボタンを押した。

まるでそれが合図になったように、遠くの方からエンジン音と歓声上がる。

「な、何の声……?」

「舎弟達の声……ざっと50人ほどか」

質問に答えるスキルアウトに、佐天は思わずぎよっとなる。漫画等でよくあるヤンキーの喧嘩では、せいぜい1対7くらいだ。なのに、その何倍の人数を呼んだというのか。

そして、それはハッターなどではなく、数分もしないうちに増援のスキルアウト達が集合した。

「全員あの世行きだ。ジャッジメント風紀委員共々、無事に帰れると思うなよ」

にやにやと笑うスキルアウト達が手をかざすと、周囲の物が動き出したり電撃が迸ったりする。

全員が能力者であり、レヘルアップ『幻想御手』の使用者のようだ。

だが、藤井は臆さない。むしろ楽しそうに口許を緩めた。

「いいな……面白え、これくらいのハンデがあつてちょうど面白くなりそうだけ！」

「ほざけ！」

それを最後の言葉とし、互いに地を蹴る。

そこからは黒子はもちろん、佐天ですら想像しなかつた光景が広がった。

飛んできた土管等を避け、避けきれない物はなんと殴り飛ばした。飛来してくる火炎弾も直撃を受け顔面が焦げても、彼は笑つたまま突撃する。

やがて距離が完全に0になった瞬間、藤井はスキルアウトを殴り付ける。1人を殴つただけなのに、そのスキルアウトはまるでトラツクに跳ねられたごとく吹き飛び、ボーリングピンのように周りを巻き込み倒れていく。

それでも数が減つたわけではなく、代わりのスキルアウト達が能力を藤井へ放つ。

もはや風紀委員シヤッジメントではなく警備員アンチスキルでなければ収集が付かない状況だが、それでも藤井は笑っていた。

楽しそうに殴り、殴られ、時には電撃を避けて、炎をくらい。でも、藤井はたった一度もよるめかない。臆さない。背中を見せない。

まるでそれが彼自身の生き様のように、彼は拳を振るい続けた。

佐天にとって、ヤンキーの喧嘩を生身で見ると初めてであった。以前、最初にあったのはドリフのようなものだったので、ノーカウント。

出会って間もなかったが、いつもユニークな言葉で笑わせてくれる藤井とは違った面に、改めて彼が喧嘩をする不良なのだと思いは知らされる。

だが、不思議と恐怖はない。それは、その拳がこちらへ向けられる事はないと知っているからか。

呆然とその光景を見ていると、横に黒子が立った。

「一先ず、安全な場所へ逃げますわ……それから警備員アンチスキルに連絡を……」

「っ、でも……そしたら藤井さんは……」

佐天は喧嘩をしている先輩を見つめる。上条のような幻想殺しもイマジンプレイカー

ないのだから打ち消せず、攻撃を受けているのだから全身の至る箇所に焦げたり切り傷なり打撲の傷が付けられてしまうのは当然。

だが、その表情には笑みが浮かんでおり、まるでこの状況を、喧嘩を楽しんでいるようだ。

「藤井さんが引き付けているうちに……」

「どこへ行くのかねえ？」

はっと黒子が振り向いた時には、すでにそれはナイフを振り上げていた。

「くっ、おおおおっ!!」

半ば雄叫びを上げ、鋼楯は身を乗り出す。黒子の腕を引き寄せてナイフを避けようとするが、降り下ろされた刃は狙い済ましたように彼の肩に突き刺さる。

痛みあまり彼は目を剥き叫びそうになるが、それを堪えて突き立てた腕を掴んだ。

そして、投げようと身体を捻った瞬間。

「イキガってんじゃねえぞ、豚があっ！」

他の能力者による念動力で吹き飛ばされた鉄屑に巻き込まれ、鋼楯の身体が吹き飛んだ。

「鋼楯さん!!」

「っ！」

佐天の声にはっとなった藤井が目を向けてくるが、相手の数が多くて駆け付けられないだろう。

このまま佐天と黒子が捕まってしまい人質になると、藤井が戦う事が出来なくなってしまう。

逃げなければと思う反面、今頃になって身体が恐怖で硬直してしまい、思うように動かない。

まさしく絶体絶命といったその時、再びエンジン音が鳴り響いた。

また相手の増援かと思ったが、それはさきほどとは違って静かだ。騒音というより普通の音を響かせるそれらは、やがて近くまで来ると停止したようだ。

そして、多くの足音ともに姿を現した瞬間、佐天の表情には思わず笑みが広がった。

「よお、佐天ちゃん。大丈夫か？」

「なっ、テメエらは……」

駆け付けてくれたのはいつも『アンティック珈琲店 カフェ』
に出入りしている藤井の同僚達で、その背後には何十人も学生がいた。

彼らの姿を認めると、相手を吹き飛ばしながら藤井が声を上げる。

「なんでお前らが……」

「鋼楯に呼ばれたんだよ。つたく、まーた勝手に暴れやがってからに……」

へへっ、と笑みを浮かべる鋼楯に、藤井は頼もしそうに口元を緩める。彼らは皆、藤井の中学校の友人だというから、当然鋼楯とも知り合いというわけだ。

「ちっ……余計な事言いやがって……」

背後から殴りかかってくる不良を軽くいなして、藤井は佐天を見る。
やる。

「佐天。白井と鋼楯を連れて隠れてろ」

「は、はい！」

みんなが来てくれたからか、佐天の身体は自然と動くようになっていた。黒子の肩を担ぎ上げ、何とか動ける鋼楯とともにそそくさと下がる。

だけど、その中にはやはり、悔しいという感情が根付いていた。

8話・善悪の線引きへライン〈（後書き）

新約2巻。

今回は魔術に対しての解説みたいな回でしたね。

ただ美琴の

ここで逃すと、厄介な事になる。

具体的に言つと3冊分くらい出番なしとか普通にありうる

かまちーけっこうメタ発言が目立つようになってきた気が……

…
W
W
W

9話：絶対破壊ヘートルハンマー

佐天達が避難したのを見計らって、藤井は安堵したように息をつく。正直、考えもなしに突っ込んだので、彼女達を周りがフォローしてくれるのは助かる。

駆け付けてくれた仲間達のおかげで人数的な問題は均衡し、後は相手を潰すだけだ。

「藤井、テメエ俺らに断りもなくおっ始めやがって！」

「はっ、ちゃっかり飛び入りしてるくせに何言ってるんだ！」

背中を合わせてきた友人に鼻で笑い、藤井は飛びかかってくる輩を吹き飛ばす。

「どうして言わないで勝手に始めるんだよ!？」

「……………俺の身勝手に付き合わせるわけにはいかねえだろ」

これは『レベルアップ幻想御手』を求めて勝手に始めた喧嘩であり、もしかしたらという危険が付きまとうものだ。

いや、もはや喧嘩という段階を越えて事件と言っても過言ではなく、下手をしたら彼らは殺しにかかってくるだろう。

それほど危険な戦いに藤井は仲間達を巻き込みたくなかった。これほど危険な目に合うのは自分だけで十分と。

だが、仲間達はそれを良しとはしなかったらしい。

「馬鹿野郎が……あとで飯奢れ」

「……しゃーなーな。何食うか今のウチに決めとけよ」

どうして喧嘩をしたのか、と問い詰めてくるつもりはないらしい。

簡単に約束を交わし、藤井はふと視界を回す。すると、最初に取りまとめていた歯並びの悪いスキルアウトが廃ビルへ逃げ込んでいくのが見えた。

「……………の野郎」

『レベルアップ幻想御手』をちから使用して能力を手に入れたはずの自分達が、レベ無能力者に蹴散らされていく。

そんな光景に恐怖したのかもしれない。周囲を見渡せば能力で投げられたドラム缶を素手で叩き落とし殴りかかるなど、普通スキルアウトでなくても尻尾巻いて逃げ出す光景だ。

だが、逃がすわけにはいかない。奴を倒して『レベルアップ幻想御手』を手に入れるというのもあるが、何より佐天や白井に手を出したのだからそれ相応の報いを受けて貰わなければならない。

「藤井、行けよ」

さきほど白井を襲っていたであろうダミーチェックの能力者を助で捉えた藤井は、顔面を殴り付けて顧みる。

余裕そうに笑う友人は、スキルアウトの顔面を鷲掴みにすると圧力だけで顎を粉碎した。

「ここは任せろ。決着、着けてこい」

「……………へっ。んじゃ、お言葉に甘えますかね」

左手を軽くスナップさせて、藤井は廃ビルへと駆ける。途中で止めようとしてくる輩は仲間が押さえつけてくれたおかげで、傷を増やす事なく到着する事が出来た。

中は廃ビルというだけあって脆くなって剥き出しになった壁に、スキルアウトらしくスプレー缶で文字やら絵が書かれている。

パラパラと、天井の欠片が降ってきて、藤井は顔を上げた。

天井の脆い部分が落ちてきたという事は、衝撃が伝わったという事だ。たとえば、誰かが歩いたとか。

「……………誘っているのか。それとも」

藤井はぶんぶんと首を振るう。どう考えても罠としか考えられないが、だからどうだというのだ。

罠だろうが何だろうが、立ち塞がるというのならぶち壊す。それが自分の昔からの戦い方だ。

今も昔からも、上条と出会う前も後も変わらない力の使い方。

藤井は左手に目を落として、握り締めるとフロア奥にある階段を目指す。周りと同じで脆くなっているが、比較的に形は綺麗だ。普段から奴らの根城として使われている事がよくわかる。

階段を上がりきる前で足を止め、一応2階フロアにいるかどうかを確かめる。心配がないからいだろうと踏んでいたので、誰もいない事を目視した瞬間に駆け出す。

その瞬間、目の前から大量のドラム缶などが飛んできて藤井の視界を覆いつくし、轟音とともに誇りが響いた。

一体、これは何の冗談なのだろうか。自分達は『レベルアップ幻想御手』を用いて無能力者から能力者へとなれたはずだ。

強くなっただろう。ジャッジメント風紀委員の奴らを倒す事にも成功して、天下とまでいかずとも自由を手に入れたはずだ。

なのに、なぜただの同じスキルアウトにやられていく。

なぜ、奴らは能力に臆さず立ち向かってくる。

どっしり。

「何でテメエは生きてるんだ!？」

追いかけてきた藤井晃に叫ぶ。奴には仕掛けておいたドラム缶奇襲をありったけぶちかました。回避出来るようなタイミングではなかったし、何より飛び込むような場所もなかったはずだ。

こちらの疑問に答える気はさらさらないように、藤井は笑う。

「あの程度じゃ俺は落ちねえよ。つーかあんま激しくすんな、この建物ボロいんだから」

説明になっていない。だが、落ち着け。

そつだ、自分の能力を藤井は知らない。その分の優位がまだある。

「くっ、ききつ。泣いて謝るなら今のウチだぜ……」

ズボンのポケットから収納式のナイフを取り出し、にやりと笑う。いくら何でも刃物を持って狙いが定まらない相手に、そう易々と攻撃はしかけて来ないだろう。

だが、藤井は息をつくと骨を鳴らす。

「なら……テメエは独房やみの中で後悔する覚悟でもしとくんだな」

「ほざけ!」

強がりにはしか聞こえない言葉に吠えて、まずはこちらから仕掛ける。ナイフを下から突き出すように繰りだし、藤井の身体を突き刺す。

だが、彼は突き出された攻撃を紙一重で避け、躊躇う事なく顔を殴り付けてくる。

「はっ……んなへこちよるな攻撃、食らうかよ！」

吠え捨てて殴りかかってくる拳は、寸の所で反れる。否、彼が狙いを見誤っているのだ。

トリックアート
偏光能力。周囲の光をねじまげ、他の人間が見る光景を変化させる能力。つまり、藤井が見ている自分は、本当は別の場所にいる、というわけだ。

例えば藤井から見て真正面に自分の姿を描き、無闇に突っ込む姿を見せれば迎え撃とうと彼はそちらへ突き進むだろう。だがそれは能力で見せた幻影（に近いもの）であり、本当の自分は真後ろから攻める。

そうすれば、

「どこ狙ってたんだよっ！」

容易に背後から奇襲出来るというわけだ。躊躇なく振り下ろさずナイフも彼からは見えない。前から斬りかかってこようと、実際の攻撃は後ろから来ているのだから。

だが、ナイフの切っ先が藤井の肩に突き刺さった瞬間、彼は弾かれたように身体を動かして避けた。

「何っ？」

あり得ない、わけではないが、あり得ない動きをされてしまい、反射的に動きが止まる。

藤井から見て、自分の姿は真正面に映っていたはずだ。対して、本体は彼の真後ろ。どう考えても避けられるはずがない。

「……………なるほどな。重福と同じ視界を誤認させる能力か。どうりで当たらねえわけだ」

微かに血が出ている肩を払い、藤井は面倒そうな顔をする。そこに恐怖はなく、どちらかという期待していた手品の種が割れてしまい、あまりにも期待外れだったという顔だ。

「テメエ……………何をした!？」

藤井は移した真正面で困惑している自分を見詰めたまま喋っている。そこにいる自分へ喋っているということは、背後にいると気付いたわけではないだろう。

では、何故今の奇襲を避けれた。しかも初撃だというのに。

「別に驚く事あねえだろ。刃が肩に突き刺さった瞬間に動けば、掠り傷で抑えられる。だいたい奇襲するのは背後から攻めるのがセオリーだからな、予想は出来る」

「……………テメエ、口で言うのは簡単だがな……………」

あり得ない、という言葉しかなかった。そんな漫画みたいな事、出来るわけがない。出来たとしても、果たしてそれは本当に人間な

のだろうか。

そう考えた瞬間、ぞくりと背筋が震えた。冷たい物が背中を滑り落ち、身体の芯が冷えきってしまえ。

今さらになつて、自分は誰を相手にしているのか理解した。

「ば、化け物……」

「化け物？ 違うなあ……俺は悪魔だあ……」

足音がまるでギュピツ、ギュピツと鳴っているかのような錯覚に、自分は張り詰めた叫びを吐き出す。

「だ、だから何だつてんだ！ テメエはこちらの能力を打ち破る術はねえだろうか……！」

そうだ。こちらの能力を知っただけで打ち破ったわけじゃない。種がわかってもどうにも出来ないから、こちらが優位に変わりはないじゃないか。

だが、追い込まれているはずの藤井は鼻で笑うと後頭部をかいた。

「まつ、そうだな。俺はイマジンブレイカー幻想殺しなんてもんはないし、御坂みたいに雷をバリバリ出して出せるわけじゃない」

だから、俺にその能力を打ち破る力はない。そう語る藤井だが、なぜかそこには揺らぎない目があった。

「だから、悪いけど手っ取り早く終わらせる方法を選ばせてもらう」

藤井はゆつくりと歩いて左手を脆くなった柱に置く。

「なあ、こんな都市伝説って知ってるか？」あらゆる異能の力を打ち消す左腕を持つ男”っての……”

突然語りだした藤井の意図がつかめず、何も答える事は出来ない。彼としてもこれといって返答を期待していた訳ではないようで、そのまま言葉を紡ぐ。

「なら、こんなのはどうだ？ ………………」あらゆる物質を消し去る破壊者”ってのは」

「……………与太話を信じるか、ヴァーカ」

「あり。あんま有名じゃねえのかな……………まあ、あんま能力使った事なかったからなー。仕方ないっちゃ仕方ないか」

なら、お前はある意味幸運だよ。都市伝説の誕生を垣間見る事になるんだからな。

まるで謳うように述べる藤井は、左腕を柱に押し付ける。その行為を理解する事は出来ないが、直後に起こった事を自分は理解せざるえなかった。

突然、左腕を置いていた柱が粉々に吹き飛んだ。

有り得ない光景に、今度こそ動揺が隠しきれないほどになる。

今、藤井は何をした。ただ脆い柱に手を当てていただけだ。力を入れた素振りも、ましてや能力を使うはずもない。彼は無能力者^{レベル。}のはずだ。

何より、いくら脆くなっているとはいえ人間の力で柱が木端微塵になるはずがない。

だが、現に目の前で柱は塵と化して消えて行った。

「な、ん……………っ!？」

「無能力者^{レベル。}だよ。ただし、どっかの説教屋みたく……………」

消し飛ばした左腕をかかげて、破壊者は告げる。

「俺の左腕には絶対破壊^{トータルハンマー}つつー、あらゆる物質を破壊する力を秘めた能力が備わってたんだ」

「ばっ……………何を……………! そんな意味不明な能力聞いた事……………!」

「ああ、書庫^{バンク}にも記されていない科学を持ってしても解明出来ない摩訶不思議な能力だよ」

バカな。あらゆる物質を破壊する腕など、聞いた事がない。元々都市伝説など興味はなかったが、都市伝説そのものの信憑性については風の噂で耳にした事がある。

眉つば物が多い中で、いくつか実際に存在している逸話がある、と。

「言っとくけど、こいつは人間にも適用するみたいだな。ガキの頃はよくヤンチャしたもんだが……………」

突き付けてくる左腕が、まるで悪魔の腕のように見えてきた。同じ人間の、しかも年下のガキの腕でしかないはずなのに、それには全てを破壊する力を秘めていると言う。

「はっ……………ぐ、き……………」

自然と足が引き下がった。これは化物だ。目の前にいるのは人の姿をした、別の何かだと。

「……………て、テメエ……………何者なんだよ!？」

「俺か? そうだな……………」

少し左手をひっこめたかと思うと、悪魔は壮絶に笑った。

「2人で1人の破壊者……………その片割れでもいいし、通りすがりの破壊者でも構わねえよ。好きに呼べ」

トルハンマー
絶対破壊。その名のごとく触れた物を問答無用で破壊する魔手。

そこに人間だのコンクリートだのといった境目はなく、それらに等

しく破壊という名の終焉を与える。

畏怖した。恐怖した。恐れた。怖れた。懼れた。畏れた。

それらの感情が身体全身を駆け巡り、四肢を硬直させる。

「うっ、あああああああああああつ！！！！！」

恐怖を振り払うように、能力を発動。『レスルアツパー幻想御手』によってもたらされた最大限の幻影を生み出す。藤井からしてみれば7人ほどの自分が一斉にナイフを振りかぶっているように目いるだろう。

だが、それに構わず彼はしゃがみ込むと左手を床に突ける。

「あ、さっきの回避だけだな。ぶっちゃけお前の足音が背後から聞こえていたから反応しやすかったただけだ」

にっと笑い、藤井は睨みつけてくる。

「んじゃ、やみ独房の中で懺悔する覚悟しとけよ。くそつたれ」

瞬間、音が響いた。

その手を中心に周囲へと亀裂が広まっていき、そこから起こりうる事象は容易に想像出来た。

一体何をどこで間違ってしまったのかはわからない。

ただ自分達は、とんでもないものを相手にしていたという事。

それだけは理解できる。

そして、轟音が響いて視界が砂埃で埋まってしまった。

トールハンマー
絶対破壊。

あの歯並びの悪いスキルアウトに説明した通り、あらゆる物質を破壊する力。それが藤井の左腕には備わっているのだ。

だが、それでも藤井は上条同様に無能力者だ。レベル0 上条の幻想殺しのように異能に対して通用はしないが、物理的な物ならば絶対的な破壊をもたらす左手。

イマジンプレイカー
幻想殺しが幻想を殺す魔手なら、絶対破壊は現実を破壊する毒手。トールハンマー

それでも身体検査では無能力者と認定されている、”科学”では証明されていない能力。一体どんなカラクリなのかもわからない能力だが、これは藤井の意思でコントロール出来るらしく触れた途端に破壊する、などという強行には走らないらしい。

おかげで藤井は破壊する対象を選ぶ事が出来、私生活でも無闇な破壊者にならずに済んでいるわけだ。

そして、上条もそうであるように、藤井晃とて喧嘩が得意というか好きなだけで身体能力はただの人間に変わりはない。跳んだだけでビルを越えたり音速で移動したりするなどというハイペースペックが持ちあわせていない。

つまり、ビル全体を破壊するというトンデモ攻撃は出来るが、その後の脱出は言わずもかなで。

「どわああああああああああつー!!」

衝撃でスキルアウトの身体と一緒に弾き飛ばされるのは、当然の理だった。

気絶したスキルアウトの肩を持ち上げて藤井は崩れて行く床を走る。まさしく火事場の馬鹿力を発揮した彼は勢いに乗ると、勢いよく窓から飛び出す。

外では仲間達やスキルアウト達が亜然とした顔で見上げてくるが、藤井に構っている余裕はない。

「どけどけどけえ!!」

落下地点にいた一同をどかすと、藤井は強引に着地する。ちゃん

と着地出来たわけではなく衝撃を殺しきれずにその場で転がった。

3階程度ではあるが崩壊していく床から跳び出して勢いよく着地したのだし、最悪の場合だと骨が折れている可能性だってあった。

「っ、くう……きつつ……」

「な、そんな……!？」

リーダーがやられたのを見て、さすがに戦意を無くしたのだろう。つるんでいたスキルアウト達も放り出された歯並びの悪い男を見て、顔を青くしていく。

ズボンのポケットに手を突っ込み、藤井は一同を睨みつけて言った。

「次、こうなりたい奴？」

彼がそう問い掛けただけで、スキルアウト達は能力を解除して一声に逃げ出した。仲間内でも最強であった頭がやられ、絆ではなく力によって結束されていた一群には弔いといった言葉はない。

誰もが自分が一番で、自分が得になる事しか考えていない。

「……………ま、こんなもんか」

げしっ、と倒れているスキルアウトを蹴り、藤井はかがみこんで彼のズボンをまさぐり1つの物を取り出す。

『レヘルアップ幻想御手』。

これを手に入れるために少し遠回りしたが、これを黒子に渡せば多少の被害は狭まるだろう。幻想御手事件と呼ばれるであろう今回の出来ごと、鎮圧に向かうはずだ。

しかし、と藤井は思う。目を落とし『幻想御手』を見て、ある種の信じられないといった感情は渦巻く。

手にした『幻想御手』はどこにもでありそうな音楽プレイヤー。そこから連想されるのは、音楽。

「音楽を聞いただけでレベルが上がるってのか？」

それはまるで魔法だ。超能力とはすなわち科学的に解明された超常現象であり、発動するには複雑な演算を脳裏でする必要がある。だから能力を上げるには自身が勉強なりなんなりして頭が良くてはならない。

こんな小さな機械一つで、上がるようなら誰も苦労はしないのだ。

「まっ、楽しんで手に入るなら誰もが欲しがらるわな」

学園都市にいる能力者達のほとんどは自分と同じ無能力者。つまりただの一般人と変わらない学生がほとんどで、その誰しもが超能力を欲している。

欲しくてたまらなかつたものが、簡単に手に入ってしまう。それはまるで麻薬のように甘美なもの。

ふと、藤井は倒れているスキルアウトのズボンから、もう一つの

音楽プレイヤーがはみ出している事に気が付く。おそらくこれも『レベルアップ 幻想御手』で、鋼盾に渡す分だったのだろう。

もしかしたら、あるいは、ここで彼がもう一つの『レベルアップ 幻想御手』を見つけていなければ、事情は絡んだりしなかったのかもしれない。

こんなドーピング紛いな事をしてまで超能力を欲しいと藤井は思わない。どう考えても後遺症があるだろうし、これを開発した人間がただ純粋な気持ちで無能力者《レベル0》達を思っ作つたなんて優しい考えも持てない。

だけど、そうだとわかっていても能力を欲している奴がいる事を、残念ながら藤井は知ってしまった。ただの赤の他人でこんなスキルアウト達のようなろくでもない人間ならぶん殴つても止めてしまふが、純粋に力を欲してしまった奴を。

もしかしたら上条なら殴つてもこれから自分がしようとしてい
る事を殴つても止めただろうか。それとも、わかりつつも見て見
ぬフリをしたか。

御坂だつたら絶対に顔を真っ赤にして止めるだろうな。黒子や初
春も。

「……………あーあ、俺ってほんと損な性格してるよなあ」

「あ？」

「何でもねえよ」

2つのうち1つを自分のポケットにしまい込んで、藤井は立ち上

がると一同を見やる。

「ありがとな。おかげで助かった」

「だったら今度何か奢りやがれ」

仲間の言葉に苦笑を浮かべて、ふと顔を上げる。

道の曲がり角辺りに避難していたであろう、逃がした3人が出てきた。ヨロヨロになっている黒子の肩を佐天が担ぎながら、その後ろを心配そうに鋼盾が追従するようにしている。

お世辞にも無事、とは言い難いだろう。黒子は蹴られまくって佐天は髪を引つ張られ、鋼盾にいたっては肩をナイフで刺されているのだ。どちらも病院に行かないとならないレベルだろう。

だが、それよりも今は笑みを浮かべて言うべき事があった。

「……………借り、1つな」

「貴方のような方に借りを作るのは癪ですが……………まあ、今回ばかりはお礼を言っておきますわ。スキルアウトだと、舐めていました」

黒子の認識は間違っていない。普通、シヤッジメント風紀委員はそれなりの研修を受けて、それなりの強さを得て補導にあたる。その程度の強さでも、十分に無能力者は抑えられるだろうし、黒子ほどの実力なら異能力者^{ベル}くらいまでのスキルアウトを裕に相手する事は可能だ。

だが、レベルは所詮レベル。超能力の度合いを図るために学園都市が付けたランクでしかなく、それが”喧嘩の強さ”に直結してい

るわけではない。ほとんどのスキルアウトは群れをなし、共に行動を一緒にする。大半は見栄を張るだけの小物なので、それで事足りるだろう。

しかし、本当に喧嘩が強い奴は決して見栄を張らない。本当に強い奴は、無闇にその強さを見せびらかせないし、誇示したりはしない。

決して自分がこの学園都市で最強なだとは言わないが、少なくともこんな風に能力を誇示して支配するだけに力を求めた輩には負けているつもりはない。

本来ならば、そういった強い奴と風紀委員や警備員といった面々と出くわす事はそうそうない。もちろん、バカをやった時はお世話になるが。

「気にすんな。それより、ほらよ」

ポケットから1つ目の『レベルアップ幻想御手』を取り出し、黒子に投げつけた。受け取った彼女は目を丸くして、それをまじまじと見つめる。

「それがお目当ての物だろ」

「まさか、『レベルアップ幻想御手』!？」

「こんな小さな物、と予測はしていなかったのだろう。誰もが反応は同じだ。」

その時、微かではあるがサイレンの音が鳴り響く。スキルアウトの喧嘩に関わらずビルが1つ倒壊したのだから、警備員が駆けつけ

るのは当然だろう。

「んじゃ、それやつから俺達が暴れまわったつての黙ってるよ」

藤井の言葉に集まってくれた仲間達は一斉に逃げ出すかのごとく散っていく。この分だと今度、全員分の料理を作らされそうだ。

藤井も鋼盾に目配りして、アイコンタクトを取るとその場から去ろうとする。

「お待ちになってくださいまし」

「……………んだよ？」

まさかもう一つ持っている事がバレたか、と感じつつも藤井は黒子を顧み尋ねる。

「どうやってビルを倒壊させたんですの？ あのスキルアウトの能力は攻撃系ではなく、どう見ても視覚に作用するもの。貴方は無能力者だと御自身で仰っていたでしょう」

「知るかよ。なんか派手に暴れ回ったら倒壊したんだ。大方、脆くなりすぎていたんだろ」

適当な事を言いながら、藤井は受け流す。上条のような異例がそうそういるはずもなく、またそう言ったところで信じないだろうし、そこからまた研究機関などと騒がれるのも面倒だ。

「……………そう、ですわよね。まさかとは思いますが、『幻想御手』を使ったわけではないでしょうね？」

レベルアップ

「アホか。能力なんてなくても俺は強えつての」

そう言い捨てて、鋼盾を連れるようにその場を離れる藤井。

いつもなら追いかけてきそうな彼女も、さすがに怪我が洒落にならないのか大人しく見送るだけのつもりらしい。

だいぶ離れた2人が向かったのは、とりあえず適当なアジト。と言っても中学時代に使っていた適当な廃ビルの1つである。別段、廃ビルを持つ事がスキルアウトの矜持というわけではなく、ただ単にこの廃ビルを藤井が見つけた時、まだ電気も水も通っていたので利用していただけだ。

学校の教室を溜まり場に使う者もいればカラオケボックスを利用するところもあるし、同じように廃ビルを利用する輩だっているだろう。

それはともかく、アジトは今だ中学の輩かもしくは卒業生が利用しているらしく、どこか人が使っている気配がいたるところにあった。電気は通っていないようだが水は今だに流れるらしく、適当なハンカチを濡らして鋼盾に渡す。

「無茶したな」

「そつちこそ」

こうして互いに会話を交わすのは、卒業式以来だった。昔も今も変わらず優しい顔つきで、決して威圧をかけないような笑みに藤井も懐かしさを感じる。

「で、なんで『レベルアップ幻想御手』を？」

「……………ついこの前、銀行に強盗が押し入ったんだ」

肩にハンカチを抑えつけながら、彼が告げる。

銀行に能力者の強盗が押し入った。それ自体はぶっちゃけよくある話で、ジャックメントすぐに風紀委員だか警備員が突入して問題を解決するはずだった。

だが、能力者のうち1人が高レベルの能力者だったらしく、犯人グループはいとも簡単に脱走。だが、銀行員だか通行人かは知らないが、近くに置いてあつたらしく消火器を逃走用の車に投げつけ爆発。それは周囲の車を巻き込み、その周囲に破片が飛び散ったそうだった。

鋼盾もその場に出くわし、運よく爆風で身体が吹き飛び、地面に背中を叩き付けた程度で大した怪我をせずに済んだという。

だが、偶然にも近くに学園都市を見学に来ていた子供達と保護者達の団体がおり、それに巻き込まれたそうだった。子供達は全員巻き込まれ、保護者達も怪我をしてしまうという大惨事へと発展してしまっただ。

近くにいた鋼盾は優しい性格だから、きっと眼の前で起きた事故を見過ごす事が出来なかったのだろう。

彼は手を伸ばした。だが、それはとどく事なく爆炎に防がれ、無力なただの手は虚空を掴む事しか出来なかったそうだった。

だから、力が欲しい。全てを下す暴力ではなく、ただ小さな手を握りれるだけのほんの小さな力が。

「欲しかったんだ………どんな能力でも良い。誰かを、せめて眼前で困っている人に手を伸ばせるだけの………」

それはスキルアウト達のような邪な想いではなく、純粋な想いだつた。

誰かのために、力を。

話を聞いていて、藤井はそつとポケットの中に押し込んだ『^{ベルアップ}幻想御手』を確認する。

鋼盾という人を知っているからこそ、藤井はこれを渡しても問題ないと思う。黒子はおそらく顔を真っ赤にして止めてくるだろうが、能力者には無能力者の気持ちはわからない。

『アンティック珈琲店 - カフェ -』の店長達は、きつと小言を言いつつも黙認してくれるだろう。

あのツンツン頭の相棒は。

だけど、きつとこれは間違いじゃない。あの人だって言っていた。『人生で間違つた道を進んだとしても、それは間違いではない。来た道に戻って新たな選択をするのも、それは物語だ』、と。

ならば、誰かを助けるために、あえて道を踏み外すしよう。

外では突然、雨音が響いて雷鳴が轟く。夏特有の夕立だが、今はそんな事は気にならない。

音楽プレイヤーを取り出し、藤井は彼に見せつける。

それは、と驚く旧友に、破壊者は告げた。

「悪魔と相乗りする気、あるか？」

9話：絶対破壊へ「トールハンマー」(後書き)

今回にて、ついに藤井の能力が判明いたしました。

その名も絶対破壊^{トールハンマー}！！

示す通り、ありとあらゆる物質を破壊する能力です。

上条と対をなすように藤井は作り出し、“相棒”と呼べる立ち位置にしたくて設定した彼に付けるとしたら、やはり物質 とりわけ現実を破壊する、という意味合いを込めてこの能力にしました。

上条さんの幻想殺しが右手のみに対して、藤井は左”腕”まで範囲を及ぼせています。厳密に言えば肩より下の腕までが絶対破壊の効果範囲です。それは後々の伏線のように出来たらなあ………と、思っていたりします。

幻想と現実を破壊する2人の主人公。けっこう仮面ライダー好きな自分なので、台詞にライダーのものをぱくったりしています。2人で1人の破壊者とか、通りすがりの破壊者とか。

本家本元の世界の破壊者さんも説教しまくるし、上条さんの説教シーンにあのBGMが超合うのでwww

ちよくちよくそういうネタとちよつとした”伏線”を仕込んでいこうと思います。これから、ですが。

ちなみに、彼の能力も幻想殺しと同じように^{システムスキャン}身体検査ではレベル0として認定されています。

これもまた、1つの伏線ということでは………

今回もモブとして登場するはずの鋼盾掬彦、彼も藤井の中学時代の友人＋柔道部の学園都市3位という独自設定で登場させました。アニメの彼は何が目的で強さを求めたのかわからなかったのですが、この作品ではただ超能力を得るのではなく、眼の前で困っている人に手を伸ばせるくらいの”力”が欲しくて、『レキルアップ幻想御手』を求めています。

このオマージュというか、モチーフにしたのは仮面ライダーオーズの主人公。火野映司です。彼のように手が届かないところにも手が届くくらいの力が欲しいという部分を付けてみました。

そんなこんな独自のキャラ路線を走っているこの作品ですが、これからも頑張って執筆していきますので、応援よろしくお願いします。

10話：2人のお節介へアドバイス

夕立が降ってきた。にも関わらず小銭はほとんどないため傘を買う事も出来ずに、佐天は傘をさす事も出来ずに濡れで歩いていた。

行きたい場所もなく、ただ無償に、逃げるようにあの場を去りたかっただけだ。

警備員アンチスキルが駆けつけて倒されていたスキルアウトは、ひとまず黒子が倒したという話になった。彼女もそれなりの恩を感じていて、友人とまで言ってくれた藤井を売るといふか言いつけたくなかったようだ。

そして、何も出来なかった佐天はいたたまれなくなり、大した怪我もしていないという事で病院に行く黒子と別れ、1人で道を歩いていた。

鋼盾という藤井の友達。彼にすら、自分は劣ると感じてしまう。レベルアップ『幻想御手』を求めた彼には彼なりの、ちゃんとした”理由”があったのだから。

それに比べて、ただ欲しいだけの自分は、こんなもの『幻想御手』を手にしている意味はあるのだろうか。

「……………だけど」

雨に濡れる携帯電話に目を落として、そつと触れる。この中に『
レベルアップ
幻想御手』のデータは入っている。

破棄するのは簡単だ。データを消せば良いし、なんだったらこれ
事壊せば良い。

だけど、それでもやっぱり。

手放したくない。使いたい。

「……………っ！」

誰にも話す事の出来ない悩みが彼女の頭を駆け巡り、降り続ける
雨はまるで断罪するかのように肌に痛く突き刺さる。

「……………?」

その時、突然雨が止んだ。いや、周囲は振り続けており、まるで
屋根が突然現れたように自分を雨から防いでいる。

「風邪、引くよ」

それはとても優しい声だった。自分よりもずっと年上なのに、ま

るで同い年のように子供のような、無邪気な色を含んだ声。

そっちと佐天は振り向く。そこにいたのは案の定というか、予想通りというか。

この前の買い物へ行った帰りなのだろう。手には林檎と葱が見える茶色の紙袋を抱えて、優しい笑顔をうかべる男が、

景山由樹が、そこにいた。

偶然というのか、必然とでも言うのか。

帰り道で雨に濡れる佐天を見かけた由樹は傘を貸し、ひとまず風邪をひかないように『アンティーク珈琲店 - カフェ -』まで連れて行きく事にした。

この日は航真にも予定があつたらしく、急遽店を閉めたため当然中には誰もいない。さすがの淡希も連日来るような真似はしないだろう。彼女もそうホイホイ来れるほど暇ではない。アイテムの面々や垣根もまた同じ、であろう。

しかし、と由樹は思う。いつもの彼女らしからぬ消沈した様子に、彼は戸惑いを隠せない。自分出来る事といたら、ひとまず彼女にはタオルで髪を拭かせて自分は温かいコーヒーを入れる準備をする

事くらいだ。

嫌な沈黙の時間が降り注ぎ、コーヒーを注ぎ終わったところで、佐天が口を開いた。

「……………すみません」

「ん？ ああ、気にしない気にしない」

何に対しての謝罪だったのかは計り知れないが、いつものように由樹は笑顔で返す。

カウンターで待つ彼女にカップを差し出して、由樹は厨房のガスコンソ口に腰を寄せると同じようにコーヒーを一口。

「……………で、何であそこに突っ立ってたんだ？」

告白失敗した、とか冗談が通じる空気でもないため、由樹は素直に疑問をぶつける。

「……………嫌なんです、今の自分が」

喋り出す佐天の目尻には、涙があふれ出していた。

「超能力が欲しくてこの街に来て……………なのに、全然能力を手に入れられなくて……………」

そつと彼女がカウンターに置いたものは、1つの音楽プレイヤーだった。だが、それに心当たりが1つある。

『幻想御手』^{レベルアップバー}。巷で有名になっている、使っただけでレベルが上がるという代物。佐天のような無能力者^{レベル0}にとってはまさしく夢のようなものだ。

それがきつと、そうなのだろう。

「やっと手に入れた力を得るチャンス……………でも、私にはそれを使う資格があるか不安なんです。ただ超能力が欲しい私と、何かを護るために力を欲した人。それを聞いちゃうと私は……………」

「……………何があったのさ。話してみなよ」

尋常ならぬ言葉に、由樹は思わず強く尋ねてしまう。だが、彼女は恐れもせず独白するように喋り出した。

『幻想御手』^{レベルアップバー}を航真の手によってもたらされた事。使うか否かを悩んでいるうちに『幻想御手』^{レベルアップバー}の取引現場に出くわした事。どうかして助けたかったけど無能力者^{レベル0}の自分ではどうする事も出来ないだろうと逃げ出した事。黒子が駆けつけてくれたが返り討ちになり、藤井とその仲間が来てくれた事。同じ無能力者^{レベル0}である鋼盾でさえ戦ったのに、自分は何も出来なかった事。

つらつらと小さな口から洩れる言葉に、由樹はふむふむと頷く。

適当ではなく真摯に自分の脳へと取り込み、情報を整理する。

「なるほど……………鋼盾って奴と比べて自分はって事か」

「……………無能力者《レベル0》って、欠陥品なんでしょうか？」

ぼそりと嘯いた彼女に、由樹は何も答えずにただ聞く側に専念している。佐天は口を挟んでこない方が楽なので、そのまま続けた。

「それがズルして、能力ちからを手にしようとしたから………罰があったのかな、って………」

彼女が泣く姿を観て、由樹は眼を細める。

かつて、無能力者《レベル0》だからクズよばわりされ泣く泣く崩れていく子供達を、由樹は何度も見てきた。佐天達よりも年を重ねている分、長くこの学園都市という箱庭にいる時間だけ、その数は増え続けていく。

あれから科学も進歩したとはいえ、崩れていく子供達は決してなくならない。中には道を踏み外し、あるいは自暴自棄になって闇への道へ落ちていく子供もいる。

由樹にはそういった子達に頑張れ、と言える権利はない。その気持ちはその子達にしかわからないもので、ましてや大人が口出して良いものではないからだ。

だけど、由樹は知っている。学園都市このまちで手に入るのは超能力だけではないという事を。

だいたいわかった。と頷いて由樹は思った事を口にした。

「そこまで自分を卑下する事はないんじゃない？」

「えっ………」

「この学生達は、普通は皆佐天と同じさ。超能力に憧れて、欲しい……けど、そこに誰かのためにとか、大切な人を守るためにとか、そんな大層な理由は存在しない。本当にテレビで新しいゲームがあつて、あれやってみたいな一程度の想いしかないだろ」

この学園都市に来る子供は、たいてい小学生だ。小学校に入学する年頃に学園都市にやって来て、能力開発を受ける。そこで幼いながらに現実を知らされ、夢をかなえるために努力を開始するのだ。

そして、心とも成長していくにつれて、才能という壁に絶句してしまう。

だから。ずっと欲しかったものだから。

「だから、佐天が能力が欲しいっていう想いは、当然のものなんだよ」

それは恥じる事もないし、他の誰かと比べる必要も、資格もいらぬものだから。

由樹はにっこ笑ってカップの横に、ついでといわんばかりに茶菓子を差し出す。

「けど、それを使うという事は、結末は知ってるんだろ？」

「……………意識不明、ですよね」

この『レベルアップバー幻想御手』の使用者、介旅初矢の末路。それは意識不明だった。『レベルアップバー幻想御手』を使用した副作用なのかわからないが、その路線で間違いないだろう。

つまり、この『レベルアップバー幻想御手』を使用してしまえば一瞬にして能力者になれるが、その甘美な時間の後には意識不明というバッドエンドが待っているのだ。

だけど、と佐天は言う。

「でも、私は……………やっぱり……………」

それでも、彼女は欲する。たとえ結末がわかっていたとしても、諦められるものじゃない。

「そっか」

由樹はそう言って、コーヒーを1口。その表情は少しだけ悲しく、寂しそうで、それでいてどこか嬉しそうな色を含んでいた。

本当のところ、そんな危ない物を子供に使って欲しくない。犯人がいるのならば、ぶん殴りたいところだ。それでも、『レベルアップバー幻想御手』のおかげで佐天の夢が叶うというのなら

子供が夢に向かって頑張ろうというのなら、それを無闇に否定して良いわけではないと由樹は思う。確かに間違ったやり方なのかもしれないが、それでも子供というのは間違った道を進むからこそ正しい道歩く事が出来る。

そう信じているから。

ちょっとしたお節介。アドバイス

「じゃあ、使っちゃおう?」

「えっ……………」

「大丈夫。誰かに迷惑をかけちゃうのはアレだけど……………夢を掴むためになら、きつと許してくれるさ」

コーヒーを見詰めて、佐天はぼつりと。

「そう、かな……………」

「もし、意識不明に陥っても、俺がすぐ起こすよ」

佐天が顔を上げると、そこには笑顔があった。

「大丈夫!」

右手でサムズアップし、子供のように無邪気な笑顔をうかべる由樹。

これは恩師から継いだもので、”納得した人間に許される行動”。これがあるから、自分は頑張っただけ。これが出来る相應しい人間になろうと。

この前、結標と上条とで夕ご飯を食べている時に、笑顔とサムズアップをしますねと尋ねてきた時に、彼女へはそう答えた。

だからこそ、サムズアップで彼女に答える。

豪語する由樹に呆気を取られていた佐天は、やがて。

「……………なんですか、それ」

ぷっ、と吹きだした。手を口に添えて、そして笑いだす。

「本当に出来るんですか？」

「大丈夫だって！ おぢさんを信じなさい！」

「ふふっ……………おぢさんって……………」

しきりに笑った佐天は、片目をすがめて愛らしく言う。

「じゃあ、お願いしましたよ？」

「ああ、任せとけ！」

につ、つと2人の顔に笑顔が広がる。

やがて天気も晴れ渡り、佐天は店を後にした。

もう何のしこりはない。シャツジャケット風紀委員を友人に持つ身として罪悪感は多少あったが、それでも由樹と話したからか身体は軽かった。

「涙子おー」

道を歩いて自分の家に戻ろうとしている途中、彼女は声を掛けられて振り返る。

そこにいたのは同じクラスメートの女子達だ。平たいプラスチックの手提げボックスを握っているのを見る限り、図書館で勉強していた帰りだろう。

「アケミ？ むーちゃん、マコちゃんも」

「やつほー。1人で買い物でもしてたのー？」

アケミの言葉にどう返そうか一瞬迷う。別段、行き付けの喫茶店に行ってきたと言ってもいいが、由樹や航真からはあまり広げると口止めをされているのだ。

「まあね。そっちは図書館で勉強？」

「うん。能力はイマイチだけど、勉強くらい頑張らないとね」

勘ぐられることなく普段通りの会話に、佐天はそうだねと返す。

通り雨のせいで濡れたアスファルトが反射し目を細めたところで、ふとむーちゃんが思い出したように言い出した。

「あーでも、なんか『レベルアップ幻想御手』とかいうのがあるらしいね」

びくつと、佐天の肩が震える。3人はそれに気付かず、話しを盛り上げる。

「あ、知ってる。何でも簡単に能力を上げられるとかで、高値で取

引されてるらしいんだよねー」

「いいなー。私ら中学生に、そんなお金持てないしー」

そうだ、と佐天は思う。彼女達も、一応能力者ではあっても無能力者《レベル0》と大差ない程度の力しか持っておらず、自分と同じように夢を見てきたのだ。

もしかしたら、由樹に話したら怒られるかもしれないが。

佐天は音楽プレイヤーを握りしめて、振り返った。

「あのね、持ってるんだ……あたし、それ」

え、と呼吸が止まるように驚く3人に、佐天は言葉を続ける。

「でもね、使ったら意識不明に陥っちゃうんだって。回復の見込みもない、本当に一瞬の夢……麻薬みたいだよね」

「涙子………?」

「だけど、あたしは使うつもりなんだ」

それはもう決めた事であり、悪い事をするという宣言。

でね、皆に聞きたいんだけど。

そう言っって、彼女は告げた。

「悪魔と相乗りする勇氣、ある?」

翌日の夜。

航真は街を歩いていた。場所は第7学区の通りで、この時間ならまだ夜遊びをしている学生で賑わっているはずの世界。

なのに、右を見渡しても左を見渡しても、人の姿が見えない。まるでゴーストタウン化したかのように、静まり返っていた。

ふと目を向けて見れば、電信柱にカードが張り付けられていた。赤い円の中に星のマークが逆に描かれていた、本来この街では見かけるはずのないはずのもの。

「……………人払いのルーン、か」

”外の世界”で見た、張り付けられている周辺から人を追い出そうとする文字通りの効果を発揮する魔術。

ちっ、と舌打ちして抱えていた茶色の紙袋と紫の布で撒かれた長い物を降ろすと携帯電話を取り出す。電波は予想通りの圏外であり、顔を上げて見れば学園都市特有の巨大モニターも沈黙していた。

そして、航真は微かに人の気配がする方向へと進む。その先にこの術を敷いた魔術師、おそらくこの前の赤髪神父がいるはずだ。

だが、少し進んだ先に広がっていた光景は、正直彼が想像していなかった図だった。

地面にはいつくばっているツンツン頭の上条当麻と、その彼に長刀を叩きつけている長身の女性。

白いシャツをまくりあげて腹部を露出し、ジーパンは右足はしっかりと長いのに左足側は短く飛脚を露出しているという謎の格好。

だが、その気配から彼女も魔術師なのだろう。扱う力は別でも赤神神父と似た気配だ。

「私達だって頑張った、頑張ったんですよ！ 春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし、思い出を作って忘れないようにたった1つの約束をして、日記や写真を胸に抱かせて！」

何度も上条を長刀で殴る彼女の表情は、心底感情をぶちまけているようだった。本来ならばすぐにでも割り込みを入れて彼を助けるべきのはずなのに、航真にはそれが出来なかった。

「……………それでも、ダメだったんですよ」

ぎりっと歯を食いしばり、心の底から声を絞り出すように彼女は

言った。

「日記を見ても写真を見ても……あの子は……インデックス禁書目録はゴメンなさい、って言うんですよ。それでも1から思い出を作り直し、何度繰り返し返しても、家族も、親友も、恋人も……ゼロに還る」

突然出くわした状況で、ほんの少しの言葉を聞いたて、彼はなるほどとこっそり航真は息をつく。その言葉で全てを知る事は出来ずとも、だいたいあらすじを読み取る事は出来た。

彼女も、そしてあの赤神神父も、元々はインデックスと深い関係にあった。それは今言った家族だったのか、親友だったのか、恋人だったのかはさておき、親密な関係だった。だが、インデックスは”何度も”記憶喪失し、思い出を何度も作り直そうとした。

けど、彼女達は諦めた。何度も何度も思い出を作って、そして挫折してしまったのだろう。

なぜインデックスが何度も記憶を失う事態になっているのか、今駆けつけた航真には理解出来ない。だが、きつと上条は話しを聞いているのだろう。

「……………もう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて不可能です！」

ふいに、航真は口元を緩めた。それは決して彼女達を見下したわけでも、侮辱したわけでもない。

きつと彼女達は、それこそ血が滲むように頑張ったのだろう。何度も何度も、記憶が失われる度に未来はそうではないと信じて、挫

折しそうになりながらもインデックス《かのじよ》のためにと。

だが、それは結局叶う事なく、失敗に終わってしまった。

それでも、航真は知っている。その話しを聞いたところで、上条当麻という少年はきっとこう言うのだろう。

「ふざ、けんな……………」

と。

「んなモンは、テメエの勝手な理屈だろうが。インデックスの事なんざ一瞬も考えてねえ、ただの現実逃避！ 笑わせんじゃねえよ、テメエの奥病をインデックスに押し付けてるだけじゃねえか！」

ほんの一瞬だけ、航真はインデックスと時間を共にした。上条がなぜ、インデックスと出会ったのかは知らないが、彼は自分よりほんの少しだけ、長い時間を共に過ごしてきたのだろう。

そして魔術師たちは、そんな上条よりも長い時間を一緒に過ごしてきた。必死の決意が挫折してしまうほどに。

だけど、ほんの少しの時間を一緒に過ごしたただけの上条だからこそ、その選択は許せないのだろう。

それが一番正しい選択だと絶対に認めない。認められない。認めたくない。

「……………っ、なら……………どうすれば良かったんですかっ！」

ボロボロの上条に、魔術師は無情に長刀を顔面に打ち付ける。もうボロボロで、動くのも意識を保つのも辛いレベルの痛みが走っているはずなのに、上条は長刀を掴み魔術師を睨んだ。

身体はとっくに限界を超えているのに、動く。

きつともう、”そんな”魔術師には恐怖も緊張も、上条には感じないのだろう。それは勝機が見えた訳ではなく、ただ純粹に、心の有様で。

「テメエらがもつと強かったら……………もつとウソを貫き通せる偽善使フォックスいだつたのなら！ 1年の記憶が失うのが怖かったら、次の1年でもつと幸せな記憶を与えてやれば！ 記憶を失うのが怖くないくらの幸せが待ってるとわかっていれば、もう逃げ出す必要なんてなかった！ たったそれだけのことだろうが！！」

ほとんど暴論に近い説教だ。上条は魔術師達ではないのに、まるでわかりきつたような事を言う。

だが、それは彼女の胸の奥底に眠っている魂に突き刺さるには十分だった。

「答える、テメエは力があるから仕方なく人を守ってたのかよ！？ 違うだろ、そうじゃねえだろ。守りたいものがあつたから力を手に入れたんだろ！」

ボロボロの腕で刀をを掴み、上条は魔術師を睨みつける。

「テメエは何のために力をつけた？」

ざっと、魔術師が一步足を退く。まるで、恐怖するように。

「テメエはその力で、誰を守りたかった!？」

されど、幻想の破壊者は止まらない。

「だったら、テメエはこんな所で何やってるんだよ!？」

刀を握っていた上条の手が、ずるりと力が抜けたように崩れていく。

当然だ。あれだけボロボロで、さらに攻撃を受ければいかに喧嘩慣れしている上条とはいえ、ただの学生には辛いダメージだ。

「それだけの力があって、これだけ万能な力を持つてるのに……なんでそんな……無能、なんだよ……」

そして、がくりと上条は言葉を紡ぐことが出来ずにその場に倒れこんでしまった。

包み込むのは静寂。空しい、たった少ししかない少年に正論を叩きつけられ、今まで守りたかつたものを傷つけてしまった記憶と罪に押し潰されそうになる魔術師。

まったく、と息をついて航真は殺していた気配を解き放つ。

同時にはっとなった魔術師は刀の柄を掴み、こちらに振り返った。

「……………何者ですか？」

「通りすがりの店主だ。覚えなくていい」

この言い回しは藤井がよくしている事だが、移ったか。そんなどうでもいい事を考えながら、敵意がない事を示すように買い物袋をかかげて、倒れる上条に眼をやる。

「買い物帰りに常連客がぼこられている場面に出くわした。ただそれだけだ」

「信じられませんね。人払いのルーンを刻んでいるこの空間で動けるといふ事は、魔術師であるという可能性を外すことは出来ません」

「ほう、ただのガキにあれだけ言いたい放題されていた割には冷静だな。良い判断だ」

ぎりっ、っと柄を握る力が強まる。そこから放たれる居合いはまさしく閃光のごとく、剣閃すら見せぬまま目標を断つことが出来るのだらう。

対峙しただけで、彼女の实力はわかる。魔術師というとRPGの遠距離支援型というイメージが浮かぶが、彼女は間違いなく近接に特化したタイプだ。

だが、それでも航真には遠く及ばない。

「やめておけ。お前の剣は俺に届きはしない」

次の瞬間には、上条を担いだ航真は魔術師の背後に回り込んでい

た。それは真後ろではなく、10歩ほど離れた地点で、背を向けて歩いている。

まるで、”歩いて通り過ぎたように”。

ありえない現象を目の当たりにした彼女が絶句する声が聞こえるが、航真には構っている暇などない。

早くこの主人公の手当てをしなければ、”救われる物語”も救われない。

「な、ん……………そうですか、貴方がステイルの報告にあった謎の能力者……………！」

驚愕のあまり語句を紡ぐことも難しいのだろうが、航真は歩きながら微かに振り向く。

その瞳にはつきりとした敵意を孕ませながら。

「だから、どうした。俺はこいつを保護したいだけだ。お前ら魔術師と”今”戦事を構える気はない……………が、どうしても今すぐにやりたいのなら、遺書を書いておくことをお勧めしよう」

魔術師という立派な殺し屋を相手にしてその言葉は、けっして挑発等ではなくただ事実を述べているだけにしか過ぎない。

「随分な自信ですね……………貴方1人で私を圧倒出来ると……………？」

「感じているはずだが、聖人。この埋めようのない烈魄の気の差くらいな」

聖人。それは魔術世界で20人といない超人である。詳しい話を航真は知らないが、認識で言えば身体能力が常人のソレを遙かに上回ったある意味で人間兵器。

だが、その諸説を知っていたとしても航真には敗北というイメージは浮かべる事はない。

自分は聖人よりも強い。航真にとってそれは自信でも自惚れでもない、ただの事象に過ぎない。

「……………っ！」

実力の差は刃を交えずとも、達人レベルに達している物ならば、本人達が放つ殺気や威圧感。烈魄の気で判断出来る。

そして、彼女は察したようだ。それ以上何もいわず、ただこちらが去るのを見届けるつもりらしい。

「……………さあ、始まるか」

航真は静かにそう呟きながら、担がれて眠る少年を見詰める。

魔術と科学、その狭間にいてその次元から遠のいた場所に位置するであろう存在。

それらが彼を中心に交わった時、物語は始まると。

「お前は間違えるな。上条……………かつての主人公ヒーローだった奴からの
アドバイス
お節介だ」

酷く呟く航真の言葉は、意識のない少年に届くはずがない。

それでも、不思議と少年の表情は柔らかなものになっていた。

10話：2人のお節介へアドバイス（後書き）

お久しぶりです、グラニです。

よくよく見たら最後に投稿してから3カ月も経ってたんですね、気付かなかったです。

卒業研究もひと段落ついたものの、今だ就職出来ずにこのまま流されてしまうのか日々思いつつ、『アンティック珈琲店 - カフェ -』を営んでる由樹と航真すげーなあと我ながら思ってしまった。作者にはまったくそんな知識はありませんが、どちらも経営などはちゃんと学んでいるし調理師免許も取っているという設定ではあります。リアルで考えたら20代前半の2人が喫茶店を運営しているってすげえ事だよなあと、しみじみ思います。

さて、いくつもあるとあるの二次作がある中で、佐天さんに『^{ベルアップ}幻想御手』を使わせるか使わせないかはけっこうその作品によって変わります。

オリ主の説得で強い気持ちを持ち、能力よりも大切なことに気付いてあるいは思い出して『^{ベルアップ}幻想御手』を捨てるルート。原作通り結末を知らずに好奇心で使ってしまった、オリ主や初春に発見されるルート。

その中で自分は「敢えて結末を知りつつ、能力を手にする」という展開を選びました。

アニメでも『レベルアップバー幻想御手』を使用した学生が暴走状態にあると白井から聞いて1度は戸惑った彼女の中で、きつと葛藤が生まれたと思います。これを使う事は悪い事なのだと。

だけど使ってしまった。能力が欲しかったから。回想でも幼い彼女が超能力者になるんだと胸を張っているシーンがありました。自分なりにどうしても欲しかった憧れだったのではないかと解釈し、敢えてを選びました。

もちろん、倒れた女の子を主人公が助けるといふ展開にも持ち込みやすいというのと、彼女が『レベルアップバー幻想御手』で昏睡する事により『ベルアップバー幻想御手』編で登場した鋼盾や介旅といった被害者たちと上条さんや藤井を絡めやすくする、という意味もあります。

一番の理由としては佐天にとって超能力はそれだけの価値があった、ということでした。

そして、ようやく登場しました神裂香織さんじゅうはっさい。

このシーンはおそらく禁書初の説教シーンとして、けっこう好きです。言っている事はほぼ暴論に近い、神裂達だって頑張ってるってその結果挫折してしまったわけで上条は正論を押しつけている感じです。

2巻のアウレオルス・イザードが鎌池先生曰く「失敗した上条当麻」だと公言している通り、もしかしたら上条さんも神裂達のようになっていたかもしれないのに。

もちろん、もしもの話しに過ぎませんが、それをたった数日しか

一緒にいなかった上条さんに言われた神裂達は心に憤怒を感じたかもしれません。少なくともステイルの上条さんに対する態度はそこから来ているのかもしれませんがね。

ヒーローになれなかった少年のヒーローへの嫉妬、といったところでしょうか。

ちなみに、少しだけ戦闘みたいな感じで航真と神裂が激突しましたが、その中で出てきた烈魄の気というのは完全中二設定です。まあ霊圧やら気などと思って頂ければ、幸いです。

さらに航真の戦闘能力ですが、ネタバレすると

身体能力は人間より少し上、だけど速さは神裂以上。

といった感じですよ。

はっ、思わず語ってしまってあとがきが長くなってる!?

では、このあたりで。感想だけではなく文章、ストーリーなどの評価もして頂けると凄く嬉しいです。

ぜひ、これからも応援よろしく願います。

11話：7月15日

佐天が友人たちと『レベルアップ幻想御手』を使用し始めてから3日後。

上条当麻が航真に救われてから2日後。

すなわち、7月15日。

この日から全てが始まった。

魔術と科学が交わる時、物語は始まる。

本日は晴天なり、とブログのためにメールを使って書き込んでい
る最中、どっがらがっしゃーんという音に佐天は顔を上げた。

見れば警備ロボット の代わりに なったゴミ箱が無残に散らばっているのを見て、軽く息を吐く。

「おおつ。前は空き缶を持ち上げるのにも苦勞していたはずの私が、まさかゴミ箱を持ちあげられるようになるなんて……よし、次は自販機を……………」

「警備会社に怒られるって。というか、それ自分で片づけてよね？」

わっはっはと腰に手を当てて笑い上げるアケミに対して、呆れたようにむーちゃんが言っている光景が目に入る。

アケミは元々『テレキネシス念動力』の能力を持っていたが、大した能力ではなかった。それが『レベルアップ幻想御手』を使用して3日でこれである。

3人は佐天の誘いに、乗った。つかの間の夢だと知って、最終的に意識不明になると知っていて。

悪い事だとはわかってる。友人にジャッジメント風紀委員の初春がいて迷惑をかけてしまう事もわかってる。

嫌われるかもしれない、その覚悟もあった。

だけど、それでも佐天と同じように、能力が欲しかった。

だから。

「ねえねえ、涙子はどんな感じなのさ？」

「あたし？ あたしは………ほら」

マコちゃんが詰め寄りながら言ってくるので、携帯をポケットに仕舞いこんでその辺に転がっているこの葉を浮かしてみる。

佐天が発現した能力は『空力使い《エアロハンド》』。触れた箇所レベルアップに空気の噴射点を作り対象を自在に操るという能力だが、いかに『幻想御手』レベルアップといえど軽く動かす程度しか力は出せないようだ。

おお、と感動する面々を余所に、佐天は1つの杞憂を胸に抱いていた。いや、佐天だけでなく3人もそうであろう。

いつ、自分達は意識不明に陥ってしまうのだろうか。

それは今日中なのか、明日か、1ヶ月後。

そして、目覚める事は出来るのだろうか。

「おつ、今日もやってるみたいだな」

ふと再び声をかけられたので4人が振り向くと、そこにはいつしか藤井と鋼盾がいた。彼らも『幻想御手』レベルアップを使用している最中だと知ったのは、つい昨日の話だ。

藤井は別段、能力に興味はなかったが鋼盾が能力を欲し、そのまま放っておくことも出来ずに付き合っているらしい。

2日前。つまり『幻想御手』レベルアップを使用し始めて翌日、たまたまこの公園で会ったのだ。

「あ、藤井さん」

「慣れてきたみたいだな」

さきほどのアケミが能力を使っているのが見えたのだろう。感心したように頷いてくる藤井。

「そう言う藤井さんはどうなんですか？」

最初は不良だったから、という理由で一瞬接し方を躊躇っていたアケミ、マコちゃん、むーちゃんも慣れてきたのが普通になってきた。

マコちゃんにそう尋ねられた藤井は、一瞬だけ頬を引き攣らせて明後日の方向を見やる。

「『レベルアップ幻想御手』を使っているんだけど、どういわけか能力が発現しないみたいなんだ」

代わりに答えた鋼盾に余計な事を、といわんばかりに睨みつける藤井は肩を竦めて右腕を見下ろした。

そんな彼を察したのか、鋼盾が腰に手をあてながら息を吐く。

「やっぱり、絶対破壊レベルのせいかな？」

「っつても、これ天然だぜ？」

「そもそも、天然っていうのが信じられないんだよなあ。いや、信じるけどな」

何を言っているのかわからないが、そんな話しをしているうちにふとむーちゃんが嘯く。

「鋼盾さんはどんな能力を？」

「佐天さんと同じ、『空力使い《エアロハンド》』さ」

そう言っただけで転がっている複数の石に触れて、軽く宙に浮かせる。

おお、『レベルアップバー幻想御手』の成果が出ていると注目する中で佐天は再び携帯電話に目を向ける。

『レベルアップバー幻想御手』を使用している事は、初春には当然伝えていない。使用してからこの3日間は連絡を断っており、『アンティック珈琲店・カフェ・』にも顔を出していないのだ。

彼女の事だ。心配しているだろう。由樹がこの事を伝えていとも思えないし、ここでこんな事をしていとは誰も思わないだろう。

「どうした？」

「あ、藤井さん……………」

その仕草に気付いた藤井が声をかけてきたので、初春にこの事を話そうかと告げた。すると彼は数瞬悩む仕草をしてから、肩を竦めた。

「めっちゃ怒られるだろうな。で、下手したら独房行きだぜ？」

「ですよ……………」

「まあ、俺は慣れてるから良いけどな」

さらりと怖い事を呟く藤井に、あははと苦笑するしかない。

「で、満足出来たのか？」

一瞬、佐天の返答が詰まった。

自身に能力が芽生えて、木の葉を時きあがらせたのを観て、ふと佐天の中にしこりのようなものが出来た。

何かが違う。自分が求めていた”能力”^{あこがれ}とは、これではなかった。決して具現した能力に文句があつたとかではなく、日々成長していく力に不満もないはずなのに。

まるで今まであつたはずの”何か”が、胸の中から抜け落ちたような感覚。

それを察しての言葉だったのだろうか、藤井が放つた言葉はもしかしたら的を得ているのかもしれない。

「満足、ですか……………」

「ああ。なんか、こつ……………振っ切れたって感じがする」

ベンチに座りながら告げる藤井に、佐天は自分の手をまじまじと見つめる。巻き起こる風を目にし、佐天はどうしようもない感情に包まれる。

「そう、ですね……………もしかしなくても……………」

「アケミちゃん！」

その時、どさりと倒れ込む音とともに上がったむーちゃんの声に、佐天と藤井は振り返った。

そこにあっただのは、琴切れたように倒れるアケミと集まるまこととむーちゃん。持ちあげていたであろう空き缶が散らばり、はっとなつて2人も駆け寄ろうとする。

だが、その瞬間ずきりと頭が痛みだした。そして四肢に力が入らなくなり、地面に膝をつく。

「ぐっ……………!？」

「……………幕引き、かな……………」

同じ症状が出てきたのか、アケミを抱き上げようとしていた鋼盾も、むーちゃんも、マコちゃんも、藤井も、皆倒れて行く。

これが『レベルアップバー幻想御手』を使用した代償か。何と呆気ない幕引きで、これほどまでに恐怖を抱く感覚だったのか。

『レベルアップバー幻想御手』使用者の皆が、この痛みを身に刻んできたのだろう。

覚悟はしていた。だが、これほどの痛みだったのは。

「……………っ！」

「はっ……さて、と。後はあのバカに任せるとするか」

仰向けに倒れながら、まるで恐怖していないように嘯く藤井に、佐天は膝をつきながら倒れまいと我慢し目を向ける。

そして驚く。彼の表情には、本当に恐怖などなかった。もう眠いから寝るわ、とでも言うかのような、というより本当に眠そうな表情だ。

「怖く、ないんですか………?」

「まあー怖いっちゃ怖いけど、今更どうこうしても仕方ないし」

「ただ、と彼はどういいうわけか倒れたままで視線を上にし、笑った。

「こんなくだらない幻想を、ぶち殺せる大馬鹿を知ってるからな」

「え………?」

「いつも不幸だ不幸だと嘆いてる癖に、周りで不幸があったら自分から首を突っ込む超お人よし」

その言葉で佐天の脳裏に1人の少年が思い浮んだ。黒髪ツンツン頭で、この前魔術師から1人の少女を救ったという。

その右手に、その気になれば神様の奇跡だシステムってぶち殺せる力を秘めた少年。

「ああいう奴がいるなら、すぐに起きれるさ………」

そう言った彼は眼を閉じ、それきり何も言わなくなった。

この場で意識を保っているのは佐天だけ。それもすぐに尽きるだろう。

覚悟していた避けられない運命。けれど、恐怖が佐天を包んでいく。

もう限界だ。四肢に力が入らず佐天の身体は崩れるように倒れそうになり、

「まっ、しょうがないよな。そういうの覚悟してたんだもん」

また、あの声がした。ほぼ同時に抱きかけられるようにして、佐天の身体は地面に横たわる事はなかった。

かすれていく意識の中、佐天は確かに聞いた。

「約束通り、すぐに起こしてあげる。だから、今は眠りな」

まるで、心が静かになって行くようだった。その一言で、身を包んでいた恐怖が音とともに引いていき、自然と口元が緩んでいく。

「……………ごめん、初春」

その言葉を最後に、佐天の意識は途絶えた。

11話：7月15日（後書き）

今回から内容を短くして、出来るだけ連続で投稿出来るようにしようかと思えます。

かと言って、年内の投稿はこれで最後になります。

今回は『レベルアップ幻想御手』使用者達の意識不明に陥る場面を描いてみました。

漫画は持つておらずアニメ知識でしかないのですが、意識不明に陥る場面はなかった気がします。もし、そうだったらこんな感じかなあ、と。

『レベルアップ幻想御手』事件に上条さんが参加していたら、きっと彼を知る人物が使用者になって意識不明になっていれば、安心して（？）眠る事が出来るんじゃないでしょうか。

右手に神様の奇跡だつてぶち殺せるんだかた、というのはただの期待しすぎでしょうか。

そんなこんなで、『レベルアップ幻想御手』事件解決へと、ようやく動き出します。

同時に『彼』が1人の少女の幻想をぶち殺して、死ぬ日でもありません。

年内はこんな感じで終わりますが、来年もよろしくお願いします。

よいお年を！

はあ、風邪ひいた……………

12話：ほんの少しだけ、背中を支えてあげたいんです

ばん、とはるか年下の少女に胸倉を掴まれるのは良い気がしないが、由樹はそれを無言で受け入れた。

目の前で胸倉を掴んでいるのは常盤台の超電磁砲レールガンこと御坂美琴。

公園で佐天や藤井達が『レベルアップ幻想御手』を使用して能力の訓練をしているのは、知っていた。自分で進めておいていつ意識不明になるやもわからぬ彼女達を放置しておくほど、由樹は無責任ではない。

なので定期的に見て回っていたら案の定、意識不明になったので救急車を呼んだわけだ。そして病院へ向かう途中、病院側から佐天の学校に連絡がいき、そのついで初春に連絡がいき、さらに御坂や白井にも話しが届いたというわけだ。

初春はこの場にはいない。何でも『レベルアップ幻想御手』の原理の糸口がつかめたらしく、以前『アンティック珈琲店 - カフェ -』へ訪れた

木山晴美という科学者の元へ足を運んでいるらしい。

だから佐天を御坂達に任せて行く初春に、由樹は佐天が漏らした言葉を告げておいた。きつと、彼女ならその意味を察してくれるだろう。

そして御坂にだいたいの事情を話してみると、問答無用で胸倉を掴んできたというわけだ。

「お、お姉さま……………」

「ふざけんじやないわよ！ 『^{レベルアップ}幻想御手』が危険な物だとわかっていながら、そんな無責任な！ ただ悪戯に被害者を増やしただけじゃない！」

病院ではお静かに、という紙が貼られている廊下で御坂は声を荒上げる。

決して彼女は悪くない。そんな事はわかっている。由樹が間違っただことをしているというのも否定はしない。

「本人達はちゃんと了承した。最終的には意識不明になるというのも知って、佐天は『^{レベルアップ}幻想御手』を使っただ」

「そんなことをして、何の意味があるというの！？ 意識不明になつて、ただ苦しいだけじゃない！」

そんな辛い思いをして、手に入れる価値なんて……………！」

「おい」

瞬く間に吐き出す罵倒を止めて、由樹は御坂を睨みつける。大人げないとかではなく、その発現だけは取り消させたかった。

「俺が間違った事をしたのは否定しない。むしろわかっててやったさ。大人として間違ってる、そんなことはクソガキのお前に言われる前からわかってるよ」

口調も普段のような穏やかなものから、航真のように荒々しい口調になっている事に御坂達は驚いた顔をする。

「俺を罵倒したきや罵倒しろ、受け入れてやる。だがな、あいつらが痛い思いを覚悟してまで進もうとした道に価値がないと言ってみる。それは覚悟したあいつらに対しての冒涜だ」

「っ……………！」

はっと、御坂の胸倉を掴んでいた手から力が抜ける。

友人である佐天を含めて、彼女は酷い物言いをしてしまった。それを頭に血が上っていたとはいえ言ってしまった事に、御坂はバツの悪そうな顔をして視線をさまよわせる。

「……………確かにお前の努力は凄い。目の前にハードルを置かれたら飛び越えなきゃ気が済まない負けず嫌い、悪くはないさ」

けどな、と区切って由樹は言う。

「ハードルの前で立ち止まっちゃう奴だっているんだ。それをズルして乗り越えようとした奴らが正義なわけではないが、そうまでして乗り越えたかった”覚悟”は、踏みにじって良いわけがない」

「……………私は……………」

御坂は真つ直ぐな子だ。壁が立ちふさがればそれを壊し、真正面から乗り越えて行く主人公。

だが、その中身は中学2年生の女の子だ。気をつけなければならないとわかっていても、他人を傷つけてしまう刃を振るってしまう。

それはこれから、彼女が学んでいかなければならない事。能力者としてでも学生としてでもなく、1人の人間として。

「……………まっ、間違つたら反省すりゃいいさ」

「まったく、病院内は静かに願いたいものだね？」

そんな声をかけられ、3人は振り返る。

そこにいたのはカエル顔の医者。御坂は怒られた直後だというのにキュピーンと目を光らせ、白井が呆れた顔をした。

「ちょっと、その子達に用があるんだけどいいかな？」

「ええ、わかりました」

カエル顔の医者に頷き、御坂と白井を見やる。彼女達は瞬時躊躇う様子を見せたが、素直に医者の後について行った。

さて、と由樹はこれからどうするかを思案する。佐天をすぐに起こすと豪語したからにはここでぼうつとしているわけにもいかず、

とりあえず腕を組んでベンチに腰を下ろす。

『レベルアップ
幻想御手』。聞いただけでレベルを上げさせ、能力を開花させるまさしく麻薬のようなもの。

どうやってそれを可能にさせたか。通常、能力開発というのは薬品などを投与して脳波を刺激なりなんなりを加え、『自分だけの現実』パーソナルリアリティを確立させることによって、能力は発現するものだ。

それを聴覚だけを刺激する事で、レベルを上げるといえるのはかなりというか不可能な気がしなくもないが。

「……………待てよ」

もし、1つの刺激で複数の刺激を得られるのが可能だとしたら。例えば、”共感性”。

イチゴ味のかき氷を例にしよう。一気にがつつ食べると、頭がきーんと痛む現象が起きる。冷たいという感覚とともに痛みを感じたわけだ。

『レベルアップ
幻想御手』は聴覚を刺激する事で他の感覚に刺激を与えという事ならば。

「いやいや、五感を刺激したところで脳波を変化させても、それは『自分だけの現実』パーソナルリアリティの確立に至るはずがない」

『自分だけの現実』パーソナルリアリティというのは言葉通り、ある意味で自分の内側に存在する定義のようなもの。

それを曲程度で確立させることなど。そもそも、それだけでは能力の開花は可能でもレベルを上げる事には繋がらないじゃないか。

その時、佐天達が眠っている病室から看護婦が出てくる。

「そういえば、この前ネット通販で新しい健康商品があったのよ」

「ああ、この前のね。でも味気なさそうだったすねー」

「……………ネット？」

今の会話でどうも、頭でがちりと歯車が一致したような気がした。

もし、もしもの話しだ。専門の学問を受けたことがないし俄知識でしか語れない由樹だが、仮説を立てて見る。

聴覚により五感全てが刺激され脳に脳波を送り、”ある一定の脳波パターン”を刻めたとしよう。そして、それを何かを媒体にネットワークを形成すれば。

膨大な演算を複数のコンピュータを並列につないで同時に演算処理を行えば、ある程度の処理は短縮出来る。それと同じで単独では弱い能力しか持っていない者でも、ネットワークと一体化することで処理能力が上がり、同系統の能力者の脳波パターンを共有化することにより高度な能力を扱えるようになる。

つまり、意識不明の原因はネットワークの演算処理に脳の活動を使っているから。

「だが、そのネットワークを形成しているのは何だ？ それに、そ

んなことをして開発者に何の利益がある？」

もっとも謎は、『レベルアップ幻想御手』を使用してネットワークを形成させた目的。それによって何のメリットがあるというのだ。

ベンチに座っていた由樹は立ち上がり、自販機コーナーへ向かう。この夏場ずっと考え込んでいると、いくら院内とはいえ干上がってしまいそうだ。

いつもは滅多に呑まない炭酸ジュースを買って飲みながら廊下を歩いていると、ふと病室の前で足を止める。

藤井晃。

科学では証明しきれない、上条と同じような摩訶不思議な能力を持った無能力者『レベル0』。『レベルアップ幻想御手』等には興味はないと思っていたのに、友のために平然と一緒に地獄の道を進んだ馬鹿者。

何で俺は能力が発現しねえんだ？

不意に悪戦苦闘しながら呟いていた、藤井の声が蘇る。他の子達はずぐに何らかの能力に目覚めたというのに、この3日間、藤井は能力の兆しがなかった。

もとより彼には『絶対破壊<ツールハンマー>』という能力を有しているが、上条の『イマジンブレイカー幻想殺し』と同じ能力としてみなされていないかった。

そのためか、彼はAIM拡散力場を発していない。能力者達が無意識のうちに発している微弱な電磁波をネットワーク形成の媒介に

していれば、ネットワークを作り事は可能かもしれない。

「そうか。AIM拡散力場か」

うん、ちょっと待て。その理屈だと藤井はネットワークに繋がっていない事になる。ネットワークの一分になっていないのだから、意識不明に陥るのはおかしいはずだ。

「何だ、何か変だ………?」

「あ、その難しい顔は景山君じゃない」

何だその表現は、と思わず突っ込みそうになりながら由樹は振り返った。そこにいたのは書類を抱えたナースさん。その胸にある名札はなかなかのランクに位置する人を示す色があり、その人物を見て彼は驚きの顔をする。

「あ、浅井さん!？」

浅井美佳。昔からの顔見知りで当時は新人だったが今ではナース長の肩書きを持つとは、時代は早いものだ。

「久しぶりだねー。元気だった?」

「はい。あの節はお世話になりました」

軽くお辞儀をして由樹は言葉を紡ぐ。

「ナース長になられていたなんて、驚きです」

「こつちもだよ。まさかまたこの病院で会えるなんてね……………」

そう言う彼女はどこか寂しさを含んだ顔で、そつと藤井の病室の扉を見詰める。

「まだ、戦ってるんだ」

「……………はい。それが俺の、俺達の罪ですから」

静かに告げて、由樹は藤井の扉を見詰めた。

「1つ、俺は周りも”同じ”だろうと決め付けてしまっていた。2つ、特別だと勝手に思い浮かんでいた自分らだけで進んでしまっていた。3つ、本当に大切なものを見失っていた。まだまだ、上げたらキリがないくらい、俺達は罪を犯していた」

「……………」

「今回の件とはまったく関係ないとしても、子供達が傷つくのを黙って見過ごすなんて出来ません。あの人から受け継ぎ、おやっさんから学んだ意思です」

子供達は学び、その過程で間違った道を進む。それでいい。間違ったのなら間違ったと知り、それを学んでいけば。

だが、今回の事件はどうも違つと脳裏の奥底でささやいている。それは勘、直感といった類でおそらく科学の街では信用されないものかもしれない。

だけど、この事件は誰かが仕組んだ。その裏にあるのは悲劇か狂

劇かはわからないが、わかっているのは幕を下ろさなければならぬ
ということ事。

「……………相変わらずイケメンな事を口からベラベラと漏らすね」

そう言つと浅井は書類の中から小さめの紙を取り出し、差し出し
てきた。

「今日、貴方が運んできた佐天という子の御家族から何があったの
かという説明を要求されています。戦いに行く前に、説明してあげ
て」

病院側では何が起こっているのは把握出来ていないのだろう。

由樹が頷いてその紙を受け取ると、浅井はまるで放り投げるよう
にそのまま由樹の横を通り過ぎて行く。

由樹は通路脇にある公衆電話へ赴き紙に書かれている番号を入力
する。

『……………はい、佐天です』

「あ、佐天涙子さんの御家族の方でよろしいでしょうか？ 私、涙
子さんがいつも来てくれる喫茶店の店長で、景山由樹と申します」

『喫茶店の……………？ それよりも、涙子は！？』

電話に出たのは妙齡の女性、おそらく佐天の母親であろう。優し
いそんな声色だったのが焦りと心配の孕んだ声になり、由樹はふと
安心の息を漏らす。

それは娘を心配する、親の声だ。優しく、いつも遠く離れている我が子の身体を心配し、元気に育ってほしいと渴望する。

「涙子さんの容態は、今現在昏睡状態にあります……………今のところ、回復する見込みはありません」

『そんな……………!』

愕然として、もしかしたら崩れ落ちているかもしれない。そんなイメージが広がったが、今ここで嘘をつくのは大人のする事ではない。

「……………ですが、必ず起こして見せます。あの子とそう、約束しましたから」

そして少し間を置いて、由樹は嘯いた。

「……………あの子は、ご両親のご期待に応えようと頑張っていました」

『え……………?』

「能力に目覚めないまま、送り出してくれた御両親を喜ばせようと……………でも、どんなに頑張っても成果が出ずに、落胆してしまい、その結果……………あの子は意識不明になってしまったのです」

それは、かつて淡希と一緒に聞いた佐天の思い。本当は証してはならない、彼女の口から直接伝えなければいけない事だけだ。

由樹は、ほんの少しだけ彼女達の背中を支える。こんなにも優しい御両親を持つ佐天に、ほんのちよぴりの嫉妬をしながら。

「御両親がどういふ思いで涙子さんを学園都市に送ったのかは、私にはわかりません。ですが、あの子なりに頑張つて、間違つているとわかりつつも能力懂れを手にしたくて、あの子は禁断の果実に手を伸ばしました」

それは麻薬のようなもの。甘美で、綺麗で。だけどほんの一瞬、まさしく夢のような、夏の通り雨のような刹那の時間。

「もし、よろしければご両親様の口から、あの子に言ってあげてください。御両親様が、あの子に臨むことを……………」

『……………どうして、そこまで娘を？』

「あ乃子のように絶望した子を、私は知っています。壁にぶち当たつてしまつて、挫折してしまいそうになる子を。そして、そういう子こそが、壁を乗り越えた時には強くなれる事を知っていますから」

由樹は、昔から見てきた。そういう子の悲しい顔を。

立ちふさがつた壁はその子自身が乗り越えなければ意味がない、いわば試練だ。そして、それは時とともに聳え立つ。

その努力をあざ笑うようにしては、いけない。誰にもそんな権利はないし、手を伸ばしてはいけない。見守るしかないのだ。

だけど、立ち上がるうとする子供達を誰かが押さえつけているというのなら、そのせいで涙を流しているというのなら。

そいつらのせいで誰かの涙は見たくない。皆に笑顔でいてほしいから。

「だから、ほんの少しだけ、背中を支えてあげたいんです」

『……………そう、ですか』

ふっと、母親の声がやわらかくなる。

『娘を、よろしくお願いします』

「はい。目覚めたらまたお電話しますので」

そう言って、由樹は電話を切った。

母親にまで起こす宣言をした以上に、早急にこの事件を解決せねばならない。

「まったく、相変わらず厄介事を持つてくるね？」

「先生……………」

カエル顔の医者。一緒だったはずの御坂達の姿は見えないが、いつものように白衣のポケットに手を突っ込んでいる名医は昔と変わらぬ姿をしていた。

「あの子達にも言った事なんだがね？」
『レベルアップ幻想御手』には……………」

……

「特定の脳波パターンが組み込まれていて、それがネットワークの媒介を成している、でしょ」

「昔と変わらない鋭さだね？　きっと彼女達なら犯人に行きつくだろうね？」

それと、とカエル顔の医者は告げた。

「君の相棒が追っている彼が、動き出したようだよ？」

「そう、ですか……………」

ふう、と息を吐いて由樹は踵を返す。

御坂達が犯人に行く着くというのなら、そこではド派手な祭りが始まるだろう。なら、端末の前でキーを叩いて探すより、実際に街へ出て探した方が手っ取り早い。

「行くのかい？」

「ええ。年がいなく暴れてきますよ」

短くそう返し、由樹はカエル顔の医者の前から去る。

昔のように、また怒られる結末を思い浮かべながら。

「生きて帰れよ。生きている限り、僕が何とかする」

昔と同じ言葉を、その背中に受けて。

12話：ほんの少しだけ、背中を支えてあげたいんです（後書き）

みなさん、あけましておめでとございます。

2012年。本来ならばまだ就活が成功していない自分ですが、半ば諦めモードですがもう少し足掻いてみようと思います。

今就職しなかったら確かに後々苦労しますが、現段階で自分はまだ長生きは出来そうですから。

あの震災で亡くなった同い年の人達は、もう何も出来ませんから

.....

さて、今回は由樹さんが探偵ばりに閃いています、彼ははそれほど天才というわけではありません。

ただ単に上条さん並のお人よしと、子供が大好きなだけです。そこに年齢や外見は関係なく、頑張っている子だって捻くれている子だって受け入れる。

だけど、昔から勘の鋭い、という感じです。

といっても、ほとんどご都合主義で普通はあれだけのヒントを元

に全てを説明するなんて無理にひとしいですが。

今回は由樹の大人としての面、佐天さんのご家族の面を描いてみました。何分、自分もまだ大人とは言い切れないですが、大人というのは行動には必ず責任がついてくるもの。

佐天さんの両親が彼女をとて心配する良い両親だというのは作中の回想でもわかる通りで、きっと娘が意識不明になったら心配になって電話をかけてくるんじゃないだろうか、と思いました。（もっとも原作では学園都市側はその事を御両親に説明などしていないだろうけど）

当然、どういふ事が説明を要求するだろうし、それに対する説明を要でしょう。

ある意味で、学園都市の子供キャラの保護者の役割を任せられるのは由樹だけかな、と。

そういった想いで彼を描きました。

御坂に関しては超能力者としての優越感が、無意識のうちに抜け出せない子供という感じで位置づけています。

まだ中学2年生であり、そんな小さいのに頂点に立ってしまう彼女には努力しても実らない人の気持ちは理解出来ず、悪意はなくなるとも傷つけてしまうのではないかと思いました。

禁書第1話でも彼女はスキルアウトの連中を見下しています、理

解出来ているなら上条さんを追いかけて回したり会うなり電撃飛ばしたりしないでしょうし。

もちろん、あの子が良い子だということは理解もしています。

だからこそ、間違っても正せると思いました。

さて、次回はついに戦闘、の前の由樹と航真の謎会話集。

ですが、2人が子供を助けるために躍起になる………って感じを表せたら良いなあと。

ぜひ、これからも応援よろしくお願いします。

13話：動き出す仕事人へおとなたち

第7学区にある病院を出るために入口への廊下を歩いている途中、ナースステーションを通りかかった時だ。

由樹の視界にぶつきらぼうに立つ男が入った。真夏だというのに黒いコートを着て、他の患者や面会者から若干奇異な目を向けられながらも、彼は目を閉じたまま壁に背を預けている。

その手には竹刀袋。その姿をまじまじと見て、由樹は腕を組んだ。

「……………随分と本格的な格好だな」

「上条は先生のトコに預けてきた。まあ、今頃起きてるだろう」

航真の言葉にそっか、とだけ返す。メールで上条当麻が戦闘に巻き込まれた、と知らされていたが彼に任せておけば大丈夫だろうという確信があったので、詳しい事は聞いていない。

魔術師という存在は航真から聞かされてはいたが、具体的にどのような人間でどのような存在なのかは知らない。実際に会った事がないので、基本的にそちらは彼に任せっぱなしである。

航真は壁から離れて由樹の前に立つと、目を細めた。

「さきほど、警備員アンチスキルが動き出していた。『幻想御手レベルアップ』の開発者を確保に向かったようだ」

「相変わらず”上”からの命令が入った時は早いよね」

「開発者は”木山春生”。大脳生理学の研究者だ」

その名前に、由樹は予想外だったという顔をする。木山といえばこの前、佐天が独白したときに御坂達とやってきた研究者だ。

「へえ、あの人か」

「知り合いだったか？ 今頃、どっかで警備員アンチスキルと接触しているだろう」

「だけど、大人しく捕まるとは思えないね」

「ただの研究者だぞ？」

「ただの研究者にろくな奴がいたか？」

「……………いなかったな。あのクソジジイしかり」

少し長い沈黙の後に応える航真に、由樹は肩をすくめて見せる。

さくさく進んでいく話しの中で、2人は互いに質問を投げかける事はしない。どちらも相手がやりたい事は察しているし、しようとして

している事は同じだ。

「なら急ごう。きつと御坂が喧嘩売ってる」

「超能力者^{レベル5}がお相手とは……………出る必要はないんじゃないか？」

確かに御坂は超能力者^{レベル5}で、さらに麦野よりも上の第3位。話しては出力は麦野の方が上だが応用力などで御坂が起点が利くからだからとかい色々があるが、つまり女子中学生である彼女もそれなりの力を持った化物ということだ。

いかに研究者である木山がそれ相応の対応をしているとしても、御坂を容易に撃破出来るとは考えにくい。

だが、木山以上の脅威が学園都市にはある。

「お前が逃した奴も動きだしてるらしい」

ぴくりと、航真の表情は強張った。そして由樹を見るその目は、どこか非難の色を帯びている気がしてならない。

「別に責めるつもりはない。今回の相手は巧妙に隠れるのが上手かった」

「ちっ……………」

舌打ちをかました航真は踵を返し、ちらりとこちらを一瞥する。

「終わらせるぞ。こんなふざけた幻想を^{ものがたり}」

「ああ」

「あー、待った待った」

意気込んでいた2人に突然声がかかり、声がしたナースステーションを振り向く。

ちょうど浅井が白い服を投げつけようと振りかぶっているところであり、投げられた由樹は慌ててそれをキャッチした。

広げて見れば、使い古された感がありつつも白いローブ。どこか裝飾されたソレは正装着のよう見え、由樹にとっては懐かしい代物だった。

「ちよ、これ……………！」

「懐かしいでしょー。アンタが捨てたのを荒って直したんだから。サイズは勘弁なさい」

浅井の言葉に、由樹の瞳は驚愕に染まっていた。

「なん……………で、これを……………？」

「今の君には必要なものですよ。さ、大切な子供達が待ってるんだから、行ってきなさい」

優しく笑むナース長に、由樹は一瞬我を忘れたかのように目を瞬かせる。だが、すぐに約束を果たさなければという思いからか、口元をゆるめるとそれを羽織る。

かつて捨てた時と同じ、少し窮屈な感覚があるが自分が使っていた服だ。

その背中には、『風紀』という文字が。

「行くう」

「ああ」

短く言葉を交わし、2人が病院を出る。途中すれ違つた人達が奇異な目を向けてくるが、今の彼らに気にする様子はない。

外に出て真つ先に駐車場であり、目的はその途中にある黒い四角い箱。

黒い自販機だ。学園都市と外の企業『ベルデイ』が共同開発したという物で、飲料水の販売だけでなく簡単な端末が備わっていて天気予報や時間確認も可能と”外”からしてもハイテク自販機なのである。

だが、それにはもう一つ、隠された機能がある。一般人には絶対知られない、童心をくすぐられるような素敵機能が。

さつそくその機能を発動しようとしたところで、由樹は視線を感じ振り返った。

「あー……………」

そこには今からジュースを買う予定だったであろう、病院服を着た男の子が見え上げていた。

由樹は男の子の両脇に手をやって持ちあげてやり、彼が買いやすいようにしてあげる。彼はにこやかな笑顔になって持っていた小銭を入れてジュースを購入する。

「ありがとう。お兄さん達は何飲むの？」

「ふふん。俺らはこの自販機に別の用があるのさ」

べつのよう？ と首をかしげる男の子に由樹は不敵笑むと、ちらりと相棒を一瞥する。

航真が握っているのはお金ではなく、一枚のカードだ。自販機のように黒塗りで金色のラインが縦に入ったもので、ただのカードではない事は容易に想像出来た。

彼はそれを自販機に差し込む。そこは本来お札を挿入すべき場所であって、電子カードなど吐き出すはずである。

だが、自販機は吐き出すどころか飲み込み、なにかのシステム音が起動していく。航真は端末画面に出てきたボタンを押すと、飲料水を押すボタンがリズムよく点灯していく。

『承認シマシタ。ビークルモードへ移行シマス』

そんな電子音の直後、ブオンというまるでエンジンが唸るような音とともにガシャンガシャンと変形していく。

「うおっ、おっ、おおーっ！」

男の子が目を輝かせてそんな声を漏らすのも仕方がない。

変形していった自販機は黒塗りのバイクとなり、そこに佇んだのだから。

「変形物に心踊らさない男子はいない」

「知るか」

どや顔を作る由樹に冷たい一言を吐き、航真は竹刀袋を持っていくからか後部座席に座る。これからバイクを走らせるというのに、この男は胡坐で乗る気か。

「すっげー！ おじちゃん達正義の味方！？」

子供からすれば自販機がバイクに変形してそれに颯爽と跨る2人組みとくれば、そう捉えても仕方がない。

だが残念なことに、由樹と航真は正義の味方などというものからはかけ離れた存在。そんな肩書きは自分達にはもつたない、もつと持つべきに相応しい主人公達ヒーローが持つべき呼び名だ。

「いいや、しがないおじちゃん達だよ」

そう言っつて由樹は運転座席に跨り、ハンドルを握る。アクセルを何度か試し回しをし、にっこり笑みを浮かべ、

「さあ……………振り切るぜ！」

アクセルを全開にし、2人を乗せた自販機バイクは颯爽と走り出

す。後ろの方で「すっげえええええ！」という声が聞こえてくるが、それも一瞬でドップラー効果により消えて行く。

ヘルメットすらしていない2人は危険という文字などなんのその、というくらいに思い切りスピードを出す。もし黄泉川などの警備員アンチスキルがいれば通報ものであるが、今はその影はどこにもない。

というか後ろのこの男、こちらの身体に掴んでいないのだがどう
いう方向感覚をしているのだろうか。

「意外だった」

猛スピードで駆け抜ける中で、ぽつりと航真が漏らした。

「何が？」

「佐天に『レベルアップ幻想御手』を使わせた。お前なら止めると思っていたのだがな」

ああ、と由樹は頷く。御坂にも言われ自覚はあった。『まやく幻想御手』
を勧めるなんて大人のする事ではないし、普段の自分なら考えもら
れない行動だっただろう。

だけど、と由樹は息をつく。あの時の佐天の話しを、気持ちを、
涙を見て、悪い事だから止めましょうと取り上げる事が出来なかつ
た。

あの子の思いは、覚悟は本物だ。犯罪に至るかはさておき、それ
に近い道を歩もうとした彼女の気持ちは無視して良いものではない。
道徳とか道理ではなく、由樹がそう思った事だ。

「あの子の、あの子達の覚悟を踏みにじって良いわけがない。かと言つて、『レベルアップ幻想御手』の開発者がしている事は認められる事じゃない」

「……………矛盾していないか？」

「世界なんて矛盾ばかりだろ」

ブオオンとエンジンを鳴らし続け、2人を乗せたバイクは道路を疾駆する。夏休みにも入ったからか交通量が多いが、するすると上手く交わして進んでいく。

「子供の頃は真つ直ぐ生きたいと願つて、大人になつて心の奥ではそう願つていても現実はそのを許さない。綺麗事だけじゃ生きていけない、世界はそんな矛盾で溢れかえつてる」

「……………で、現実の矛盾の講義はさておき、実際どうやって意識不明者達を回復させる？」

「『レベルアップ幻想御手』つてのは脳波を弄るソフトウェアみたいなもんだ。膨大な演算のために脳を貸しているのだとしたら、そのソフトウェアをアンインストールすればいい」

「そんな簡単に出来るものなのか？」

「それくらい開発者が用意してるだろ。科学者つてのはウイルスを作るのと同時にワクチンを作るからな」

それに、あの木山という女性がただ自分の力を試したいからなど

の狂気じみた理由でこんな事件を起こすとも考えにくい。もし狂気に走るような科学者なら学園都市に7人としかいない超能力者^{レベル5}が目の前にいて、何もしいわげがないからだ。

ほんの少ししか、1度も会った事がないのに由樹にはそんな確信があった。

仮に作っていなかったとしたら、『^{レベルアップ}幻想御手』を解析して作らせる。拒否は認めない、絶対に。

その時、遠くの方で爆煙が上がり轟音が小さく響いた。バイクを停めて由樹と航真は顔を上げて、その方向を確認する。

「あそこか」

「行くには骨が折れる。迂回するはめになるぞ」

「問題ねえ」

再びハンドルを握り、由樹は獰猛に笑う。

「正面突破だ」

エンジンを吹かして一瞬で猛スピードに至ったバイクはそのまま脇道に入っていく。バイクが到底走るような場所ではない道を平然と進み、由樹はほぼ直角の曲がり角を見事なテクニクで曲がった。

そして、工事中なのか立ち入り禁止の看板を突き破るようにして吹き飛ばし、スピードを下げるどころかぐんぐん上げて。

段差を上手く利用して、宙を舞った。まるで坂が上がって空中に浮遊するかのようには、しかしベルティ社製のバイク性能は宙に浮かぶというレベルを宙を舞うレベルにしてしまうほどのものだ。

宙を舞ったバイクの車輪が付いた先は、

「相変わらず無茶をする」

普通なら到達出来ないはずの高速道路に乗って息をつく航真に、由樹は鼻で笑い飛ばした。

「大切なのは免許じゃない。技術だ」

もはや技術うんぬんというレベルではないのだが、という突っ込みを余所に2人はぐんぐん進んでいく。

その先にあるのが絶望であっても、それを希望に変えるために。

夢を見続ける子供達を、起こすために。

13話：動き出す仕事人へおとなたち（後書き）

ついに動き出した2人の主人公、といっても導入的な感じで戦闘は開始されていませんが。

話しに出てきた自販機バイクは、もちろん「仮面ライダーオーズ」に登場するバイク、ライドベンドラーです。

ライドベンドラーはセルメダルの力で稼働していますが、こちらではベルディカードというもので稼働しています。

これらは由樹達がお偉いさんと知り合いで、ベルディカードはよく貰っているもので本来は売られていない非売品です。

というかバイク変形機構は秘密です。なので普通の人は知りません。

これらは彼らだけでなく藤井や浜面といった面々も使用していく設定です。上条さんは運転出来ません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4321q/>

とある未知の波動能力（アンノウン）

2012年1月7日01時46分発行